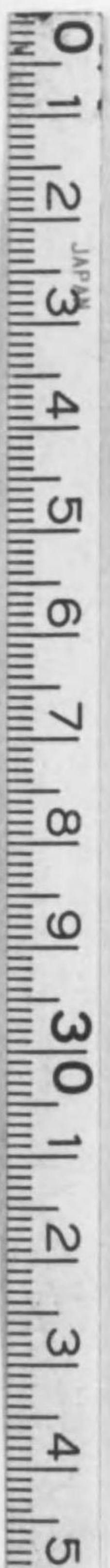


續國譯漢文大成

文學部 四十三

309
65

映
入



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏

空齋本

文學部第四十三册 (第十一帙の三)

白樂天詩集三の三



白樂天詩後集 卷五

律 詩 凡八十
四首。

小歲日對酒唸錢湖州所寄詩

小歲の日酒に對し錢湖州が寄せし所の詩を唸す

獨酌無多興。閒吟有所思。
 一杯新歲酒。兩句故人詩。
 楊柳初黃日。髭鬚半白時。
 蹉跎春氣味。彼此老心知。

獨り酌みて多興無し、閒吟して所思有り。
 一杯新歳の酒、兩句故人の詩。
 楊柳初めて黄なる日、髭鬚半ば白き時。
 蹉跎たり春の氣味、彼此老心知る。

【字解】(一) 故人 舊友。錢湖州を指す。(二) 蹉跎 暇く暇く。(三) 彼此 君と僕と。

【題義】小歲(臘の明日をいふ)の日に酒に對して湖州刺史錢氏から寄せられた詩を吟じて此詩を作つたのである。

【詩意】一杯新歳の酒も獨りで飲んでは一向興が湧かないが、ただ君の兩句の詩を閑吟すれば無量の感慨が起る。柳が黄色の新芽を生ずる此好氣節に、お互は半白の胡麻鹽鬚を垂れて、尾羽打枯らして

律詩 小歲日對酒唸錢湖州所寄詩

ある氣持は、ただ君と僕と相知るのみである。

錢塘湖春行

錢塘湖春行

孤山寺北買亭西

孤山寺の北買亭の西

水面初平雲脚低

水面初めて平かにして雲脚低る。

幾處早鶯爭暖樹

幾處の早鶯か暖樹を争ひ、

誰家新燕啄春泥

誰が家の新燕か春泥を啄む。

亂花漸欲迷人眼

亂花漸く人眼を迷はさんと欲し、

淺草纔能沒馬蹄

淺草纔に能く馬蹄を沒す。

最愛湖東行不足

最も湖東を愛し行けども足らず、

綠楊陰裡白沙堤

綠楊陰裡白沙堤。

【字解】(一) 孤山寺 錢塘湖の岸に在る寺の名。買亭は亭の名。

【題義】錢塘湖(杭州に在る湖の名。西湖ともいふ)の邊を春行遊したことを敍した詩である。

【詩意】湖山寺の北買亭の西のあたりは、水平かに雲垂れ、早鶯があちこちに樹を争つて啼き、新燕が泥を啄んでゐる。花は漸く咲き亂れて人の眼を迷はし、道端の草も馬の蹄を沒するほどになつた。

吾は錢塘湖東の景色が好きで、綠楊の蔭、白沙の堤はいくら行遊しても飽きない。

題靈隱寺紅辛夷花戲酬光上人

靈隱寺の紅辛夷花に題し、戲に光上人に酬ゆ

紫粉筆含尖火焰

紫粉筆は尖き火焰を含み、

紅臙脂染小蓮花

紅臙脂は小蓮花を染む。

芳情香思知多少

芳情香思知ぬ多少ぞ、

惱得山僧悔出家

山僧を惱まし得て出家を悔いしむ。

【題義】靈隱寺(杭州に在る寺の名)の紅の辛夷の花に題し、戲に光上人(僧の名)に酬いた詩である。

【詩意】紫粉筆は其尖端に火の如き紅を含み、小蓮花の如き辛夷の花を描き成した。この艶なる花には無限の芳情香思があつて山僧を惱まし、出家したことを悔いしめるであらう。

重向火

重ねて火に向ふ

火銷灰復死疎棄已經旬

火銷えて灰復死す、疎棄せられて已に旬を経たり。

律詩 錢塘湖春行 題靈隱寺紅辛夷花戲酬光上人 重向火

【字解】(一) 紫粉筆 兎毛を以て製せし筆。その鋒尖利にして小楷を書するに宜し。(二) 紅臙脂 紅色の繪の具。(三) 知多少 定めて多いであらうといふ意。(四) 山僧 光上人を指す。

豈是人情薄。其如天氣春。
風寒忽再起。手冷重相親。
却就紅爐坐。心如逢故人。

豈是人情の薄きならんや、天氣の春なるを其如せん。
風寒忽ち再び起り、手冷にして重ねて相親む。
却りて紅爐に就きて坐すれば、心は故人に逢ふが如し。

【字解】【一】故人 舊友。

【題義】一旦棄てた爐を更に圍んで暖を取つたことを述べた詩である。

【詩意】火も消え灰も冷えて既に十日ばかり爐が棄てられてゐる。人情が薄いわけではないが、春になつて暖氣が増した爲である。所が寒氣が逆轉したので、又爐に親しんで手をかざした。その氣持は舊友にでも逢つたやうである。

候仙亭同諸客醉作

候仙亭にて諸客と同じく酔うて作る

謝安山下空携妓

謝安は山下に空しく妓を携へ、

柳惲洲邊只賦詩

柳惲は洲邊に只詩を賦す。

爭及湖亭今日會

争でか湖亭今日の會に及かん、

嘲花詠水贈蛾眉

花を嘲り水を詠じて蛾眉に贈る。

【字解】【一】謝安 晉の陽夏の人、少うして重名あり。微辟せらる

れども曾就かず。東山に隱居し妓を以て相從ふ。年四十餘にして始めて出でて桓温の司馬となる。【二】柳

惲 樂の人、字は文暢、詩に巧なり。【三】湖亭 候仙亭をいふ。鐘磬湖邊に在る故なり。【四】蛾眉 美妓をいふ。

【題義】候仙亭で諸客と酣醉して作つた詩である。

【詩意】謝安は東山の下にただ妓を携へて遊んだのみで、柳惲は湖洲の邊にただ詩を賦して樂んだのみである。されば今日の湖亭の會の、花を嘲り水を詠じ美妓に贈りなどする樂には、到底比ぶべくもなかつたのである。

城上

城上

城上鞞鞞鼓。朝衙復晚衙。

城上鞞鞞たる鼓、朝衙復晚衙。

爲君慵不出。落盡遠城花。

君の慵くして出でざるが爲に、落盡す城を遠る花。

【字解】【一】鞞鞞 太鼓の音。【二】朝衙 朝の官署の禮式。早衙ともいふ。晚衙は夕の禮式。【三】君 樂天自ら謂ふ。

【題義】職務に執掌して空しく春を過したことを惜んだ詩である。

【詩意】城上にドンドンと太鼓の音がする。あの音を合圖に朝晚役所に勢揃して、出遊する暇もなく暮してゐる中に、憎やあの音が城中の花を落し盡してしまつた。

早行林下

早に林下を行く

律詩 候仙亭同諸客醉作 城上 早行林下

披衣未冠櫛。晨起入前林。
 宿露殘花氣。朝光新葉陰。
 傍松人迹少。隔竹鳥聲深。
 閒倚小橋立。傾頭時一唵。

【字解】 〔一〕宿露。夜露。

【題義】 朝早く林下を逍遙した時の詩である。

【詩意】 まだ髪も櫛らず冠も被らずに著物を引っかけ、朝早く起きて林の中に遊んだ。夜露の置いた花の香が尙残り、旭を受けた新葉の陰が美しい。松の小路には人の足跡もなく、竹藪の奥から鳥の聲が泄れる。ふと小橋の上立つて小頭を傾けて微吟した。

送李校書趁寒食歸義興山居

李校書が寒食を趁うて義興の山居に歸るを送る

大見騰騰詩酒客。大に騰騰たる詩酒の客を見るに、
 不憂生計似君稀。生計を憂へざること君に似たるは稀なり。
 到舍將何作寒食。舍に到りて何を將て寒食を作さん、

【字解】 〔一〕騰騰。健情に耽る意。

〔二〕生計。活計なり。

滿船唯載樹陰歸。滿船唯樹陰を載せて歸る。

【題義】 李校書（校書は官名）が寒食（冬至を去る百五日目をいふ）にさしかかつて義興（今の江蘇省宜興縣）の山居に歸るのを送る詩である。

【詩意】 騰騰として遊情に耽る詩酒の客も随分多く見たが、君のやうに生計に頓著しない者は稀である。今や山居に歸つて何を以て寒食を祝ふ積りであらうか、船中には無一物で、唯美しい樹陰がさしてあるばかりである。

題孤山寺山石榴花示諸僧衆

孤山寺の山石榴花に題し諸僧衆に示す

山榴花似結紅巾。山榴の花は紅巾を結ぶに似たり、
 容艷新妍占斷春。容艷新妍春を占斷す。
 色相故開行道地。色相は故らに行道の地に開き、
 香塵擬觸坐禪人。香塵は坐禪の人に觸れんと擬す。
 瞿曇弟子君知否。瞿曇の弟子君知るや否や、
 恐是天魔女化身。恐らくは是れ天魔女の化身ならん。

【字解】 〔一〕占斷。占領する。斷は助辭。〔二〕色相。佛語。一切の外物凡そ形式あるもの皆之を色相といふ。ここは山石榴花をいふ。行道は佛道を修行すること。〔三〕香塵。花の香。〔四〕瞿曇弟子。佛弟子。君は僧を指していふ。〔五〕化身。幻身なり。

【題義】孤山寺（杭州の錢塘湖上に在る寺の名）の山石榴の花に題して寺僧共に示した詩である。
 【詩意】山石榴の花が紅の巾を結んだやうに、美しく春を我が物顔に占領してゐる。それが故らに佛道修行の地に咲き亂れ、花氣が坐禪する人を襲はんとする位である。佛弟子たる君等は知るや知らずや、此花こそは天魔女の化身ではあるまいか。

獨行

獨行

闇誦黃庭經在口。闇に黃庭經を誦して口に在り、

閒攜青竹杖隨身。閒に青竹杖を攜へて身に隨ふ。

晚花新筍堪爲伴。晚花新筍伴と爲すに堪へたり、

獨入林行不要人。獨り林に入り行きて人を要せず。

【題義】獨り閑歩する樂を述べた詩である。

【詩意】黃庭經を暗誦しながら青竹杖をついて閑歩すれば、遅咲の花や新しい筍などの道邊となすに足るものがあるから、人と連れ立つて歩く必要は少しもない。

【字解】一 黃庭經 道家の書名。

二月五日花下作

二月五日花下の作

二月五日花如雪。二月五日花雪の如く、

五十二人頭似霜。五十二の人頭霜に似たり。

聞有酒時須笑樂。酒有るを聞く時須らく笑樂すべし、

不關身事莫思量。身に關せざる事は思量すること莫れ。

羲和趁日沈西海。羲和日を趁うて西海に沈み、

鬼伯驅人葬北邙。鬼伯人を驅りて北邙に葬る。

只有且來花下醉。只且らく來りて花下に醉ふ有り、

從人笑道老顛狂。人の笑うて老いて顛狂すと道ふに従かす。

【題義】長慶三年二月五日杭州刺史たりし時、花の下で作つた詩である。

【詩意】今日しも二月五日となり花は亂れ咲いて雪の如く、吾は既に五十二歳の老翁となり、頭髮が霜の如くである。吾は世事を抛擲し去り、唯酒があると聞けば樂んで笑ひ、身に關はらぬ事は一切心に留めない。古來歲月は過ぎ易く人命は果敢ないものであるから、只暫しの暇を偷んで花下に酔ふのであつて、人が老いばれて氣がふれたと評するであらうが、何とでも勝手に評するがよい。

【字解】一 五十二 樂天時に年五十二。

二 思量 考慮する。
 三 羲和 日輪の御者。
 四 鬼伯 鬼のかしら。北邙は洛陽の北に在る墓地。

戲題木蘭花

戲れに木蘭の花に題す

紫房日照騰脂拆

紫房日照らして騰脂拆き、

素艶風吹膩粉開

素艶風吹いて膩粉開く。

怪得獨饒脂粉態

怪み得たり獨り脂粉の態饒きを、

木蘭曾作女郎來

木蘭曾て女郎と作り來れり。

いふ女子が父に代つて逢を成ること十二年、誰も其の女子たることを知らなかつたといふことを戲した長詩である。

【題義】 戲れに木蘭の花に題した詩である。

【詩意】 紫の花房を日が照らすと拆いて騰脂をつけた美人のやうになり、白く艶麗した花を風がな

ぶつてゐる所は膩粉をつけた美人のやうである。なせかう脂粉の態が多いのかと怪んだが、それもその筈であつた、木蘭はもと女郎であつたのだもの。

【字解】 【一】 木蘭 木の名。木莖

ともいふ。 【二】 紫房 紫色の花房

騰脂は顔料。 【三】 膩粉 お

しろい。 【四】 脂粉 脂及び膩粉。

【五】 女郎 女子にして男子の才あ

る者。木蘭辭に不知木蘭是女郎とあ

る。木蘭辭は無名氏の作で、木蘭と

清明日觀妓舞聽客詩

清明の日妓の舞を觀、客の詩を聽く

看舞顏如玉聽詩韻似金

舞を看れば顏玉の如く、詩を聽けば韻金に似たり。

綺羅從許笑絃管不妨吟

綺羅は許笑するに從かせ、絃管は吟を妨げず。

可惜春風老無嫌酒盞深

春風の老ゆるを惜む可し、酒盞の深きを嫌ふ無かれ。

辭花送寒食併在此時心

花を辭して寒食を送る、併せて此時の心に在り。

【字解】 【一】 清明 三月の無節の名。寒食の後に當る。 【二】 綺羅 うすぎめの著物。 【三】 酒盞 さかづき。

【題義】 清明の日に妓の舞を視、客の詩を聽いて作つた詩である。

【詩意】 舞妓の顔は玉の如く美しく、客の詩は金の如き響がある。舞衣は人の嘆賞するに任せ、管絃は詩を吟するを妨げず。吟するやら舞ふやら負けず劣らずにやつてゐる。春は過ぎ易いのであるからいくらでも飲むがよい。花を送り寒食を送つた遺瀨なき心を露らす爲に。

西湖晚歸回望孤山寺贈諸客

西湖より晚に歸り孤山寺を回望して諸客に贈る

柳湖松島蓮花寺

柳湖松島の蓮花寺、

晚動歸橈出道場

晚に歸橈を動かして道場を出づ。

盧橘子低山雨重

盧橘子低れて山雨重く、

棕櫚葉戰水風涼

棕櫚葉戰ぎて水風涼し。

煙波澹蕩搖空碧

煙波澹蕩空碧を搖かし、

樓殿參差倚夕陽

樓殿參差夕陽に倚る。

【字解】 【一】 歸橈 かへりの舟

の。道場は寺。上句の蓮花寺を

指す。

【二】 盧橘 枇杷なり。

【三】 澹蕩 おはき貌。

【四】 參差 高低一ならざる貌。

到岸請君回首望。岸に到りて請ふ君首を回らして望め、

蓬萊宮在海中央。

蓬萊宮は海の中央に在り。

【五】蓬萊宮 東海中に在る蓬萊山の仙宮。

【題義】西湖（杭州に在り。

錢塘湖ともいふ）から夕方歸つて孤山寺（西湖の邊に在る寺）を願望し

諸客に贈つた詩である。

【詩意】柳湖松島の蓮花寺から夕方舟に乗つて歸らうとすれば、枇杷の枝もたわわになつてゐる所に山雨が降りそそぎ、棕櫚の葉がさらさらと揺いて川風が涼しい。遙に湖上を眺めると煙波が遠く連つて、樓閣が或は高く或は低く夕陽の間に聳えてゐる。岸に着いたら首を回らして觀られよ。恰も蓬萊宮の東海の中に聳えるやうに、孤山寺が屹然と湖中に聳えてゐるであらう。

湖中自照

湖中自ら照す

重重照影看容鬢。重重たる照影に容鬢を看れば、

不見朱顏見白絲。朱顏を見ずして白絲を見る。

失却少年無覓處。少年を失却して覓むる處無し、

泥他湖水欲何爲。湖水に泥他して何をか爲さんと欲する。

【題義】西湖の水に己の影を寫し水鏡を見て作つた詩である。

【字解】【一】照影 みづかがみ。容鬢は容顏なり。【二】朱顏 紅顏なり。若若しき顔色。白絲は白髮。【三】失却 失ふこと。【四】泥他 他は助辭。泥は柔言、物曰泥とあつて、物やはらかにれたること。

【詩意】ちらちらと寫る水鏡によつて吾が容顏を見るに、若若しさは見えなくて、ただ白髮のみが目立つて見える。少年の髻は全く失はれて何處にも見出されず、湖水にねだつて若若しさを要求しても今更如何ともすることは出来ない。

贈蘇鍊師

蘇鍊師に贈る

兩鬢蒼然心浩然。兩鬢蒼然として心浩然、

松窓深處藥爐前。松窓深き處藥爐の前。

攜將道士通宵語。道士を攜へ將ちて通宵語り、

忘却花時盡日眠。花時を忘却して盡日眠る。

明鏡懶開長在匣。明鏡開くに懶くして長く匣に在り、

素琴欲弄半無絃。素琴弄せんと欲して半は絃無し。

猶嫌莊子多詞句。猶嫌ふ莊子の詞句多きを、

只讀逍遙六七篇。只讀む逍遙六七篇。

【字解】【一】蒼然 髮斑白の貌。浩然は廣大の貌。【二】盡日 終日。【三】素琴 しらきの琴。

【題義】蘇鍊師（蘇は姓。鍊師とは道士の徳高く思精なる者の稱）に贈つた詩である。

律詩 湖中自照 贈蘇鍊師

【詩意】僕も兩鬢は白くなつたが心は浩然として物に屈託せず、松窓の奥深い處の藥爐の前に閑坐して、道士（蘇鍊師を指す）を相手に夜もすがら語り合ひ、花の時節をも忘れて終日眠つてゐる。鏡は開くのが厄介なので常に匣の中に棄て置き、素琴を弾せんとすれば絃は半切れてゐる。猶且つ莊子の文句の多いのを嫌ひ、只逍遙游以下の六七篇を読むのみである。

杭州春望

杭州の春望

望海樓明照曙霞

望海樓明かにして曙霞照し、

護江隄白蹋晴沙

護江隄白くして晴沙を踏む。

濤聲夜入伍員廟

濤聲は夜伍員の廟に入り、

柳色春藏蘇小家

柳色は春蘇小が家を藏す。

紅袖織綾誇柿蒂

紅袖は綾を織りて柿蒂を誇り、

杭州出柿蒂花者尤佳也。

青旗沽酒趁梨花

青旗酒を沽りて梨花を趁ふ。

【字解】曙霞 あさやけ。

【一】伍員 字は子胥。誰に由りて吳王夫差に誅せられ、屍を江中に投ぜらる。

【二】蘇小 錢塘の名娼蘇小小。南齊の時の人だらうと謂はれてゐる。

其俗謂酒地樂花時一飲幾爲樂花春。

誰開湖寺西南路

誰か湖寺西南の路を開く、

草綠裙腰一道斜

草綠にして裙腰一道斜なり。

孤山寺在湖洲中。草綠時望如裙腰。

【題義】杭州の春の眺を詠じた詩である。

【詩意】望海樓の附近に朝燒雲の照り輝く時、護江隄の白沙の上を散步すれば、伍員の廟の方はまだ

ほの暗くて濤聲が高く、蘇小小の舊宅の前には柳が青青と茂つてゐる。あちこちに綾錦を織る紅袖の少女も見え、梨の花の咲く時節をめぐりて賣出す酒屋の青旗も見える。誰が孤山寺に行く西南の道を開いたのであるか、裙腰のやうに見える綠草の間に一條の道が斜に通じてゐる。

飲散夜歸贈諸客

飲散し夜歸り諸客に贈る

鞍馬夜紛紛香街起暗塵

鞍馬夜紛紛、香街暗塵を起す。

回鞭招飲妓分火送歸人

鞭を回らして飲妓を招き、火を分ちて歸人を送る。

風月應堪惜杯觴莫厭頻

風月應に惜むに堪へたるべし、杯觴頻なるを厭ふ莫れ。

明朝三月盡忍不送殘春

明朝三月盡きん、殘春を送らざるに忍びんや。

杭州春望 飲散夜歸贈諸客

【字解】【一】紛紛。多き貌。【二】香街。にぎやかな市街。

【題義】宴會が散じて夜歸る時諸客に贈つた詩である。

【詩意】宴が散じてから、鞍馬に跨り暗座を飛ばして東西に歸る。鞭を回らして妓を招く者もあれば、火を分ちて歸人を送る者もある。風月は惜むべきであるから宴會の度重なるをも厭ふべきではない。明朝は三月の晦日であるから、また春を送る宴會を開かねばなるまい。

湖亭晚歸

湖亭晚歸

盡日湖亭臥。心閒事亦稀。

盡日湖亭に臥すれば、心閒にして事も亦稀なり。

起因殘醉醒。坐待晚涼歸。

起くるは殘醉の醒むるに因り、坐するは晚涼を待ちて歸る。

松雨飄藤帽。江風透葛衣。

松雨藤帽を飄し、江風葛衣に透る。

柳堤行不厭。沙軟絮霏霏。

柳堤行きて厭かず、沙軟にして絮霏霏たり。

【字解】【一】盡日。終日。【二】藤帽。藤で作つた帽子。【三】絮。柳絮。柳の花。霏霏は飛散する貌。

【題義】湖亭から夕方自邸に歸る時の詩である。

【詩意】終日湖亭に臥してゐると心も静で是れといふ仕事もない。醉が醒めれば起き晚涼を待つて歸る。松林に降りそそぐ雨が帽を飄し、湖上を吹く風が涼しく葛衣に透る。沙が軟で柳絮の雪の如く飛ぶ堤上を行くのは實に心地よき限で憂く所を知らない。

ぶ堤上を行くのは實に心地よき限で憂く所を知らない。

東樓南望八韻

東樓南望八韻

不厭東南望。江樓對海門。

東南を望むを厭はず、江樓海門に對す

風濤生有信。天水合無痕。

風濤生じて信有り、天水合して痕無し。

鷗帶雲帆動。鷗和雪浪翻。

鷗は雲帆を帯びて動き、鷗は雪浪に和して翻る。

魚鹽聚爲市。煙火起成村。

魚鹽聚まりて市を爲し、煙火起りて村を成す。

日脚金波碎。峯頭鉤點繁。

日脚金波碎け、峯頭に鉤點繁し。

送秋千里鴈。報暝一聲猿。

秋を送る千里の鴈、暝を報ずる一聲の猿。

已豁煩襟悶。仍開病眼昏。

已に煩襟の悶を豁き、仍は病眼の昏を開く。

郡中登眺處。無勝此東軒。

郡中登眺の處、此東軒に勝る無し。

【字解】【一】江樓。即ち東樓なり。海門は錢塘江の兩岸に龜山二山あり、南北對峙すること門の如し、故にいふ。【二】風濤。漸江、即ち杭州は古來潮沙を以て名高し。潮沙が龜山二山の東ゆる所となり勢極めて湍悍、其の來ること萬馬の崩騰するが如し。毎日正しく時刻を誤らずして起る故に有信といふ。【三】鷗。鳥の名。船頭に鷗首をつけてある船。【四】日脚。日あしのさすこと。【五】鉤點。青貝の點點。【六】報暝。日暮を告げる。【七】郡中。杭州。【八】東軒。東樓。

律詩 湖亭晚歸 東樓南望八韻

【題義】東樓の上から南方を望んだ景勝を敘した十六句の詩である。

【詩意】この東樓から東南の海門を望見すれば極めて好い景色である。風濤は時刻を違へずに起り、天と水とが相合して一となり、鷓首の舟は雲帆を揚げて動き、鷗は雪浪と相和して翻り、魚や鹽が聚まつて市をなし、煙火が起る處に村がある。日脚の射す處は金波が碎け、峯の巔は青貝のやうにきらきらする。天上には秋雁の飛ぶのを見、山下には猿猴の啼くの聞き、既に心の煩悶を一洗するを得、又病眼を快くすることが出来た。杭州では此東樓が第一等の眺めである。

醉中酬殷協律

醉中殷協律に酬ゆ

泗水城邊一分散。泗水城邊一たび分散し、

浙江樓上重遊陪。浙江樓上に重ねて遊陪す。

揮鞭二十年前別。鞭を揮ひて二十年前に別れ、

命駕三千里外來。駕を命じて三千里外に來る。

醉袖放狂相向舞。醉袖狂を放にして相向ひて舞ひ、

愁眉和笑一時開。愁眉笑に和して一時に開く。

【字解】(一) 泗水 川の名。分

散は手を分ちて別れよ。

(二) 浙江 杭州。遊陪は相伴つて遊ぶ。

留君夜住非無分。君を留めて夜住せしむるは分無きに非ず、

且盡青娥紅燭臺。且盡さん青娥の紅燭臺。

(三) 無分 いはれなきこと。

【題義】酔つて殷協律(協律は官名)に酬いた詩である。

【詩意】今より二十年前泗水の邊で互に鞭を揮つて別れたが、今復三千里外の浙江の樓上で相伴つて遊ぶことになつた。因つて狂態の限を盡して醉舞し、愁眉を開いて大笑した。君を引留めて夜まで置くのは決して理由のないことではない。美妓を相手に紅燭の下で十分に醉を盡さうではないか。

孤山寺遇雨

孤山寺にて雨に遇ふ

拂波雲色重。酒葉雨聲繁。

波を拂ひて雲色重く、葉に酒ぎて雨聲繁し。

水鷺雙飛起。風荷一向翻。

水鷺雙び飛んで起り、風荷一向ひて翻る。

空濛連北岸。蕭颯入東軒。

空濛として北岸に連り、蕭颯として東軒に入る。

或擬湖中宿。留船在寺門。

或は湖中に宿せんと擬し、船を留めて寺門に在り。

【字解】(一) 風荷 風に吹かれる蓮の葉。

(二) 空濛 濛濛として小晴き貌。

(三) 蕭颯 風の音。

律詩 醉中酬殷協律 孤山寺遇雨

【詩意】荒波の上には雲が重げに罩め、木の葉には雨の脚が繁くそそぎ、鷺が水上に相雙んで飛び、蓮の葉が一樣に風に靡いて飄り、濛濛として北岸まで小暗く、風が蕭颯として東の軒端まで吹き込む。今夜は湖上の寺に一宿しようかと思つて寺の門前に船を留めて置いた。

樟亭雙櫻樹

樟亭の雙櫻樹

南館西軒兩樹櫻

南館西軒兩樹の櫻

春條長足夏陰成

春條長じ足りて夏陰成る。

素華朱實今雖盡

素華朱實今盡きたりと雖も、

碧葉風來別有情

碧葉風來りて別に情有り。

【題義】樟亭驛（杭州の驛の名。後の醉送李協律赴湖南辟命因寄沈八中丞參照）の二本の櫻桃樹についての詩である。

【詩意】南館西軒の前の二本の櫻桃樹は枝が長く伸びて陰を成してゐる。今は花も實も盡きて無くなつてしまつたけれども、緑の葉の風にそよぐ様も亦棄て難い風情がある。

【字解】(一) 春條 春の枝。

(二) 素華 白花。朱實は赤い實。

湖上夜飲

湖上夜飲

郭外迎人月湖邊醒酒風

郭外人を迎ふる月、湖邊酒を醒す風。

誰留使君飲紅燭在舟中

誰か使君を留めて飲ましむる、紅燭舟中に在り。

【字解】(一) 使君 刺史の稱。ここは杭州刺史白樂天自ら謂ふ。

【題義】湖上で夜酒を飲んだことを賦した詩である。

【詩意】郭外には人を迎へ顔に月が輝き、湖邊には酒を醒す風が涼しく吹いてゐる。定めて美妓が刺史殿を引留めて飲ませてゐるのであらう、舟の中には紅燭があかあかとついでゐる。

贈沙鷗

沙鷗に贈る

老逼教垂白官科遺著緋

老は逼りて白を垂れしめ、官は科ありて緋を著せしむ。

形骸雖有累方寸却無機

形骸は累有りと雖も、方寸は却りて機無し。

遇酒多先醉逢山愛晚歸

酒に遇ひて多く先づ酔ひ、山に逢ひて愛して晩に歸る。

沙鷗不知我猶避隼旗飛

沙鷗は我を知らず、猶隼旗を避けて飛ぶ。

【字解】(一) 白 白髮。(二) 科 階級。位階。緋は紅色。刺史は緋衣を着る。(三) 方寸 心なをいふ。機は機心。巧詐の心。莊子天地篇に、有「機事者必有機心」とある。列子黃帝篇に、海上之人有「好鷗鳥」者、每旦之海上從鷗鳥游、鷗鳥之至者、百數

而不止。其父曰、吾聞鷓鴣昔從汝游。汝取來、吾玩之、明日之海上、鷓鴣舞而不下也。機心なければ鷓鴣舞れ、機心あれば去つて来らず。【一】隼、隼の類の鳥。隼を畫きし處。

【題義】沙上の鷓鴣に贈つたといふ詩である。

【詩意】身は老境に入つて白髪を垂れ、官階は刺史となつて耕衣を着ることが出来るやうになつた。體には累があるけれども心には何等の巧がない。ただ酒に遇へば先づ自ら飲み、山に逢へば之を愛して晩く歸るのみである。湖上の沙鷓は我の此の如きを知らず、我が建つる隼旗を避けて逃げるのは何事であるか。

餘杭形勝

餘杭の形勝

餘杭形勝四方無

餘杭の形勝四方に無し、

州傍青山縣枕湖

州は青山に傍ひて縣は湖に枕む。

遠郭荷花三十里

郭を遶る荷花三十里、

拂城松樹一千株

城を拂ふ松樹一千株。

夢兒亭古傳名謝

夢兒亭古りて傳へて謝と名け、

教妓樓新道姓蘇

教妓樓新にして道ひて蘇を姓とす。

【字解】【一】餘杭、杭州をいふ。

【二】荷花、蓮花。

【三】夢兒亭、亭の名。宋の謝靈運、小名は容兒。

州西靈隱山上、有夢兒亭、卽是杜明浦夢謝靈運之所。因名容兒也。蘇小小、本錢塘妓也。

獨有使君年太老

獨り使君の年太だ老いたる有り、

風光不稱白髭鬚

風光稱はず白髭鬚。

【題義】杭州の形勝を詠じた詩である。

【詩意】杭州のやうな景勝の地は恐らく何處にもあるまい。州は青山に傍ひ縣は西湖に枕み、郭を繞つて蓮花が三十里に亘り、城中には松樹が千本もある。歴史的に見れば謝靈運を夢みたといふ夢兒亭や蘇小小の教妓樓も今尙存してゐる。ただ刺史殿が老年で、風光が其白鬚につりあはないのが玉に疵である。

【四】使君、刺史の稱。ここは杭州刺史たる白樂天自ら謂ふ。

江樓夕望招客

江樓夕望客を招く

海天東望夕茫茫

海天東に望めば夕茫茫たり、

山勢川形濶復長

山勢川形濶くして復長し。

燈火萬家城四畔

燈火萬家城の四畔、

星河一道水中央

星河一道水の中央。

【字解】【一】茫茫、廣廣としてゐる貌。

【二】星河、あまのがは。一道は一筋。

風吹古木晴天雨。風は古木を吹く晴天の雨、
 月照平沙夏夜霜。月は平沙を照す夏夜の霜。
 能就江樓銷暑否。能く江樓に就きて暑を銷せんや否や、
 比君茅舍校清涼。君が茅舍に比すれば校清涼。

【題義】江樓の上から四方を眺望し、客を招いて共に一宵の歡を盡さうとした詩である。

【詩意】夕に東方海上の天を望めば山河の形勢が茫茫として空濶である。城市は四方の端まで燈火を以て満たされ、一筋の天河が西湖の中央を横ぎり、風は古木を吹いて晴天に何の雨ぞと怪まれ、月は平沙を照して夏の夜の霜かと疑はれる。君も此樓に来て共に暑を銷してはどうか。君の茅屋よりは餘程清涼であらうから。

新秋病起

新秋病起

一葉落梧桐。年光半又空。一葉梧桐落ち、年光半又空し。
 秋多上階日。涼足入懷風。秋は多し階に上る日、涼は足る懷に入る風。
 病瘦形如鶴。愁焦鬢似蓬。病み瘦せて形鶴の如く、愁へ焦れて鬢蓬に似たり。

損心詩思裏。伐性酒狂中。心を損す詩思の裏、性を伐る酒狂の中。

華蓋何曾惜。金丹不致功。華蓋何ぞ曾て惜まん、金丹功を致さず。

猶須自慙愧。得作白頭翁。猶須らく自ら慙愧すべし、白頭の翁と作るを得たるを。

【字解】(一) 伐性 杖乘の文に暗曲斲削、伐性之弊とある。(二) 華蓋 美しき車のほろ。高位高官に喻ふ。(三) 金丹 道士の服用する長生藥。

【題義】病癒えて新秋に遇うたことを述べた詩である。

【詩意】もう梧桐の葉が落ちるやうになり、今年も空しく半を過ぎた。階段を照す日にも秋の色があり、懷に入る風も何となく涼しい。吾は病後で鶴のやうに瘦せ、鬢は蓬のやうに亂れ、常に詩の爲に心を勞し、酒狂の中に性を傷つてゐる。官位などは敢て惜むに足らないが、金丹も壽命を延ぶる能はざるは遺憾である。併し幸に死を免れて白頭翁となることを得たのは、自ら省みてありがたいと思ふべきである。

木芙蓉花下招客飲

木芙蓉の花下客を招いて飲む

晚涼思飲兩三盃。晚涼飲まんことを思ふ兩三杯、
 召得江頭酒客來。召き得て江頭酒客來る。

律詩 新秋病起 木芙蓉花下招客飲

莫怕秋無件醉物。怕るる莫れ秋醉に件ふ物無きを、
水蓮花盡木蓮開。水蓮花盡きて木蓮開く。

【題義】木蓮の花の下で客を招いて酒を飲んだことを述べた詩である。

【詩意】晚涼に乘じ一醉しようと思つて客を招いた所が、幸に酒客が江頭に集まつて来た。秋醉眼を慰める物のないのを患ふるには及ばない。水蓮の花は盡きても木蓮の花が開いてゐるから。

悲歌

悲歌

白頭新洗鏡新磨。

白頭新に洗ひて鏡新に磨く、

老逼身來不奈何。

老は身に逼り來りて奈何ともせず。

耳裏頻聞故人死。

耳裏頻に故人の死を聞き、

眼前唯覺少年多。

眼前唯少年の多きを覺ゆ。

塞鴻遇暖猶回翅。

塞鴻暖に遇へば猶翅を回し、

江水因潮亦反波。

江水潮に因りて亦波を反す。

獨有衰顏留不得。

獨り衰顏の留め得ざる有り、

【字解】(一)故人 舊友。

(二)塞鴻 北邊に歸る雁。

醉來無計但悲歌。

醉ひ來りて計無く但悲歌す。

【題義】身の衰老を嘆じた詩である。

【詩意】白毛頭を洗ひ新に磨いた鏡に照して見れば、日に日に老が増えて來て如何ともし難い。耳には頻に舊友の死を聞き、眼前には唯若い人ばかり目につく。雁は暖氣に遇うて又北に歸り、江水は潮に因つて亦海に反るが、吾が衰顏ばかりは留めん術もなく、醉ひ來つて但悲歌するのみである。

江樓晚眺景物鮮奇吟翫成篇寄水部張籍員外

江樓にて晚に景物の鮮奇なるを眺め、吟翫して篇を成し、水部張籍員外に寄す

澹煙疎雨間斜陽。

澹煙疎雨斜陽に間り、

江色鮮明海氣涼。

江色鮮明にして海氣涼し。

蜃散雲收破樓閣。

蜃散じ雲收りて樓閣を破り、

虹殘水照斷橋梁。

虹残り水照して橋梁を斷つ。

風翻白浪花千片。

風は白浪を翻して花千片、

鴈點青天字一行。

鴈は青天に點じて字一行。

【字解】(一)海氣 海風といふが如し。

(二)蜃 蜃氣樓。

(三)橋梁 虹の形。

律詩 悲歌 江樓晚眺景物鮮奇吟翫成篇寄水部張籍員外

好著丹青圖寫取。好し丹青を著して圖寫し取り、
題詩寄與水曹郎。詩を題して寄せ與へん水曹郎。

【一】丹青 繪の具。
【二】水曹郎 水部員外郎張籍を指す。

【題義】夕方江樓の上から景色の鮮奇なるを眺めて此詩を作り、水部員外郎張籍に寄せたのである。
【詩意】いつしか小雨もやんで夕日が現れ、湖の色が鮮に海上から吹き来る風が涼しい。やがて雲が收まつて蜃氣樓が破れ、虹の橋が湖水を横切り、風は白浪を翻して花の飛散するが如く、雁は青天に點點として一行の字を綴つたやうである。實に一枚の彩色畫に寫し取り、詩を題して君に寄贈したいほどの好風景である。

夜招周協律兼答所贈

夜周協律を招き、兼ねて贈る所に答ふ

滿眼雖多客。開眉復向誰。

眼に滿ちて客多しと雖も、眉を開きて復誰にか向はん。

少年非我伴。秋夜與君期。

少年は我が伴に非ず、秋夜君と期す。

落魄俱耽酒。殷勤共愛詩。

落魄俱に酒に耽り、殷勤に共に詩を愛す。

相憐別有意。彼此老無兒。

相憐むこと別に意有り、彼此老いて兒無し。

【字解】【一】期 會合の約を指ぶこと。【二】落魄 おちぶれてゐること。【三】殷勤 れんごりに。【四】彼此 君も僕も。

【題義】夜周協律（協律は官名）を招待し、且嘗て贈られた詩に答へた詩である。

【詩意】目の前に多くの客が居るけれども、心から打解けて語らふべき人は一人もない。年の若い者は話合はないから、君と秋の夜を一緒に送りたいものである。お互に落ちぶれて俱に酒に耽り、又共に詩を熱愛する。そればかりでなく、君も僕も老いて子のないのが、また相憐む意の深い理由であらう。

重酬周判官

重ねて周判官に酬ゆ

秋愛冷吟春愛醉。

秋は冷吟を愛し春は醉を愛す、

詩家眷屬酒家仙。

詩歌の眷屬酒家の仙。

若教早被浮名繫。

若し早く浮名に繫がれしめば、

可得閒遊三十年。

閒遊すること三十年なるを得べけんや。

【題義】重ねて周判官（判官は官名）に酬いた詩である。

【詩意】秋は詩を吟ずることを好み春は酒に酔ふことを好む。實に我は詩家の家族でもあり酒仙でもある。併し早くから名利に束縛せられる身であつたならば、三十年の久しき閒遊を事とすることは出来なかつたであらう。

飲後夜醒

飲後夜醒む

黃昏飲散歸來臥。黃昏飲散じ歸り來りて臥す、
 夜半人扶強起行。夜半人扶けて強ひて起ち行かしむ。
 枕上酒容和睡醒。枕上の酒容睡に和して醒め、
 樓前海月伴潮生。樓前の海月は潮に伴ひて生ず。
 將歸梁燕還重宿。將に歸らんとする梁燕還重ねて宿し、
 欲滅窓燈却復明。滅せんと欲する窓燈却つて復明かなり。
 直至曉來猶妄想。直に曉來に至りて猶妄想す、
 耳中如有管絃聲。耳中管絃の聲有るが如きを。

【字解】(一) 梁燕 梁上の燕。
 燕は雙様を喜ぶ。故に夫婦を稱して
 燕侶といふ。

【詩意】夕方宴會が散じてから歸つて寢たが、夜半に人が扶け起して床に就かしめた。床に就いてからは醉も睡も醒めてしまつて、潮と俱に上つた樓前の海月を眺め、將に歸らんとする梁上の燕(燕は春來て秋歸る)が重ねて宿し、滅えかかつた窓燈が復更に明るなるのを見、夜の明けるまで耳に管絃の聲が聞えるやうに想はれた。

代賣薪女贈諸妓

薪を賣る女に代りて諸妓に贈る

亂蓬爲鬢布爲巾。亂蓬を鬢と爲し布を巾と爲す、
 曉蹋寒山自負薪。曉に寒山を蹋みて自ら薪を負ふ。
 一種錢塘江畔女。一種錢塘江畔の女、
 著紅騎馬是何人。紅を著け馬に騎るは是れ何人ぞ。

【字解】(一) 一種 同一の人といふ意。
 (二) 騎馬 寒山堂外紀に、唐時枕妓、燕會に承應すれば、皆馬に騎りて以て從ふを得たりとある。

奉和李大夫題新詩二首各六韻

李大夫が新詩二首を題せるに和し奉る各六韻

因嚴亭

因嚴亭

箕穎人窮獨蓬壺路阻難。箕穎は人窮獨、蓬壺は路阻難。
 何如兼吏隱復得事躋攀。何ぞ如かん吏隱を兼ね、復躋攀を事とするを得るに。

律詩 飲後夜醒 代賣薪女贈諸妓 奉和李大夫題新詩二首各六韻 因嚴亭

巖樹羅階下。江雲貯棟間。

巖樹階下に羅り、江雲棟間に貯ふ。

似移天目石。疑入武丘山。

天目の石を移すに似たり、武丘の山に入るかと疑ふ。

清景徒堪賞。皇恩肯放閑。

清景徒賞するに堪へたり、皇恩肯て放閑せんや。

遙知興未足。即被詔徵還。

遙に知る興未だ足らざるに、即ち詔して徵し還さるるを。

【字解】【一】箕穎。高士傳に、許由聞堯徵天下二而讓焉、乃退而適於中嶽、颯水之陽、箕山之下二とある。因つて隱者の居る所を箕穎といふ。【二】蓬萊。蓬萊なり。東海中の三仙山の二。【三】吏隱。官吏と隱者。【四】天目。山の名。浙江省臨安縣の西北五十里に在り。

【題義】李大夫（陳議大夫李景檢を指すか）が新に因嚴亭と忘筌亭とに題した詩に和した六韻十二句の詩である。

【詩意】箕穎は窮獨の人の居る處で、蓬萊は路遠く險難である。されば箕穎の隱者も蓬萊の仙人も、君が吏と隱とを兼ね因嚴亭に登攀することを得るには及ばない。亭の階段の下には巖樹が羅り、棟の間には江雲が漂ひ、天目山の石を移したるが如く、武丘の山に入りしかと疑はれる。亭の清景は誠に賞するに足るが、皇恩は永く君を開地に置くことをせず、興の未だ足らぬうちに早くも詔を蒙つて徵し還されるであらう。

忘筌亭

忘筌亭

翠嶺公門對。朱軒野逕連。

翠嶺は公門に對し、朱軒は野逕に連る。

只開新戶牖。不改舊風煙。

只新戶牖を開き、舊風煙を改めず。

虛室閒生白。高情澹入玄。

虛室は閒にして白を生じ、高情は澹くして玄に入る。

酒容同座勸。詩借屬城傳。

酒は同座に勸む容し、詩は屬城に傳はるを借す。

自笑滄江畔。遙思絳帳前。

自ら笑ふ滄江の畔、遙に思ふ絳帳の前。

亭臺隨處有。爭敢比忘筌。

亭臺隨處に有るも、争でか敢て忘筌に比せん。

【字解】【一】翠嶺。青き峰。【二】朱軒。朱塗ののき。【三】生白。光緒がさし込んで明るきこと。莊子人間世篇に虛室生白とある。【四】玄。天なり。【五】屬城。屬縣なり。【六】滄江。青苔とした川。【七】絳帳。後漢書馬融傳に、馬融坐三高堂、施絳帳、前授三生徒、後列三女樂とある。因つて講座を絳帳といふ。

【詩意】緑の峰は公門に對し、朱塗の軒は野徑に連り、もとの風景を損せず、新しく忘筌亭を開いた。その虚室は閑静で明るく、高情は淡く玄天に入り、酒は一座の客に勸むべく、詩は屬縣の間に傳はるであらう。吾は今滄江の畔に貶せられて遙に絳帳の前なる君を思うてゐる。亭臺は到處にあるが忘筌亭のやうな亭は何處にもあるまい。

予以長慶二年冬十月到杭州明年秋九月始

律詩 奉和季大夫題新詩二首各六韻・忘筌亭 予以長慶二年冬十月到杭州遂留絕句

與范陽盧賈汝南周元範蘭陵蕭悅清河崔求
東萊劉方與同遊恩德寺之泉洞竹石籍甚久
矣及茲目擊果愜心期因自嗟云到郡周歲方
來入寺半日復去俯視朱綬仰睇白雲有愧於
心遂留絕句

予長慶二年冬十月以杭州到郡明年秋九月始
元範蘭陵蕭悅清河崔求東萊劉方與同遊恩德寺之泉洞竹石籍甚久矣及茲目擊果愜心期因自嗟云到郡周歲方來入寺半日復去俯視朱綬仰睇白雲有愧於心遂留絕句

雲水埋藏恩德洞。雲水埋藏恩德洞。
簪裾束縛使君身。簪裾束縛使君身。
暫來不宿歸州去。暫來不宿歸州去。
應被山呼作俗人。應被山呼作俗人。

【字解】(一) 簪。評判の高一事。(二) 目。見ること。(三) 郡。杭州を指す。(四) 朱綬。赤色の印綬。刺史の佩ぶる所なり。(五) 簪裾。衣冠といふが如し。使君は刺

史の稱。時に樂天は杭州刺史たり。【六】州。郡といふに同じ。

【題義】恩德寺に遊び感ずる所を賦した詩である。

【詩意】雲や水が深く恩德寺の洞を埋めてゐる。此に反して吾が身には、俗の俗なる衣冠が纏うてゐる。暫く此寺に遊んで一宿もせず歸つては、此山に俗な奴だと笑はれはしまいかと恐れる。

早冬

早冬

十月江南天氣好。十月江南天氣好。
可憐冬景似春華。可憐冬景似春華。
霜輕未殺萋萋草。霜輕未殺萋萋草。
日暖初乾漠漠沙。日暖初乾漠漠沙。
老柘葉黃如嫩樹。老柘葉黃如嫩樹。
寒櫻枝白是狂花。寒櫻枝白是狂花。
此時却羨閒人醉。此時却羨閒人醉。
五馬無由入酒家。五馬無由入酒家。

【字解】(一) 可憐。愛すべし之意。(二) 萋萋。草の茂る貌。(三) 漠漠。廣き貌。(四) 老柘。柘は桑の一種。(五) 狂花。くるひ咲きの花。(六) 五馬。刺史の美稱。樂天時に杭州刺史たり。

律詩 予以長慶二年冬十月到杭州遂留絕句 早冬

【題義】 初冬の光景を詠じた詩である。

【詩意】 江南杭州の十月の天氣は冬とはいひながら春のやうに愛すべきものがある。霜もまだ淺くて草を枯らすには至らず、日は暖かだ。沙原が廣々と乾いてゐる。桑の老樹は嫩樹のやうに黄色の葉を存し、櫻には狂咲きの花が白く咲いてゐる。自分は苟くも杭州刺史の官職を帯びてゐるので酒店に飛び込むことも出來ず、其邊に閑人どもが此景色を賞しつつ酒に酔うてゐるのを羨むのみである。

歲假内命酒贈周判官蕭協律

歲假の内酒を命じて周判官・蕭協律に贈る

共知欲老流年急

共に知る老いと欲して流年の急なるを、

【字解】 〔一〕 歲假 新年の休暇。

且喜新正假日頻

且喜ぶ新正假日の頻なるを。

〔二〕 新正 新年。正月。

鬪健此時相勸醉

健を鬪はして此時相勸めて醉はん、

偷閒何處共尋春

閒を偷んで何の處にか共に春を尋ねん。

脚隨周叟行猶疾

脚は周叟に隨ひて行くこと猶疾し、

頭比蕭翁白未勻

頭は蕭翁に比して白きこと未だ勻しからず。

歲酒先拈辭不得

歲酒先づ拈して辭し得ず、

〔三〕 歲酒 新年の酒。

被君推作少年人。 君に推されて少年の人と作る。

【題義】 新年の休暇中相俱に酒を飲み席上で周判官（前の詩に見ゆる周元範であらう）蕭協律（蕭悦であらう）に贈つた詩である。

【詩意】 お互に年を取つては殊に年月の立つのが早く思はれるが、新年になつて休暇の多いのは嬉しく感ぜられる。因つて健を鬪はし暇を偷んで春を賞し酒を飲まうと相談一決して出掛けたが、吾が脚力は尙周判官よりも速者で、頭髮は蕭協律ほどに白くはない。ささるる儘に先づ杯を傾け、君等に推されて年少者にされてしまった。（新年の祝酒は年少者から先に飲む習慣である。）

與諸客攜酒尋去年梅花有感

諸客と酒を攜へ去年の梅花を尋ねて感あり

馬上同攜今日杯

馬上同じく攜ふ今日の杯、

湖邊共覓去春梅

湖邊共に覓む去春の梅。

年年只是人空老

年年只是れ人空しく老ゆ、

處處何曾花不開

處處何ぞ曾て花開かざらん。

詩思又牽吟咏發

詩思又吟咏を牽いて發し、

律詩 歲假内命酒贈周判官蕭協律 與諸客攜酒尋去年梅花有感

酒酣閒喚管絃來。酒酣にして閒に管絃を喚びて來る。

樽前百事皆依舊。樽前百事皆舊に依れり、

點檢惟無薛秀才。點檢するに唯薛秀才無し。

去年與薛景文同賞今年長逝。

【字解】【一】點檢 一一しらべ

【題義】 諸客を率ゐ酒を携へて去年俱に賞した梅花を尋ね、感ずる所ありて作つた詩である。

【詩意】 馬に乗り俱に酒を携へて湖邊に去年賞した梅を尋ねた。人は年年空しく老朽ちて行くが、到處花は昔ながらに咲き誇つてゐる。ふと詩思が湧き起つて吟詠を發し、酒酣なるに及んで妓を喚んで管絃を奏せしめた。眼前に見る所のものはすべて去年の通りであるが、ただ薛秀才のゐないのが變つてゐる。

醉送李協律赴湖南辟命因寄沈八中丞

醉うて李協律の湖南の辟命に赴くを送り、因つて沈八中丞に寄す

富陽山底樟亭畔。富陽山の底樟亭の畔

立馬停舟飛酒盃。馬を立て舟を停めて酒盃を飛ばす。

曾共中丞情繾綣。曾て中丞と共に情繾綣たり、

【字解】【一】富陽山 杭州に在る山。樟亭は驛の名。【二】酒盃 さかづき。【三】繾綣 れんごろなこと。【四】繾綣 排摺なり。【五】

暫留協律語踟躕。暫く協律を留めて語踟躕す。

紫微星北承恩去。紫微星北恩を承けて去り、

青草湖南意無。青草湖南意に稱ふや無や。

不羨君官羨君幕。君が官を羨まず君が幕を羨む、

幕中收得阮元瑜。幕中收め得たり阮元瑜。

【題義】 李協律が湖南觀察府の召聘に應じて赴任するのを送り、因つて沈八中丞（湖南觀察使沈傳師であらう）に寄せた詩である。

【詩意】 富陽山の麓、樟亭驛の畔で、李協律の赴任を送り、馬を立て舟を停めて別れの杯を酌みかほした。吾は曾て沈中丞とも親交があつたので、そこへ行く李協律を留めて暫く別を惜んで語り合つた。さて沈中丞は皇恩を蒙つて都を去り、今は青草湖南に觀察使となつてゐるが、果して心の満足を得てゐるであらうか如何であらう。それは兎も角もとして僕は沈中丞の官職は敢て羨まないが、李協律といふ昔の阮瑀にも比すべき名書記官を幕中に收め得たことは健康に堪へない。

内道場永謙上人就郡見訪善說維摩經臨別

請詩因以此贈

律詩 醉送李協律赴湖南辟命因寄沈八中丞 内道場永謙上人就郡見訪善說維摩經

内道場の永謙上人郡に就いて訪はる。善く維摩經を説く。別に臨んで詩を請ふ。因つて此を以て贈る。

五夏登壇内殿師。五夏登壇す内殿の師、

水爲心地玉爲儀。水を心地と爲し玉を儀と爲す。

正傳金粟如來偈。正に傳ふ金粟如來の偈、

何用钱塘太守詩。何ぞ用ひん錢塘太守の詩。

苦海出來應有路。苦海出で來る應に路有るべし、

靈山別後無期。靈山別れて後期無かる可けんや。

他生莫忘今朝會。他生忘るる莫れ今朝の會、

虛白亭中法樂時。虛白亭中法樂の時。

云云とある。【二】他生。來世。【一〇】虛白亭。亭の名。法樂は佛法の悦樂。

【題義】宮中の道場に奉事する永謙上人が杭州まで來訪せられた。上人は善く維摩經を講釋する。別に際して詩を請はれたので此詩を作つて贈つたといふのである。

【詩意】上人は宮中の道場に奉事するかたはら維摩詰のやうに諸方を巡錫し、水のやうに淡く執著のない心を持ち玉のやうに美しい威儀を備へてゐる。金粟如來の偈、即ち維摩經を説く人であるから、

【字解】【一】内道場。宮中の誦

經禮拜の所。【二】郡。杭州を指す。

【三】五夏。李洞の題ニ維摩上人二詩

に、諸方遊觀、五夏五峰館とある、

内殿は即ち内道場。【四】心地。心

なり。【五】金粟如來。佛の名。維

摩詰なり。【六】錢塘太守。杭州刺

史。白樂天自ら謂ふ。【七】苦海。

佛語。無窮の苦境に喩ふ。【八】靈

山。印度の靈鷲山をいふ。傳燈錄に

釋迦在三靈山會上、手拈一華示衆

杭州刺史などの詩を求めると必要はないのであるが、請はるる儘に此詩を贈るのである。修業を積み苦海を脱して覺路を開いたが、靈山で釋迦如來に別れて後また再會の期があるであらう。願はくは來世に於ても虛白亭で俱に佛法修業の悦樂に浸つた今朝の會を忘れてくれるな。

見李蘇州示男阿武詩自感成詠

李蘇州の男阿武の詩を示すを見、自ら感じて詠を成す

遙羨青雲裏。祥鸞正引雛。遙に羨む青雲の裏、祥鸞正に雛を引くを。

自憐滄海畔。老蚌不生珠。自ら憐む滄海の畔、老蚌珠を生ぜざるを。

【字解】【一】祥鸞。瑞鳥。李蘇州に喩ふ。【二】滄海。青青とした海。【三】老蚌。老いたるはまぐり。老妻に喩ふ。蚌の珠を孕むは懷妊の如し。故に之を珠胎といふ。

【題義】李蘇州（蘇州刺史李諒、字は復言）が其子阿武の作つた詩を示すのを見、感ずる所ありて作つた詩である。

【詩意】君は青雲の間に飛翔する鸞の如く、すぐれた善い子を持つてゐて實に羨ましい。僕は滄海の畔に沈淪し、然も老妻が子を生まないので悲觀してゐる。

正月十五日夜月

正月十五日夜月

律詩 見李蘇州示男阿武詩自感成詠 正月十五日夜月

歲熟人心樂。朝遊復夜遊。
春風來海上。明月在江頭。
燈火家家市。笙歌處處樓。
無妨思帝里。不合厭杭州。

歲熟して人心樂み、朝に遊びて復夜遊ぶ。
春風海上より來り、明月江頭に在り。
燈火家家の市、笙歌處處の樓。
帝里を思ふを妨ぐる無きも、合に杭州を厭ふべからず。

【字解】【一】帝里 帝都。

【題義】杭州に在りて正月十五夜の月を觀て作つた詩である。

【詩意】豊年に遇つて人皆樂み、朝も晩も今日の佳節を祝つて遊んでゐる。折しも春風が海上から吹き來り明月が西湖の頭に上つた。杭州の町家には戸毎に燈火が輝き、あちこちの樓上から笙歌の聲が聞える。何物も我が帝都を思ふことを妨げはしないが、さりとて杭州を厭ふやうなこともない。

題州北路傍老柳樹

州北路傍の老柳樹に題す

皮枯緣受風霜久。
條短爲經攀折頻。
但見半衰當此路。

皮の枯れたるは風霜を受くること久しきに緣り、
條の短きは攀折を經たること頻りなるが爲なり。
但見る半衰へて此路に當るを、

不知初種是何人。

知らず初めて種るしは是れ何人ぞ。

雪花零碎逐年減。

雪花零碎年を逐ひて減じ、

煙葉稀疎隨分新。

煙葉稀疎分に隨ひて新なり。

莫道老株芳意少。

道ふこと莫れ老株芳意少しと、

逢春猶勝不逢春。

春に逢ふは猶春に逢はざるに勝れり。

【題義】杭州の北路傍の老柳樹に題し、暗に己の身の上を嘆じた詩である。

【詩意】皮の枯れてゐるのは久しく風霜を凌いで來たからで、枝の短いのは屢攀折せられたからである。初めは誰が植ゑたのか知らないが、今はただ半衰へて路傍に立つてゐる。年年花を著けるとか少くなつたが、疎な葉が分相應に綠を呈してゐる。老株だから春意がないなどと謂ひなされるな、春に逢へば逢はぬよりまだ勝つてゐる。

【字解】【一】雪花 雪の如き柳の花。

【三】隨分 分相應に。

題清頭陀

清頭陀に題す

頭陀獨宿寺西峰。
百尺禪菴半夜鐘。

律詩 題州北路傍老柳樹 題清頭陀

煙月蒼蒼風瑟瑟。煙月蒼蒼として風瑟瑟たり。
更無雜樹對山松。更に雜樹の山松に對するなし。

【字解】(一) 瑟瑟 風の音。

【題義】清頭陀(頭陀は行脚僧をいふ。清は名の上の一字を略したのである)に題した詩である。
【詩意】一個の行脚僧が寺西の峰の百尺の禪菴に獨り宿して半夜鐘をついて行ひすましてゐる。月は蒼蒼と冴え風は瑟瑟として清く、松が亭亭と高く聳えるのみで他の雜樹は少しもない。

自歎二首

自歎 二首

形羸自覺朝餐減。形羸れて自ら朝餐の減するを覺え、
睡少偏知夜漏長。睡少くして偏に夜漏の長きを知る。
實事漸消虛事在。實事漸く消して虛事在り、
銀魚金帶遠腰光。銀魚金帶腰を遠りて光る。

【字解】(一) 夜漏 夜の時間。
(二) 銀魚金帶 帶についてゐる銀飾の魚。唐時五品以上の官吏の帶ぶるもの。

【題義】身の老衰を嘆じた詩である。

【詩意】體が瘦せ衰へたので朝飯の量も減つたやうに思はれ、睡れないので夜の徒に長きを覺える。實事は段段に消盡して唯虛事のみ残り、銀魚帯が腰のまはりに空しく光を放つてゐる。

(一)

(二)

二毛曉落梳頭懶。二毛曉に落ちて頭を梳ること懶し、
兩眼春昏點藥頻。兩眼春昏くして藥を點すること頻なり。
唯有閒行猶得在。唯閒行有りて猶在るを得たり、
心情未到不如人。心情未だ人に如かざるに到らず。

【字解】(一) 二毛 白毛。

【詩意】白毛が落ちるので朝も髪を梳るに懶く、春になつて兩眼が霞むので頻に藥を點してゐる。ただ昔と變らないのは散歩だけで、其樂は今でも敢て常人に劣らない。

湖上醉中代諸妓寄嚴郎中

湖上醉中諸妓に代りて嚴郎中に寄す

笙歌杯酒正歡娛。笙歌杯酒正に歡娛す、
忽憶仙郎望帝都。忽ち仙郎を憶ひて帝都を望む。
借問連宵直南省。借問す連宵南省に直するは、
何如盡日醉西湖。盡日西湖に醉ふに何如。
蛾眉別久心知否。蛾眉別るる久しくして心に知るや否や、

【字解】(一) 仙郎 嚴郎中を指していふ。(二) 南省 老學庵筆記に、唐人以尚書省在三大明宮之南、故謂之南省とある。(三) 盡日 終日。(四) 蛾眉 美人。諸妓を指して言ふ。(五) 離否 香の名。三香の郎官の奏事對答する時には離否香

雞舌含多口厭無、雞舌含むこと多くして口厭くや無や。
還有些些惆悵事、還些些たる惆悵の事有り、
春來山路見藤蕪、春來りて山路に藤蕪を見る。

を含む習であつた。「(二) 藤蕪」草の名。當歸ともいふ。孟連の間情と題する詩に、山上有山歸不得、湘江暮雨鷓鴣飛、藤蕪亦是王孫草、莫送春香入客衣とある。

【題義】西湖の邊で酒を飲み諸妓に代つて、今長安に居る嚴郎中に寄せた詩である。堯山堂外紀に唐宋間、郡守新到、營妓皆出境而迎、既去猶得下以三鱗鴻往返とある。當時の風習を見ることが出来る。

【詩意】私共は只今笙歌杯酒の樂を盡して居りますが、ふと貴殿を憶ひ出して都の空を望みました。毎晩尙書省に宿直する今の御生活と、終日西湖の邊に酔うて暮した昔の御生活とどちらが宜しう御座いますか。お別れ申してから久しくなりましたから最早私共のことなどはお忘れであらうかと存じます。それが、それにつけても雞舌香も含み飽きはなさいませんか。春になつて山路に當歸(まさに歸るべしといふ意)が生えても一向貴殿のお歸りが無いのを恨めしく存じてゐます。

自詠

自詠

悶發每吟詩引興、悶發れば毎に詩を吟じて興を引き、
興來兼酌酒開顏、興來れば兼ねて酒を酌みて顔を開く。

欲逢暇日先招客、暇日に逢はんと欲して先づ客を招き、

正對衙時亦望山、正に衙に對する時亦山を望む。

勾檢簿書多鹵莽、簿書を勾檢して鹵莽多く、

隄防官吏少機關、官吏を隄防して機關少し。

誰能頭白勞心力、誰か能く頭白くして心力を勞せん、

人道無才也是閒、人は道ふ無才は也是れ閒なりと。

【題義】自己の境遇を詠じた詩である。

【詩意】憂悶の起る毎に詩を吟じて興を引き、興の來るや更に酒を酌んで愁顔を慰める。暇日に逢はんとすれば先づ客を招き、正に衙參に對する時亦山を眺める。簿書を調査しても粗率が多く、官吏の邪曲を防ぐにも其機關が乏しい。何ぞ白髮の老身を以て心力を勞しようぞ、ただ不才無能だから、閑暇が多いのである。

【字解】(一) 衙 衙參。朝晩幕吏の畢く大府の衙に集まり、政務を白決するを衙參といふ。
(二) 勾檢 しらべて符號をつける。
(三) 鹵莽は粗率なり。
(四) 隄防 邪曲を防ぐこと。

晚興

晚興

草淺馬翩翩、新晴薄暮天、草淺くして馬翩翩たり、新に晴る薄暮の天。

柳條春拂面。衫袖醉垂鞭。
立語花隄上。行吟水寺前。
等閒消一日。不覺過三年。

【字解】(一) 柳條 柳の枝。

【題義】夕方漫行した興味を述べた詩である。

【詩意】草が浅く馬の歩みも早く、日が西に傾き空が晴れてゐる。柳の枝は面を拂ひ、袖の後に鞭を垂れ、花隄の上に立語をしたり水寺の前に行吟したりするのは興が深い。こんな生活をして等閒に日を送り、遂に三年を空費してしまつた。

早興

早に興く

晨光出照屋梁明。晨光出で照して屋梁明かなり、
初打開門鼓一聲。初めて打つ開門の鼓一聲。
犬上階眠知地濕。犬は階に上つて眠り地の濕へるを知り、
鳥臨窓語報天晴。鳥は窓に臨みて語り天の晴るるを報す。

【字解】(一) 宿酒 二日酔。

半銷宿酒頭仍重。半は宿酒を銷して頭仍重く、
新脱冬衣體乍輕。新に冬衣を脱して體乍ち輕し。
睡覺心空思想盡。睡覺め心空しくして思想盡きぬ、
近來鄉夢不多成。近來郷夢多く成らず。

【題義】朝早く起きた時の情景を述べた詩である。

【詩意】旭の光が明かに屋梁を照し、開門の合圖の鼓が鳴つた。犬は地の濕へるを厭うて階段の上に乗じ、鳥は窓外に囀つて晴天を報じてゐる。二日酔は少し醒めたが頭がまだ重い。併し新に冬著を脱いで大に身輕になつた。目が覺めても心が空虚で何の考へもない。近來は郷里の夢もあまり見なくなつた。

竹樓宿

竹樓に宿す

小書樓下千竿竹。小書樓下千竿の竹、
深火爐前一盞燈。深火爐前一盞の燈。
此處與誰相伴宿。此處誰と與にか相伴ひて宿せん、

【字解】(一) 一盞 燈明皿。

燒丹道士坐禪僧。燒丹の道士坐禪の僧。

【三】燒丹。仙藥を煉ること。

【題義】夜竹樓に宿した詩である。

【詩意】書樓の下には千本の竹藪があり、埋火の爐の前には一個の燈がある。誰と共に此處に宿するかといふに、仙藥を煉る道士や坐禪する僧侶とである。

湖上招客送春汎舟

湖上に客を招き春を送り舟を汎ぶ

欲送殘春招酒伴。殘春を送らんと欲して酒伴を招く、

客中誰最有風情。客中誰か最も風情有る。

兩瓶箸下新開得。兩瓶の箸下新に開き得たり、

一曲霓裳初教成。一曲の霓裳初めて教へ成る。

時崔湖州寄新筍下酒一來。樂妓按霓裳羽衣曲一初畢。

排比管絃行翠袖。管絃を排比して翠袖を行らし、

指麾船舫點紅旌。船舫を指麾して紅旌を點す。

慢牽好向湖心去。慢に牽かれて好し湖心に向ひ去れば、

【一】菱花鏡。鏡の名。趙飛燕外傳に「婕妤上三七尺菱花鏡一奩」とある。

【字解】【一】筍。若下に同じ。吳錄に、長興有筍溪。南曰上若。北曰下若。村人取下若水。臘酒醇美。稱若下酒とある。
【二】霓裳。舞曲の名。霓裳羽衣の曲。
【三】排比。ならべる。

恰似菱花鏡上行。恰も菱花鏡上を行くに似たり。

【題義】客を招き湖上に舟を汎べて送春の宴を張つたことを述べた詩である。

【詩意】送春の宴を張らうと思つて酒飲友達を招いた。いづれ劣らぬ風流人ばかりである。因つて此頃崔湖州（湖州刺史崔玄亮）から贈られた筍下酒二瓶を開き、妓をして霓裳羽衣一曲を舞はしむれば、更に管絃を並べて奏し翠袖を振つて舞ふ者もある。吾は數多の船を指麾して紅の旗を振り、輿に牽かれて段段湖水の真中に向つて行けば、水上波平かにして鏡の上を行くやうである。

戲醉客

醉客に戯る

莫言魯國書生儒。魯國書生の儒きを言ふこと莫れ、

莫把杭州刺史欺。杭州刺史を把りて欺くこと莫れ。

醉客請君開眼望。醉客請ふ君眼を開いて望め、

綠楊風下有紅旗。綠楊風下有紅旗有り。

【題義】醉客に戯れた詩で、前の詩と同時の作であらう。

【詩意】魯の書生を懦弱などと謂ふな。杭州刺史を馬鹿にしてはいけない。醉客よ、よく目を開いて見られよ。杭州刺史白樂天が綠楊風下に紅旗を振つて雄雄しくも數多の船を指麾してゐるのを見る

【字解】【一】杭州刺史。樂天自ら謂ふ。欺は侮る意。

であらう。

紫陽花

招賢寺有山花一樹、無人知名。色紫氣香。芳麗可愛。頗類仙物。因以紫陽花名之。

紫陽花 招賢寺に山花一樹有り、人の名を知るものなし。色紫にして氣香ばし。芳麗愛す可く、頗る仙物に類す。因つて紫陽花を以て之を名く。

何年植向仙壇上。

何の年にか植ゑて仙壇の上に向へる、

早晚移栽到梵家。

早晚移し栽ゑて梵家に到れる。

雖在入間人不識。

人間に在りと雖も人識らず、

與君名作紫陽花。

君が與に名けて紫陽花と作す。

【題義】 招賢寺の名のわからぬ花を見て作つた詩である。

【詩意】 此花はいつ仙壇の上に植ゑ、いつ此寺に移し植ゑたものであらうか。誠に俗氣のない高雅な花である。たとひ俗界には在つても其名を知る人もない。因つて予は紫陽花と名づけてやらう。

祭社宵興燈前偶作

社を祭らんとして宵に興き燈前に偶々作る

城頭傳鼓角燈下整衣冠。

城頭鼓角を傳へ、燈下衣冠を整ふ。

夜鏡藏鬢白秋泉漱齒寒。

夜鏡鬢を藏めて白く、秋泉齒を漱ぎて寒し。

欲將閒送老須著病辭官。

閒を將て老を送らんと欲せば、須らく病を著して官を辭すべし。

更待年終後支持歸計看。

更に年の終るを待ちて後、歸計を支持して看ん。

【字解】 一 鼓角 角は一種の笛。二 歸計 故郷に歸る計畫。

【題義】 社は土地の神である。春の祭を春社といひ、秋の祭を秋社といふ。此詩は秋社の祭をする爲に夜の明けないうちに起きて用意をしたことを述べた詩である。

【詩意】 城頭に夜明けを告ぐる鼓角の聲が聞える。吾は起きて燈下に衣冠を整へた。鏡を見れば夜でも白鬢がうつり、秋泉の水で口を漱げば齒にしみて寒い。自分も老境にはひつたから閑靜に暮りたいと思ふが、それには病を以て官を辭する外はない。因つて年の終にでもなつたら、歸郷の計畫を立てて見ようと思つてゐる。

閒臥

閒臥

盡日前軒臥神閒境亦空。

盡日前軒に臥し、神閒にして境亦空し。

有山當枕上無事到心中。

山の枕上に當る有り、事の心中に到る無し。

簾卷侵牀日屏遮入座風。

簾は牀を侵す日を卷き、屏は座に入る風を遮る。

望春春未到應在海門東。

春を望めども春未だ到らず、應に海門の東に在るべし。

律詩 紫陽花 祭社宵興燈前偶作 閒臥

【字解】【一】晝日 終日。【二】神閒 心が静なこと。【三】海門 錢塘江の兩岸に龍・結の二山あり、南北對峙すること門の如し。故にいふ。

【題義】冬日閑臥の情景を敍した詩である。

【詩意】終日前軒に閑臥してゐると、心も處も閑靜である。山は丁度枕頭に當つて聳え、何一つ心に懸る事もない。簾を卷いて日の寢牀に當るやうにし、屏風を立てて風を遮つてある。早く春の來るのを待つてゐるが仲來ない。まだ海門の東にでも躊躇してゐるのであらう。

新春江次

新春江次

浦乾潮未應 堤濕凍初銷

浦乾きて潮未だ應せず、堤濕ひて凍初めて銷す。

粉片妝梅朵 金絲刷柳條

粉片は梅朵を妝ひ、金絲は柳條を刷す。

鴨頭新綠水 雁齒小紅橋

鴨頭新綠水、雁齒小紅橋。

莫怪珂聲碎 春來五馬驕

怪む莫れ珂聲の碎たるを、春來りて五馬驕れり。

【字解】【一】粉片 白いはなびら。【二】金絲 黄金色の絲。【三】鴨頭 木の縁なること鴨頭の色に似たるをいふ。【四】雁齒 雁行といふが如し。物の群列する様をいふ。【五】珂聲 珂は馬のくつわの飾の玉。【六】五馬 太守の馬。

【題義】新春の江邊の景況を述べた詩である。

【詩意】浦曲が乾いて潮は未だ上り來らず、凍が初めて釋けて堤防が濕つてゐる。梅の枝は白い花片

を著け、柳の枝は金絲を綴り、水は綠色をなして鴨の頭の如く、朱塗の小橋は雁齒の如く階段をなしでゐる。春が來たので駒が勇み珂聲が特に耳立つて聞える。

春題湖上

春湖上に題す

湖上春來似畫圖

湖上春來りて畫圖に似たり、

亂峰圍繞水平鋪

亂峰圍繞して水平かに鋪く。

松排山面千重翠

松は山面に排す千重の翠、

月點波心一顆珠

月は波心に點す一顆の珠。

碧毯線頭抽早稻

碧毯の線頭早稻を抽き、

青羅裙帶展新蒲

青羅の裙帶新蒲を展ぶ。

未能拋得杭州去

未だ杭州を拋ち得て去る能はず、

一半勾留是此湖

一半勾留す是れ此の湖。

【字解】【一】一顆 一箇。

【二】碧毯 緑の毛氈。

【三】青羅 青い薄絹。

【四】勾留 ひきとめる。

【題義】春湖上に題した詩である。

【詩意】湖上の春色は全く一幅の畫の如く、數多の峰が四面を圍み、湖水が鏡の如く平かである。松は

山の上に排列して千重の翠を疊み、月は湖水の真中にうつつて一箇の珠を沈め、碧毯の線の頭のやうに早稻が抽んで、綠羅の裙のやうに蒲が伸びてゐる。自分が杭州刺史を抛つて此地を去ることが出来ないのは、半は此湖上の景色が引留めてゐるからである。

失鶴

鶴を失ふ

失爲庭前雪。飛因海上風。失ひて庭前の雪と爲り、飛びて海上の風に因る。

九霄應得侶。三夜不歸籠。九霄應に侶を得べし、三夜籠に歸らず。

聲斷碧雲外。影沈明月中。聲は碧雲の外に断え、影は明月の中に沈む。

郡齋從此後。誰伴白頭翁。郡齋此より後、誰か白頭翁に伴ふ。

【字解】 〔一〕 九霄 天上。〔二〕 郡齋 刺史の官舎。〔三〕 白頭翁 樂天自ら謂ふ。

【題義】 鶴を失つたことを惜んだ詩である。

【詩意】 吾が愛玩してゐた鶴は庭前の雪と俱に消え、海上の風に因つて飛び去つてしまつた。天上で好い仲間にも遇つたものか最早三晩籠に歸らない。碧雲の外にも其聲を聞かず、明月の中にも其影を見ない。今日より後は誰が白頭の老刺史の相手になつて慰めてくれるであらう。誠に惜しいことをした。

自歎

自歎

宴遊寢食漸無味。宴遊寢食漸く味無し。

杯酒管絃徒繞身。杯酒管絃徒に身を繞る。

賓客歡娛僮僕飽。賓客は歡娛し僮僕は飽く。

始知官職爲他人。始めて知る官職の他人の爲にするを。

【題義】 自己の老衰を嘆いた詩である。

【詩意】 宴遊も寢食もすべて若い時のやうな味がなく、杯酒管絃は身のまはりに在つても一向心を惹かない。ただ賓客や僮僕の酔飽に供するのみである。自分が官職を奉じてゐるのは己の樂の爲ではなく、他人の爲であることが始めてわかつた。

同諸客攜酒早看櫻桃花

諸客と同じく酒を攜へて早に櫻桃花を見る

曉報櫻桃發。春攜酒客過。曉に櫻桃の發くを報ず、春酒客を攜へて過る。

綠餚粘盡杓。紅雪壓枝柯。綠餚盡杓に粘し、紅雪枝柯を壓す。

天色清明少。人生事故多。天色清明少く、人生事故多し。

律詩 失鶴 自歎 同諸客攜酒早看櫻桃花

停杯替花語。不醉擬如何。杯を停めて花に替りて語る、醉はずんば如何と擬する。

【字解】(一) 酒客。酒飲仲間。(二) 絲繡。酒。繡杓は杯や柄杓。(三) 天色。天氣。

【題義】 諸客と俱に酒を攜へて朝早く櫻桃花を賞した詩である。

【詩意】 朝、櫻桃の花が開いたと聞いたので、早速酒客を引連れて花の下で宴を催した。酒は緑色をして杯や柄杓にねばりつき、花は紅雪の如くに枝を壓して咲いてゐる。天氣の晴れることは少く、人生には故障が多いから、兎もすると可惜花を看すに遇ごしてしまふ。因つて予は花に替つて言つた。今日醉はなくてどうする積りぢや、何事を措いても醉はねばならぬと。

柳絮

柳絮

三月盡時頭白日。三月盡くる時頭白き日、

【字解】(一) 依依。離戀の貌。

與春老別更依依。春と老い別れて更に依依たり。

憑鶯爲向楊花道。鶯に憑りて爲に楊花に向ひて道ふ、

【三】 楊花。柳の花。

絆惹春風莫放歸。春風を絆惹して放ち歸す莫れと。

【三】 絆惹。ひきとめる。

【題義】 柳花の絮の如く飛ぶ時、春の去るのを惜んだ詩である。

【詩意】 三月の末になり我が頭髮も益々白くなつた。老の身を以て春に別れるのは一層惡戀の情に堪へない。因つて鶯に頼み楊花に向つて言つた。春風を引留めて歸り去らぬやうにしてくれ」と。

早飲湖州酒寄崔使君

早に湖州の酒を飲み崔使君に寄す

一棹扶頭酒。泓澄瀉玉壺。

一棹頭を扶くる酒、泓澄として玉壺に瀉ぐ。

十分蘸甲酌。激灑滿銀盃。

十分に甲酌を蘸し、激灑として銀盃に滿つ。

捧出華光動。嘗看氣味殊。

捧げ出せば華光動き、嘗め看るに氣味殊なり。

手中稀琥珀。舌上冷醍醐。

手中琥珀稀に、舌上醍醐冷なり。

瓶裏有時盡。江邊無處沽。

瓶裏時ありて盡くるも、江邊沽ふ處無し。

不知崔太守。更有寄來無。

知らず崔太守、更に寄せ來る有りや無や。

【字解】(一) 崔使君。使君は刺史の稱。(二) 一棹。一樽といふが如し。扶頭は朝起きがけに元氣をつけること。(三) 甲酌。甲で作つた柄杓。(四) 激灑。波たつ貌。銀盃は銀杯。(五) 琥珀。琥珀色をした礦物の名。以て酒の色に喩ふ。李白の寄中行にも、玉碗盛來琥珀光とある。(六) 醍醐。最上の飲料。

【題義】 湖州刺史崔玄亮から贈られた湖州の銘酒を朝飲んで此詩を作り崔玄亮に寄せたのである。

【詩意】 君から貰つた一樽の眠氣覺しの酒を玉壺に瀉ぎ、十分に柄杓をさし込んで、なみなみと銀の杯に滿した。それを捧げて見ると艶麗した光が漂ひ、嘗めて見ると何ともいへぬよい味がする。見

た所は薄い琥珀色をしてゐるが、風味は醍醐のやうである。さて此酒は程なく盡きるのであらうが、此邊では買ふことは出来ない。無くなつた頃には君が復贈つてくれるであらうか。

病中書事

病中事を書す

三載臥山城。閒知節物情。

三載山城に臥し、閒に節物の情を知る。

鶯多過春語。蟬不待秋鳴。

鶯は多く春を過ぎて語り、蟬は秋を待たずして鳴く。

氣嗽因寒發。風痰欲雨生。

氣嗽は寒に因りて發し、風痰は雨ならんと欲して生ず。

病身無所用。唯解卜陰晴。

病身用ふる所無きも、唯解く陰晴を卜す。

【字解】【一】三載。三年。山城は杭州を指して言ふ。【二】節物。氣節風物。【三】氣嗽。せき。しはぶき。【四】風痰。痰と共に喉から出る粘液。

【題義】病中の見聞感慨を述べた詩である。

【詩意】三年間杭州に病臥してゐて、靜に氣候風物の變を知ることが出来た。鶯は多く春を過ぎて後に啼き、蟬は秋を待たずに鳴き始める。寒い時には嗽の出方が強く、雨の降りさうな時には痰が特に出る。病める身は何の役にも立たないが、天氣の陰晴だけはよくわかる。

與微之唱和來去常以竹筒貯詩陳協律美而成篇因以此答

微之と唱和するに來去常に竹筒を以て詩を貯ふ。陳協律美して篇を成す。因つて此を以て答ふ。

揀得琅玕截短筒。

琅玕を揀び得て短筒を截り、

緘題章句寫心胷。

章句を緘題して心胷を寫す。

隨風每喜飛如鳥。

風に隨ひては毎に喜ぶ飛ぶこと鳥の如きを。

渡水常憂化作龍。

水を渡りては常に憂ふ化して龍と作るを。

粉節堅如太守信。

粉節堅くして太守の信の如く、

霜筠冷稱大夫容。

霜筠冷にして大夫の容に稱ふ。

煩君讀詠心知愧。

君が讀詠を煩はして心に愧づるを知る、

魚目驪珠同一封。

魚目驪珠同一に封するを。

【字解】【一】琅玕。石の玉に似たるもの。竹を美していふ。【二】緘題。書いて封じる。章句は詩篇。【三】粉節。白い粉のついた節。太守は樂天自ら謂ふ。【四】霜筠。冬竹。大夫は御史大夫。元稹時に御史大夫を兼ね。【五】魚目。魚の目玉。珠に似て珠にあらず。驪珠は美珠なり。莊子に千金之珠、必在九重之淵、而驪龍頷下とある。

【題義】元稹（字は微之。時に浙東觀察使越州刺史として杭州の鄰の越州にゐた）と唱和の詩を遣り取りするの竹筒を用ひた。陳協律がその考案の巧なことを美めた詩を作つたので、此詩を作つて答

へたのである。

【詩意】竹を截つて短い筒となし、詩を題し筒中に封じて心中の思を傳へる。この筒が風に隨つて飛ぶこと鳥の如く速なるを喜び、又水を渡る時は化して龍となりはせまいかと恐れる。その節の堅いことは吾が信の堅きが如く、その操の高いことは微之の容貌の如くである。圖らず君（陳協律）から稱讚の詩を頂戴して、明珠のやうな微之の詩と、魚目のやうな吾が詩とを同じに封入するのを、竊に自ら愧ぢた。

醉戲諸妓

醉うて諸妓に戯る

席上争飛使君酒 席上争ひ飛ばす使君の酒、

歌中多唱舍人詩 歌中多く唱ふ舍人の詩、

不知明日休官後 知らず明日官を休めて後、

逐我東山去是誰 我を東山に逐ひて去るものは是れ誰ぞ。

【題義】醉うて戯に諸妓に贈つた詩である。

【詩意】お前達は酒席の上では先を争つて俺に薦をさし、歌を歌へば多くは俺の作つた詩を歌ふが、もし明日にも俺が官を免せられたら、俺と一緒に東山に去る者が幾人あるであらう。

【字解】(一) 使君 刺史の稱。

樂天自らいふ。

(二) 舍人 官名。中書舍人。樂天嘗て此官に任ぜらる。

(三) 東山 山の名。晉の謝安、東山に隱居し妓を以て相従ふ。

北院

北院

北院人稀到 東窗地最偏 北院は人到ること稀に、東窗は地最も偏なり。

竹煙行竈上 石壁臥房前 竹煙は竈上に行き、石壁は房前に臥す。

性拙身多暇 心慵事少緣 性拙くして身暇多く、心慵くして事緣少し。

還如病居士 唯置一牀眠 還病居士の如く、唯一牀を置いて眠る。

【字解】(一) 房前 部屋の前。(二) 一牀 一個の寢臺。

【題義】北の書院に閑居する様を述べた詩である。

【詩意】北院は人の來ることも稀で、その東窗は最も奥まつた處に在る。茶釜の煙が竹の間に立ちのぼり、石壁が部屋の前に横はるのみで、目を碍ぐる物は何もない。性質が迂拙だから身に暇が多く、無精者だから總て俗事に關係しない。病居士でもあるかの如く寢臺に臥して惰眠を貪つてゐる。

酬周協律

周協律に酬ゆ

五十錢塘守 應爲送老官 五十錢塘の守、應に老を送る官と爲すべし。

濫蒙辭客愛 猶作近臣看 濫りに辭客の愛を蒙りて、猶近臣の看を作す。

鑿落愁須飲 琵琶悶遣彈 鑿落愁へて須らく飲むべく、琵琶悶して彈せしむ。

律詩 醉戲諸妓 北院 酬周協律

白頭雖強醉。不似少年歡。白頭強ひて醉ふと雖も、少年の歡に似ず。

【字解】(一) 錢塘守 杭州刺史。(二) 送老官 老人のひまつぶしの官職。杜甫の詩に、何時一茅屋、送老白雲邊とある。

(三) 辭客 文詞に長ずる人。(四) 飄落 さかづき。韓愈の詩に飽飢飢飄落とある。

【題義】周協律から詩を贈られたのに酬いたのである。

【詩意】以前は詞人として御寵愛を蒙り、近臣として厚遇せられたこともあつたが、五十にもなつて杭州刺史になつたのは、謂はば年寄の暇つぶしのやうなものだ。愁へては毎に杯を銜み、悶しては琵琶を弾じて自ら慰め、強ひて酔うては見るが、どうも若い時のやうに歡興が湧かない。

題石上人

石上人に題す

騰騰兀兀在人間。騰騰兀兀として人間に在り、

貴賤賢愚盡往還。貴賤賢愚盡く往還す。

羶膩筵中唯飲酒。羶膩の筵中唯酒を飲み、

歌鐘會處獨思山。歌鐘の會する處獨り山を思ふ。

存神不許三尸住。神を存して三尸の住するを許さず、

混俗無妨兩鬢斑。俗に混じて兩鬢の斑なるを妨ぐる無し。

【字解】(一) 騰騰 遊惰に耽る

貌。兀兀は動かざる貌。

(二) 羶膩 なまぐさき肉。

(三) 三尸 柳宗元の文に、道士言、

人皆有三尸蟲三、處三腹中、伺三人體微

失誤、日庚申出魂三於帝一とある。

除却餘杭白太守

餘杭の白太守を除却して、

何人更解愛君閒。何人が更に君が閒を愛するを解せん。

【三】餘杭白太守 杭州刺史白樂天。

【題義】石上人といふ佛僧のことを詠じた詩である。

【詩意】上人は俗世間に優遊し、貴賤賢愚を論せず誰とでも交際し、他人の肉などを貪り食ふ中にのみ唯酒ばかり飲んで居り、歌鐘の聲を聴きつつ獨り山を思ひ、常に高潔なる精神を持して三尸蟲の腹中に住するを許さず、俗人と混じて鬢髮の白きを厭はない。併し眞に君の閒情に共鳴する者は杭州刺史白樂天を除いては外に人はあるまい。

詩解

詩解

新篇日日成。不是愛聲名。

新篇日日成れども、是れ聲名を愛するならず。

舊句時時改。無妨悅性情。

舊句時時改むれども、性情を悦ばしむるに妨げ無し。

但令長守郡。不覓却歸城。

但長く郡に守たらしめば、却つて城に歸るを覓めず。

祇擬江湖上。吟哦過一生。

祇擬す江湖の上、吟哦して一生を過さんことを。

【題義】詩を好むについての辯解といふ意。

律詩 題石上人 詩解

【詩意】 毎日新に詩を作り時時舊作の詩句を改めるが、決して此に由つて名聲を博しようなどとは思はない。ただ吾が性情を悦ばす爲である。長く杭州刺史となつてゐることが出来れば、洛陽の都に歸らうとは思はず、江湖の間に優遊して一生を吟詠の間に送りたと思ふ。

潮

潮

早潮纔落晚潮來、
早潮纔に落ちて晚潮來る、
一月周流六十回、
一月周流六十回。

不獨光陰朝復暮、
獨り光陰の朝復暮なるのみならず、
杭州老去被潮催、
杭州に老い去るは潮に催さる。

【題義】 潮について感想を述べた詩である。

【詩意】 朝の潮がひいたと思へば忽ち又夕方の潮がさして來る。かくて一月の間に六十回満つるのである。されば歲月に朝暮のあるのみならず、吾が杭州に老いたのは潮にも促された結果である。

聞歌妓唱嚴郎中詩因以絕句寄之

嚴前爲郡守

歌妓の嚴郎中の詩を唱ふるを聞き、因つて絶句を以て之に寄す

嚴前に郡守と爲る。

已留舊政布中和、
已に舊政を留めて中和を布き、

又付新詞與艷歌、
又新詞と艷歌とに付す。

但是人家有遺愛、
但是れ人家に遺愛有り、

就中蘇小感恩多、
就中蘇小恩に感ずること多し。

【題義】 歌妓が前の杭州刺史嚴郎中の詩を歌ふのを聞き、この詩を作つて嚴郎中に寄せたのである。

【詩意】 君は今向中和の政を留むるのみならず、更に新詞と艷歌とをも世に傳へた。君の遺愛は永く人家に存するが、中でも歌妓は特に君の恩に感ずることが深いであらう。

【字解】 (一) 遺愛 仁愛の後に遺留するをいふ。

(二) 蘇小 蘇小小。錢塘の妓なり。

柘枝妓

柘枝妓

平鋪一合錦筵開、
平かに鋪き一に合して錦筵開く、

連擊三聲畫鼓催、
連りに撃つこと三聲畫鼓催す。

紅蠟燭移桃葉起、
紅蠟燭移りて桃葉起り、

紫羅衫動柘枝來、
紫羅衫動きて柘枝來る。

帶垂鈿胯花腰重、
帯は鈿胯に垂れて花腰重、

【字解】 (一) 桃葉 歌の名。樂府吳聲歌曲。古今樂錄に云く、晉土

子敬之所作也、桃葉子敬妾名と。

(二) 紫羅衫 紫の薄絹の上衣。

(三) 鈿胯 鈿は、鈿帯とて帯に青貝細工を施したもの。胯は股なり。

(四) 關山 山の名。宋玉の高唐賦に

律詩 潮 聞歌妓唱嚴郎中詩因以絕句寄之 柘枝妓

帽轉金鈴雪面廻。帽は金鈴を轉じて雪面廻る。
看即曲終留不住。見て即ち曲終りて留むれども住まらず、
雲飄雨送向陽臺。雲飄り雨送りて陽臺に向ふ。

丘之阻、且爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下とある。

嘗者先王嘗遊高唐、忘而晝寢、夢見一婦人、曰、妾巫山之女也、爲高唐之客、聞君遊高唐、願薦枕席、王因幸之、去而辭曰、妾在巫山之陽、高

【題義】柘枝は舞の名である。瑣碎錄に柘枝舞本北魏拓拔之名。易拓爲柘、易拔爲枝也。古歌舞不三相合、自唐人作柘枝詞、則舞者所執、與歌者所措詞、稍稍相應云云とある。此れは善く柘枝を舞ふ妓についての詩である。

【詩意】一面に錦の繻を敷き詰め、鼓を三聲鳴らして合圖をすれば、燭臺を一方に片寄せて桃葉歌を歌ひ、やがて紫の薄絹を翻して柘枝の舞が始まる。細帯を垂れ花で飾つた腰が重げに見え、金鈴をつけた帽子と俱に雪の顔が回轉する。見てゐる中に曲が終つて、留めても聴かず、巫山の神女のやうに雲となり雨となつて陽臺に歸つてしまつた。

急樂世辭

一作急世樂。急樂世の辭。樂一に急世樂に作る。

正抽碧線繡紅羅。正に碧線を抽きて紅羅に繡す、
忽聽黃鶯斂翠蛾。忽ち黃鶯を聴きて翠蛾を斂む。

【字解】(一) 紅羅 紅の薄絹。
(二) 翠蛾 美人の眉。

秋思冬愁春悵望。秋は思ひ冬は愁へ春は悵望す、
大都不稱意時多。大都意に稱ふ時多からず。

【題義】樂府詩集に急世樂と題してある。樂曲の名である。

【詩意】一人の乙女が緑の線を以て紅の薄絹に刺繡をしてゐたが、偶黃鶯の聲を聴いて眉を蹙めた。秋は思に沈み冬は愁へ春は悵望する。人の世は意に満たぬ時のみ、なせかくは多いのであらう。

天竺寺送堅上人歸廬山

天竺寺にて堅上人の廬山に歸るを送る

錫杖登高寺。香爐憶舊峰。
偶來舟不繫。忽去鳥無蹤。
豈要留離侶。寧勞動別容。
與師俱是夢。夢裏暫相逢。

【字解】(一) 錫杖 佛僧の持つ杖。高寺は天竺寺を指していふ。(二) 香爐 廬山の峰の名。(三) 離侶 離別の時。偶は佛家唱ふる所の詞句。

【題義】天竺寺(杭州にあり)で堅上人の廬山に歸るのを送つた詩である。

【詩意】 上人は錫杖を曳いて天竺寺に登つたが、ふとまた廬山の香爐峰を憶ひ出して其處へ歸ることになつた。來るも去るも自由自在で繋がる舟の如く鳥の蹤なきが如くである。されば別に際しても離詩を留めるでもなければ、愁容を動かすでもない。要するに人生は夢だから我も上人も皆夢で、暫く相逢うたのも亦夢である。

留題郡齋

郡齋に留め題す

吟山歌水嘲風月。山に吟し水に歌ひて風月に嘲る、

便是三年官滿時。便ち是れ三年官滿つる時。

春爲醉眠多閉閣。春は醉眠の爲に多く閣を閉ち、

秋因晴望暫褰帷。秋は晴望に因りて暫く帷を褰ぐ。

更無一事移風俗。更に一事の風俗を移す無し、

唯化州民解詠詩。唯州民を化して詠詩を解せしむ。

【題義】 杭州郡齋(刺史の官舎)を去るに臨んで後に留め題した詩である。

【詩意】 杭州に來てから山水風月の間に吟誦して今日に至り、茲に三年の任期が満ちた。春は多くは閣を閉ちて醉眠し、秋は帷を褰げて四方を眺望して日を送り、民の風俗を一新するやうな治績は一つ

もなく、ただ州民を化して詩を詠することを覺えさせたのみである。

別州民

州民に別る

耆老遮歸路。壺漿滿別筵。

耆老歸路を遮り、壺漿別筵に滿つ。

甘棠無一樹。那得淚潸然。

甘棠一樹無し、那ぞ涙の潸然たるを得ん。

稅重多貧戶。農饑足旱田。

稅重くして貧戶多く、農饑ゑて旱田足る。

唯留一湖水。與汝救凶年。

唯一湖の水を留め、汝に與へて凶年を救はしむ。

今春増築錢塘湖堤一町、水以防旱旱故云。

【字解】 (一) 耆老。長老。(二) 壺漿。壺にいたれた汁。(三) 甘棠。木の名。召公南國を治むる時、甘棠の下に於て訟を聽く。國人其德を慕ひて詩を作る。詩經召南に見ゆ。云く蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇云云と。

【題義】 杭州を去る時、州民に別れた詩である。

【詩意】 我が杭州を去るに臨み、長老たちは吾が歸路を遮り盛な送別の筵を張つてくれた。吾は召公のやうに善政がないから誰も涙を流して慕ふ者はなく、稅が重かつたので貧戶が多く、旱田が多くて民が饑ゑてゐるが、ただ錢塘湖の水を後に留めて民の爲に凶荒を救ふのみである。

【餘論】 錢塘湖堤についての樂天の施設は彼の錢塘湖石記に詳かである。

留題天竺靈隱兩寺

天竺・靈隱兩寺に留め題す

在郡六百日。入山十二回。
宿因月桂落。醉爲海榴開。

郡に在ること六百日、山に入ること十二回。
宿するは月桂の落つるに因り、醉ふは海榴の開くが爲なり。

天竺嘗有月中桂子落、
靈隱多海石榴花也。

黃紙除書到。青宮詔命催。

黃紙除書到り、青宮詔命催す。

僧徒多悵望。賓從亦徘徊。

僧徒多く悵望し、賓從亦徘徊す。

寺閣煙埋竹。林香雨落梅。

寺閣くして煙竹を埋め、林香しくして雨梅を落す。

別橋憐白石。辭洞戀青苔。

橋に別れて白石を憐み、洞を辭して青苔を戀ふ。

石橋在天竺、
明洞在天竺。

漸出松間路。猶飛馬上杯。

漸く松間の路を出で、猶馬上の杯を飛ばす。

誰教冷泉水。送我下山來。

誰か冷泉の水をして、我を送りて山を下り來らしむる。

【字解】【一】郡 杭州をいふ。【二】黃紙 詔勅を書する紙。除書は任官の辭命書。【三】青宮 太子をいふ。【四】馬上杯 馬背の上で酒を飲むこと。【五】冷泉 李の名。樂天に冷泉記の作あり。

【題義】杭州の天竺・靈隱の二寺に別るる時、留め題した詩である。

【詩意】吾は杭州刺史たること六百日。(長慶二年十月杭州に至り、同四年五月杭州を去る。)其間十二回天竺山に遊んだ。月の落つるに因りて山寺に宿し、石榴の花を賞して酒に酔ふを常としたが、圖らず此度詔命が下つて太子左庶子に任せられることになつたので、僧徒も賓從も呆氣にとられて徘徊してゐる。時恰も五月のことで煙雨が竹林を埋め梅を落して、何處となく陰氣である。懐かしき白石の橋や青苔の洞に別を告げ、やがて松間の路を出るまで猶馬上に觴を飛ばした。冷泉の水も我を慕ふもの如く我を送つて山を下つて來た。

西湖留別

西湖留別

征途行色慘風煙。

征途の行色 風煙慘たり、

祖帳離聲咽管絃。

祖帳の離聲管絃咽ぶ。

翠黛不須留五馬。

翠黛須ひす五馬を留むるを、

皇恩只許住三年。

皇恩只許す三年を住するを。

綠藤陰下鋪歌席。

綠藤陰下歌席を鋪き、

紅藕花中泊妓船。

紅藕花中妓船を泊す。

處處回頭盡堪戀。

處處頭を回らして盡く戀ふに堪へたり、

【字解】【一】征途 旅行中の道。行色は景色。

【二】祖帳 送別の宴席。離聲は別れの歌。

【三】翠黛 山の色。五馬は刺史の馬。

【四】紅藕 紅蓮。

就中難別是湖邊 就中別れ難きは是れ湖邊。

【題義】杭州の西湖に別れる時、留め題した詩である。
【詩意】今杭州を去るに臨み、途上の景色が心なしか何處となく陰慘で、宴席の別れの歌も悲しげである。皇恩は三年間杭州に住することを許したのであるから、山色が我を引留めようとしてもだめである。因つて藤の陰に歌席を設け、紅蓮の花の中に妓船を泊して名残を惜んだ。見る處一として戀戀たらしめざるものはないが、最も別れ去るに忍びないのは湖邊の景色である。

重題別東樓

重ねて題して東樓に別る

東樓勝事我偏知

東樓の勝事我偏に知る、

氣象多隨昏旦移

氣象多く昏旦に随ひて移る。

湖卷衣裳白重疊

湖は衣裳を巻きて白重疊

山張屏障綠參差

山は屏障を張りて綠參差

海仙樓塔晴方出

海仙の樓塔は晴れて方に出で、

江女笙簫夜始吹

江女の笙簫は夜始めて吹く。

【字解】「二」勝事 勝景なり。

【一】屏障 屏風、獨立。參差は高低齊しからざる貌。
【二】海仙樓塔 晏氣樓。

春雨星攢尋螢火

春雨星攢まる螢を尋ぬる火、

秋風霞颭弄濤旗

秋風霞颭る濤を弄する旗。

宴宜雲髻新梳後

宴は雲髻の後に梳る後に宜しく、

曲愛霓裳未拍時

曲は霓裳の未だ拍たざる時を愛す。

太守三年嘲不盡

太守三年嘲りて盡さず、

郡齋空作百篇詩

郡齋空しく作る百篇の詩。

餘秋風俗、每寒食雨後夜涼、家家持燭尋螢、動盈三萬人。每歲八月迎濤弄水、悉舉旗幟一焉。

- 【一】雲髻 美人の髻。
- 【二】霓裳 舞曲の名。
- 【三】太守 杭州の刺史、白樂天自ら謂ふ。
- 【四】郡齋 刺史の官舎。

【題義】重ねて此詩を題して東樓に別れたといふのである。

【詩意】我は盡く東樓の勝景を知つてゐる。氣象は朝晩變化し、湖は白波を立てて衣裳を巻くが如く山は綠屏を竝べ立てたやうである。晴れた日には晏氣樓が現れ、夜は江女の笙聲が聞え、春雨の後は蟹取の燭が星の如くに點點し、秋風の吹く頃には濤を弄する旗が霞の如くに飄り、宴する時は綠の黒髪を新に梳つた妓が宜しく、曲は霓裳羽衣の未だ拍たぬ所が特に風情がある。我は杭州刺史たること三年。未だ此等の勝景を盡く賞するに至らず、ただ郡齋の中で空しく百篇の詩を作つたばかりである。

別周軍事

周軍事に別る

主人頭白官仍冷。主人頭白くして官仍ほ冷なり、
 去後憐君是底人。去りて後憐む君是れ底人ぞ。
 試謁會稽元相去。試みに會稽の元相に謁して去らん、
 不妨相見却殷勤。妨げず相見て却つて殷勤なるを。

【字解】(一) 主人 樂天自ら謂ふ。(二) 會稽 越の山の名。元相は元稹なり。元稹は當時浙東觀察使を以て越州刺史を兼ね。嘗て宰相たりし故元相といふ。(三) 殷勤 れんごるなること。

【題義】周軍事(周は姓)に別るる詩である。

【詩意】吾は老年になつても猶官位が卑賤であるから、吾が去つて後まで君は我を憐んでくれるであらう。君と別れ去つて會稽の元相を訪へば、元相は舊知の間柄であるから互に手を握つて平生の歡を盡すことが出来るであらう。

白樂天詩後集 卷六

律詩 凡六十首

元微之除浙東觀察使喜得杭越隣州先贈長句

按以下並與元微之和答。

元微之浙東觀察使に除せられ、杭越の隣州を得たるを喜び、先づ長句を贈る。按ずるに以下並與元微之和答。

稽山鏡水歡遊地。稽山鏡水歡遊の地、
 犀帶金章榮貴身。犀帶金章榮貴の身。
 官職比君雖校小。官職君に比すれば校小なりと雖も、
 封疆與我且爲隣。封疆我と且隣爲り。
 郡樓對翫千峯月。郡樓對して翫ぶ千峯の月、
 江界平分兩岸春。江界平かに分つ兩岸の春。

【字解】(一) 稽山 山の名。浙東に在り。鏡水は鏡湖。浙江省紹興縣の南に在り。(二) 犀帶 官吏の用ふる帶。金章は金印。(三) 封疆 國境。

律詩 別周軍事 元微之除浙東觀察使喜得杭越隣州先贈長句

杭越風光詩酒主。杭越の風光詩酒の主、

相看更合與何人。相看て更に何人と與にす合き。

【題義】長慶三年冬元稹(字は微之)が浙東觀察使に任せられたので、樂天は杭州に在り元稹は越州に在り、互に州を隣することになつたのを喜び、先づ此詩を元稹に贈つたのである。

【詩意】稽山や鏡湖は相俱に歡遊する地で、君も僕も犀帶金章を佩ぶる榮貴の身である。官職は僕の方が稍劣るけれども、兎も角も界を接することになつたのは嬉しい。郡樓に登つては千峯の月を對照し、兩岸の春色を平分に賞することが出来る。かくて君と僕とは杭越二州の風光詩酒の權を司る主となり、他人をして此權に與らしめぬであらう。

答微之上船後留別 微之が船上りて後留別せるに答ふ

燭下樽前一分手。獨下樽前一たび手を分ち、

舟中岸上兩廻頭。舟中岸上兩つながら頭を廻らす。

歸來虛白堂中夢。歸來虛白堂中の夢、

合眼先應到越州。眼を合せば先づ應に越州に到るべし。

【題義】元稹の船上つて杭州を去る時(元稹は同州刺史から浙東觀察使に轉任して、杭州を歴て越

州に赴任したのである)留め別れた時に答へたのである。

【詩意】燭下に別れの杯をして手を分ちしも尙眷戀の情に堪へず、君は舟中に在り、我は岸上に立つて互に頭を回らして相視た。虛白堂に歸つて寢る夜の夢に、我は先づ君の居る越州に往くであらう。

答微之西陵驛見寄 微之が西陵驛にて寄せられしに答ふ

煙波盡處一點白。煙波盡くる處一點白し、

應是西陵古驛臺。應に是れ西陵古驛臺なるべし。

知在臺邊望不見。知んぬ臺邊に在りて望めども見えず、

暮潮空送渡船廻。暮潮空しく渡船を送りて廻るを。

【題義】元稹が西陵驛(波の名。浙江省蕭山縣の西に在り)から寄せた時に答へたのである。

【詩意】煙波の盡くる處に一點の白いものが見える。あれが多分西陵驛であらう。君はあの驛で我の居る杭州の方を望み見ても我を見ることは出来ずに、只暮潮の空しく渡船を送つて回るのを見るのみであつたであらう。

答微之誇越州州宅 微之の越州の州宅を誇るに答ふ

律詩 答微之上船後留別 答微之西陵驛見寄 答微之誇越州州宅

賀上人回得報書。

賀上人回りて報書を得たり、

大誇州宅似仙居。

大に誇る州宅仙居に似たるを。

厭看馮翊風沙久。

馮翊の風沙を看るを厭ふこと久し、

喜見蘭亭煙景初。

蘭亭の煙景を見るを喜ぶ初。

日出旌旗生氣色。

日出でて旌旗氣色を生じ、

月明樓閣在空虛。

月明かにして樓閣空虛に在り。

知君暗數江南郡。

知んぬ君が暗に江南郡を數ふるに、

除却餘杭盡不如。

餘杭を除却せば盡く如かざるを。

【題義】元稹が越州の州宅の美を誇つたのに答へた詩である。

【詩意】賀上人が回る時に君の手紙を託せられて來た。その手紙を見ると越州の州宅は仙人の住居のやうに立派であると誇つてゐる。久しく長安の風沙を厭へる身が、蘭亭の春景色を見てはさう思ふのも無理はない。日の出づる時は旌旗が氣色を生じ、月の明かなる夜は樓閣が空中に聳え、誠に勝景には相違ない。されば江南の郡を數へて見るに、先づ専ら杭州を除いては越州に及ぶ處はないと君も自ら感じてゐるであらう。

微之重誇州居其落句有西州羅刹之謔因嘲

茲石聊以寄懷

微之重ねて州居を誇る。その落句に西州羅刹の謔あり。因つて茲石を嘲り、聊か以て懷を寄す

君問西州城下事。

君西州城下の事を問ふ、

醉中疊紙爲君書。

醉中紙を疊みて君が爲に書す。

嵌空石面標羅刹。

嵌空たる石面羅刹を標し、

壓捺潮頭敵子胥。

壓捺する潮頭子胥に敵す。

神鬼曾鞭猶不動。

神鬼曾て鞭てども猶動かす、

波濤雖打欲何如。

波濤打つと雖も何如せんと欲する。

誰知太守心相似。

誰か知らん太守心相似たり、

抵滯堅頑兩有餘。

抵滯堅頑兩ながら餘有るを。

- 【字解】(一) 落句。末句。
- (二) 西州。杭州を指して言ふ。羅刹は梵語にて惡鬼なり。咸淳臨安志に秦望山近東南有大石崔嵬、橫截江灣、商船海舶經此、多風浪傾覆。因呼羅刹とある。
- (三) 嵌空。うつろふこと。朱熹の詩に嵌石何嵌空とある。
- (四) 壓捺。おしつける。
- (五) 子胥。伍子胥を嘲つてある香山ならん。

【題義】元稹が重ねて州宅の美を誇り、仙都難畫亦難書、暫合登臨不合居、繞郭煙嵐新雨後、滿山樓閣上燈初、人聲曉動千門開、湖色青涵萬象虛、爲問西州羅刹岸、講頭衝突近何如といふ詩を樂

天に寄せた。その末句に西州羅刹といふ、羅刹語があるので、羅刹石を嘲りて此詩を作り元稹に寄せたのである。

【詩意】君が吾が杭州の事を問ふので醉中筆を走らせて此返書を認める。仰せの通り吾が州には羅刹のやうな大石が横はり、胥山をも壓倒するほどの潮が来る。其石は鬼神の力を以てするもピクともせず大濤が打つてもどうすることも出来ない。然も杭州刺史たる君の心はよく此石に似て、抵滯堅頑更に輪をかけたほどである。

張十八員外以新詩二十五首見寄郡樓月下

吟翫通夕因題卷後封寄微之

張十八員外新詩二十五首を以て寄せらる。郡樓の月下に吟翫通夕す。因つて卷後に題し、封じて微之に寄す。

秦城南省清秋夜 秦城の南省清秋の夜、

江郡東樓明月時 江郡の東樓明月の時、

去我三千六百里 我を去る三千六百里、

得君二十五篇詩 君が二十五篇の詩を得たり。

陽春曲調高難和 陽春の曲調高くして和し難く、

淡水交情老始知 淡水の交情は老いて始めて知る。

坐到天明吟未足 坐して天明に到り吟じて未だ足らず、

重封轉寄與微之 重ねて封じ轉寄して微之に與ふ。

【字解】「一」秦城 長安をいふ。南省は、尚書省をいふ。大明宮の南に在る故なり。「二」江郡 杭州を指していふ。「三」陽春曲調 すぐれてよき詩。宋玉の文に爲陽春白雪、國中屬而和者、不過數十人、以是其曲調高、其和彌寡とある。「四」淡水交情 水の如く淡き交、禮記に君子之交如水とある。

【詩意】君は清秋の夜に長安の尚書省に宿直し、我は杭州の樓上に明月を仰いでゐる。相距ること三千六百里なるも君が二十五篇の詩を得て感慨に堪へない。君の詩は極めて高尚であるから和韻しようと思ふが容易に出来ず、ただ老いて益々交情の深いのを謝するばかりだ。夜の明けるまで吟賞しても尙足らず、重ねて元微之の處へ轉送する。

酬微之 微之題云。郡務稍簡。因得整集舊詩。并連綴酬別封

微之に酬ゆ 微之の題に云く、郡務稍簡なり。因つて舊詩を整集し并せて封草諫草を連綴酬別する。

滿帙填箱唱和詩 帙に滿ち箱に填つる唱和の詩、

律詩 張十八員外以新詩二十五首見寄 酬微之

微之長慶初知制誥。文格高古。始變俗體。屬者效之也。

詩到元和體變新。

詩は元和に到りて體變じて新なり。

律詩或號三元和格。

各有文姬才稚齒。

各、文姬有りて才に稚齒、

蔡邕無兒。有二女。琬字文姬。

俱無通子繼餘塵。

俱に通子の餘塵を繼ぐ無し。

陶潛小兒名通子。

琴書何必求王粲。

琴書何ぞ必ずしも王粲を求めん。

與女猶勝與外人。

女に與ふるは猶外人に與ふるに勝れり。

【七】王粲 三國魏の人。蔡邕樂を見
て之を奇として曰く、吾之に如かず、
吾が家の書籍文章盡く當に之に與ふ
べしと。

【題義】元稹が自作の舊詩を整理して百軸となし、七言律詩を作つて樂天に寄せたので、樂天は其韻に次して酬いたが、餘意が尙盡きないので、更に此十二句の詩を作つたのである。

【詩意】君の聲名は天下に滿ち、饒中の詩文は比ぶ者がない。嘗て作つた封事に對して君は獨り往時を思うてゐるであらうが、我も君と同じく諫官たりし頃を追憶してゐる。互に贈答した詩篇は今や積んで卷軸に滿ち、官に任せられた時互に詔書を認め、君が知制誥になつてから詔書の文辭が高古になり、君と僕との唱和の爲に元和の詩風が一變した。惜しいかな君も僕も子がなく、ただ女子の幼少なのがあるだけである。併し琴書を與へるには強ち王粲を求めなくとも、女に與へるのは赤の他人に與へるよりはましである。

り、君と僕との唱和の爲に元和の詩風が一變した。惜しいかな君も僕も子がなく、ただ女子の幼少なのがあるだけである。併し琴書を與へるには強ち王粲を求めなくとも、女に與へるのは赤の他人に與へるよりはましである。

答微之詠懷見寄

微之の懷を詠じて寄せられしに答ふ

閣中同直前春事。

閣中同じく直す前春の事、

船裏相逢昨日情。

船裏相逢ふ昨日の情。

分袂二年勞夢寐。

袂を分ちて二年夢寐を勞し、

竝牀三宿話平生。

牀を並べて三宿平生を語る。

紫微北畔辭宮闕。

紫微の北畔宮闕を辭し、

滄海西頭對郡城。

滄海の西頭郡城に對す。

聚散窮通何足道。

聚散窮通何ぞ道ふに足らん、

醉來一曲放歌行。

醉ひ來りて一曲歌行を放す。

【字解】【二】閣中 役所。

【三】紫微 星の名。天帝の座なり。

因つて天子の居る所に喻ふ。

【三】滄海 海なり。

【三】歌行 詩歌。

【題義】元稹が詠懷の詩を寄せたのに答へた作である。

律詩 答微之詠懷見寄

【詩意】君と一緒に役所に宿直したのは去年の春の如く、船で相逢うたのは昨日のやうに思はれる。相別れてから二年の間夢寐を勞してゐたので、君は三晩吾が家に泊り寢臺を並べて平生の情を語つた。今や俱に帝京を去つて滄海の西で郡守となつてゐる。聚散窮通は言ふに足らない。ただ酒を借り放歌して憂を遣るのみである。

酬微之誇鏡湖

微之の鏡湖を誇るに酬ゆ

我嗟身老歲方徂。我は身老いて歳方に徂くを嗟き、
君更官高興轉孤。君は更に官高くして興轉た孤なり。
軍門郡閣曾聞否。軍門郡閣曾て聞なりや否や、
禹穴耶溪得到無。禹穴耶溪到るを得しや無や。
酒盞省陪波卷白。酒盞は波の白を卷くに陪するを省き、
骰盤思共彩呼盧。骰盤は彩の盧を呼ぶを共にせんことを
一泓鏡水誰能羨。一泓の鏡水誰か能く羨まん、
自有曾中萬頃湖。自ら曾中萬頃の湖あり。

【字解】一 軍門 元稹は浙東觀察使だからいふ。郡閣は刺史の役所。元稹は越州刺史を兼ねてゐた。
二 禹穴 越の會稽山の一峰なり。上に禹の廟あり。耶溪は浙江紹興縣に在る溪の名。西施の紗を浣ひし處なり。
三 酒盞 酒杯。
四 骰盤 雙陸の盤。彩は采に同じ、さいころ。盧は樗蒲の五子皆黒なるをいふ。最勝の采なり。

微之詩云。孫國虎寺題宜看。不可必述。遠遊後三鏡湖。故以此言。微答之。

【題義】元稹の鏡湖（浙江省紹興縣の南に在り）の美を誇つた詩に酬いたのである。

【詩意】我は身の老い歳の去るを嗟いて居るが、君も官が高くて歡興を俱にする者のないのを恨んでゐるであらう。職務にも閑暇があるであらうか。禹穴や若耶溪あたりをも見物したであらうか。我は不幸にして快飲を俱にすることが出来ないが、共に雙陸を闘はして全勝を博したいものだと思つてゐる。併し一個の鏡湖などは敢て羨まない。吾が胸中には萬頃の大湖があるから。

雪中即事寄微之

雪中即事微之に寄す

連夜江雲黃慘澹。連夜の江雲黃にして慘澹、
平明山雪白糝糊。平明の山雪は白くして糝糊。
銀河沙漲三千里。銀河沙漲る三千里、
梅嶺花排一萬株。梅嶺花排す一萬株。
北市風生飄散麪。北市風生じて散麪を飄し、
東樓日出照凝酥。東樓日出でて凝酥を照す。

【字解】一 連夜 通宵。慘澹 陰慘な貌。
二 平明 夜が明けて。糝糊は分明ならぬ貌。
三 銀河 あまのがは。
四 散麪 うどんこ。
五 凝酥 牛乳の固まりしもの。

誰家高士關門戶。誰が家の高士ぞ門戸を關し、
 何處行人失道途。何の處の行人ぞ道途を失ふ。
 舞鶴庭前毛稍定。舞鶴庭前毛稍定まり、
 擣衣砧上練新鋪。擣衣砧上練新に鋪く。
 戲團稚女呵紅手。戲團稚女紅手を呵し、
 愁坐衰翁對白鬚。愁坐の衰翁白鬚に對す。
 壓瘴一州除疾苦。瘴を壓して一州疾苦を除き、
 呈豐萬井盡歡娛。豐を呈して萬井盡く歡娛す。
 潤含玉德懷君子。潤は玉德を含みて君子を懷ひ、
 寒助霜威憶大夫。寒は霜威を助けて大夫を憶ふ。
 莫道煙波一水隔。道ふ莫れ煙波一水隔たると、
 何妨氣候兩鄉殊。何ぞ妨げん氣候兩鄉殊なるを。
 越中地暖多成雨。越中は地暖にして多く雨を成す、
 還有瑤臺瓊樹無。還有瑤臺瓊樹有りや無や。

【一】大夫 御史大夫。御史を霜威といふ。刑罰を掌る官なればなり。
 【二】越中 元稹の居る處。
 【三】瑤臺瓊樹 雪の爲に覆は玉の如く樹木は瓊の如くなること。

【題義】 雪中の光景を敘して元稹に寄せた詩である。

【詩意】 通背黄色な雲が天を罩めてゐたが、夜が明けてから見ればほの白く山に雪が降つてゐる。三千里外の銀河に水が漲り、梅嶺の萬株の花が一時に開いたやうに見え、北市に風が起つて饅餈粉を吹き飛ばし、東樓に日が昇つて凝酥を照すのではないかと疑はれる。高士は門を閉ちて出でず、行人は道に迷ひ、庭は舞鶴の毛が落ちてゐるやうに見え、砧石の上に練絹を敷いたやうに見える。手團を弄する女兒は寒さの爲に紅の手を息で熱め、愁へ坐する老翁は白鬚と相對してゐる。此雪こそ一州の爲に病菌を壓伏し、萬井(二十五家を一井といふ)の爲に豐年の歡を呈し、その徳は君子に似て玉の如く、その威力は御史に似て霜の如くである。君の居る越州とは川一筋を隔つるのみであるが、氣候の相違は非常なもので、君の方では土地が暖だから雨が多く、恐らくかかる瑤臺瓊樹の美を見ることが出来まい。

醉封詩筒寄微之 醉うて詩筒を封じ微之に寄す

一生休戚與窮通。一生の休戚と窮通と、
 處處相隨事事同。處處相隨ひて事事同じ。
 未死又隣滄海郡。未だ死せずして又滄海郡に隣し、

律詩 所封詩筒寄微之

【字解】 【一】 詩筒 詩を入れて送る竹筒。後集卷五に與微之二唱和、來去常以三竹筒貯詩、陳協律美而成。ノ篇云云と題する詩がある。

無兒俱作白頭翁。兒無くして俱に白頭の翁と作る。
 展眉只仰三杯後。眉を展べて只仰ぐ三杯の後、
 代面唯憑五字中。面に代へて唯憑む五字の中。
 爲向兩州郵吏道。爲に兩州の郵吏に向ひて道ふ、
 莫辭來去遞詩筒。來去して詩筒を遞するを辭する莫れ。

- 【一】 休戚 よろこび、かなしみ。
- 【二】 首海郡 海に近き州。
- 【三】 代面 面會の代り。五字は五言詩。

【題義】 酔うて詩筒を封じて元稹に寄せた詩である。

【詩意】 君と僕とは殆ど一生の休戚窮通を同じうし、まだ死にもせず海に近き州を鄰し（元は越州に在り、白は杭州に在り）俱に白頭翁となつても鬮子が無い。愁を霽らす爲に三杯の酒を傾けた後は面會する代りに詩を贈答して互に慰めてゐる。故に兩州の郵吏に申し附けるが、二人の詩筒を遞送することを厭うてはならぬぞ。

除夜寄微之

除夜微之に寄す

鬢毛不覺白氈氈。鬢毛覺えず白くして氈氈、
 一事無成百不堪。一事成る無く百堪へず。

【字解】 氈氈、毛の長き貌。

共惜盛時辭闕下。共に惜む盛時闕下を辭せしを、

同嗟除夜在江南。同じく嗟く除夜江南に在るを。

家山泉石尋常憶。家山の泉石は尋常に憶ひ、

世路風波子細諳。世路の風波は子細に諳んず。

老校於君合先退。老いて君に校ぶれば合に先づ退くべし、

明年半百又加三。明年半百又三を加ふ。

【題義】 長慶三年十二月晦日の晩に元稹に寄せた詩である。

【詩意】 鬢の白毛がいつの間にか長く伸び、何一つ仕出かした事はなく盡く任に堪へない。今のやうな結構な治世に帝京を離れてゐることを共に惜み、今年の大晦日にも江南に沈滞してゐるのを同じく嗟き、故郷の泉石は常に胸中に往來し、世路の艱難は十分に嘗め盡した。來年は僕は五十三になる。君より年上であるから一足先きに引退すべきである。

- 【一】 尋常 平生。いつも。
- 【二】 子細 こまかに。
- 【三】 半百 五十歳。

早春西湖閒遊悵然興懷憶與微之同賞因思
 在越官重事殷鏡湖之遊或恐未暇偶成十八
 韻寄微之

律詩 除夜寄微之 早春西湖閒遊悵然興懷憶與微之同賞

早春西湖に閑遊し、慨然として懐を興し、微之と同じく賞せしことを憶ふ。因つて思ふ越に在りて官重く事繁く、鏡湖の遊或は未だ暇あらざらんことを恐る。偶十八韻を成して微之に寄す。

上馬復呼賓、湖邊景氣新。

馬に上りて復賓を呼ぶ、湖邊景氣新なり。

管絃三數事、騎從十餘人。

管絃三數事、騎從十餘人。

立換登山屐、行攜漉酒巾。

立ちて山に登る屐を換へ、行くゆく酒を漉す巾を攜ふ。

逢花看當妓、遇草坐爲茵。

花に逢ひては看て妓に當て、草に遇ひては坐して茵と爲す。

西日籠黃柳、東風蕩白蘋。

西日黃柳を籠め、東風白蘋を蕩かす。

小橋裝鴈齒、輕浪登魚鱗。

小橋鴈齒を裝ひ、輕浪魚鱗を登む。

畫舫牽徐轉、銀船酌慢巡。

畫舫は牽きて徐に轉じ、銀船は酌みて慢く巡る。

野情遺世累、醉態任天真。

野情世累を遺れ、醉態天真に任す。

彼此年將老、平生分最親。

彼此年將に老いんとす、平生分最も親し。

高天從所願、遠地得爲鄰。

高天願ふ所に從ひ、遠地鄰たるを得たり。

雲樹分三驛、煙波限一津。

雲樹三驛を分ち、煙波一津を限る。

翻嗟寸步隔、却厭尺書類。

翻りて寸歩の隔たるを嗟き、却つて尺書類なるを厭ふ。

浙右稱雄鎮、山陰委重臣。

浙右雄鎮と稱せられ、山陰重臣に委す。

貴垂長紫綬、榮駕大朱輪。

貴くして長紫綬を垂れ、榮えて大朱輪に駕す。

出動刀槍隊、歸生道路塵。

出づるときは刀槍の隊を動かし、歸るときは道路の塵を

鴈驚弓易散、鷓怕鼓難馴。

鴈は弓に驚きて散じ易く、鷓は鼓を怕れて馴れ難し。

百吏瞻相面、千夫捧擁身。

百吏は瞻て面を相し、千夫は捧げて身を擁す。

自然閒興少、應負鏡湖春。

自然に閒興少し、應に鏡湖の春に負くべし。

【字解】

【一】登山屐、屐は木履なり。南史謝靈運傳に、嘗著木屐、上山則去其前齒、下山去其後齒とある。【二】漉酒巾、宋書謝靈運傳に、漉酒三共酒熟、取頭上葛巾漉酒、畢還復著之とある。【三】鴈齒、鴈の齒のやうに排列すること。【四】畫舫、美しく飾りし船。【五】銀船、杯なり。【六】世累、世間のわづらひ。【七】彼此、君も僕も。【八】尺書、書信。【九】浙右、浙西。元稹の居る處。維嶽は重鎮といふが如し、觀察使たるをいふ。【一〇】山陰、縣の名。浙江紹興府治、元稹の居る處。【一一】鏡湖、湖の名。越州に在る。

【題義】早春の時節に西湖（杭州に在り）に閑遊し、慨然として感懐を興し、嘗て元稹（字は微之）と遊賞を共にせしことを憶ふにつけ、元稹の越州に在り官重く事繁くして鏡湖に遊ぶ暇もなく居るならんと思ひ、この十八韻三十六句の長詩を作つて元稹に寄せたのである。

【詩意】嘗て馬に乗り君と相携へて春西湖の邊に遊んだことがあつた。管絃など兩三件の道具を用意

し、十餘人の從者を率ゐ、謝靈運に倣つて山に登る下駄をはき換へ、陶淵明のやうに酒を漉す頭巾を携へ、花に逢へば美妓と見做し、草に遇へば茵となし、いつしか時が移つて西日が淺黄色の柳の新芽を照し、東風が浮草を漂蕩し、橋は雁の齒のやうに列び、波は魚鱗を疊んだやうであつた。其間に畫舫を泛べて乗りまはし、さしつおさへつ慢に酒を酌み、かくて世上の煩累を遺れて自然の情に任せて樂んだ。さて君と僕とは親友の間柄で、嘗て共に宮中に仕へたが、今や漸く老境に入り、遠地に謫せられ各州を鄰して刺史となり、雲樹が三驛を分ち煙波が一律を限るのみであるが、往來して遊ぶことも出來ず、ただ徒に書信を往復するのみである。君は浙東觀察使兼越州刺史の榮職に在りて、紫の印綬を垂れ朱塗の馬車に乗り、數多の衛兵を從へて出入するので、雁は驚き散じ鷓鴣は怕れて馴れず、羣吏は瞻ぎて面を見、千夫は君を包圍するといふ有様で、自然に閑興がなくなるであらうから、恐らくは鏡湖の春を賞することも出來ずに居るであらう。お氣の毒な次第だ。

答微之見寄

時在郡樓

微之の寄せられしに答ふ 時に郡樓に在りて雪に對す。

可憐風景浙東西

可憐の風景浙東西

【字解】(一)可憐 愛すべしといふ意。浙東西は浙江の東と西。

先數餘杭次會稽

先づ餘杭を數へ次に會稽

(二)餘杭 杭州。樂天の居る處。會稽は越州。元稹の居る處。

禹廟未勝天竺寺

禹廟は未だ天竺寺に勝らず、

(三)禹廟 會稽山上に在り、禹の廟がある。天竺寺は杭州に在る。

錢湖不羨若耶溪

錢湖は若耶溪を羨まず。

(四)錢湖 錢塘湖即ち西湖。杭州に在る。若耶溪は越州に在り、西施浣紗の處。

擺塵野鶴春毛暖

塵を擺する野鶴春毛暖に、

拍水沙鷗濕翅低

水を拍つ沙鷗濕翅低る。

更對雪樓君愛否

更に雪樓に對す君愛するや否や、

紅欄碧甃點銀泥

紅欄碧甃銀泥を點す。

【題義】元稹が詩を寄せたのに答へた作で、時に樂天は郡樓に雪を眺めてゐたので末に雪景を點出したのである。

【詩意】浙江の東西に跨つて景色の好い處といへば先づ杭州が第一で次は越州であらう。越の禹廟は杭の天竺寺に劣り、杭の西湖は越の若耶溪に勝る。況んや野鶴沙鷗の飛びかふ景色は、畫の如くである。今吾は雪樓に在りて朱塗の欄干や緑の甃の上に銀泥の點點してゐるのを見てゐるが、君も此景色を愛するであらう。

得湖州崔十八使君書喜與杭越隣郡因成長

句代賀兼寄微之

湖州の崔十八使君の書を得たるに、杭・越と隣郡たるを喜ぶ。因つて長句を成

して賀に代へ、兼ねて微之に寄す

三郡何因此結縁 三郡何に因りてか此に縁を結べる、

貞元科第忝同年 貞元の科第同年を忝くす。

故情歡喜開書後 故情歡喜す書を開く後、

舊事思量在眼前 舊事思量眼前に在り。

越國封疆吞碧海 越國の封疆碧海を呑み、

杭城樓閣入青煙 杭城の樓閣青煙に入る。

吳興卑小君應屈 吳興は卑小君應に屈すべし、

爲是蓬萊最後仙 是れ蓬萊最後の仙たらん。

貞元初同登科。崔君名最在後。當時崔自
詠云、人間不令雲間事。應笑蓬萊最後仙。

【字解】【一】使君 刺史の稱。

【二】三郡 湖州、杭州、越州。

【三】貞元 德宗の年號。同年は同年
の及第者。

【四】封疆 くにざかひ。

【五】吳興 縣の名。湖州なり。

【六】蓬萊 仙山の名。

【題義】湖州刺史崔玄亮（十八は其輩行）の書信に杭・越と州を接するを得たことを喜んでゐる。因つて此詩を作つて賀詞に代へ、兼ねて元稹に寄せたのである。

【詩意】我等三人は貞元十六年の進士であるが、不思議な縁で各杭・越・湖三州の刺史になつた。君の手紙を見れば歡喜の情が現はれて、色色昔の事を憶ひ出して目のあたり見るが如くである。越州は地

を碧海に接し、杭州は城樓が青煙の中に聳え、皆風景の好い處である。ただ君の居る湖州だけは稍劣つてゐる。是れぞ蓬萊の最後の仙たる所以であらう。

早春憶微之

早春微之を憶ふ

昏昏老與病相和 昏昏として老と病と相和す、

感物思君歎復歌 物に感じ君を思ひて歎じて復歌ふ。

聲早雞先知夜短 聲早くして雞先づ夜の短きを知り、

色濃柳最占春多 色濃にして柳最も春を占むること多し。

沙頭雨染斑斑草 沙頭雨は染む斑斑たる草、

水面風驅瑟瑟波 水面風は驅る瑟瑟たる波。

可道眼前光景惡 道ふ可けんや眼前光景惡しと、

其如難見故人何 故人を見難きを其如何せん。

【題義】春の初に元稹を憶うて作つた詩である。

【詩意】吾は昏昏として老病相仍り、事に感じ君を思うて歎息してゐる。今や春になつて夜が短く柳

【字解】【一】昏昏 ぼんやりする
ること。

【二】斑斑 色のまだらなこと。

【三】瑟瑟 珍寶の名。

【四】故人 舊友。元稹之を指す。

の絲が色濃くなり、沙頭の草は雨に潤うて斑をなし、水面には風に吹かれて漣が立つてゐる。この好景色に對して君と共に賞することの出来ないのが遺憾である。

重寄別微之

重ねて微之に寄せ別る

憑仗江波寄一辭

江波に憑仗して一辭を寄す、

不須惆悵報微之

須ひす惆悵して微之に報ゆるを。

猶勝往歲峽中別

猶勝れり往歲峽中の別、

灑灑堆邊招手時

灑灑堆邊手を招きし時。

【題義】重ねて元稹に寄せて別れを告げた詩である。

【詩意】江波に託して一詩を君に寄せるが決して悲観してはゐない。先年峽中で別れた時、灑灑堆のあたりで手招きしたのよりは遙にまさつてゐるから。(今度は洛陽へ歸るのだからであらう。)

看常州柘枝贈買使君

按此下、自杭州歸洛詩。

常州の柘枝を見て買使君に贈る。按ずるに此より下、杭州より洛陽に歸るの詩ならん。

莫惜新衣舞柘枝

新衣を惜む莫くして柘枝を舞へ、

也從塵汗汗露垂

也塵汗汗露の垂るるに従せよ。

料君即却歸朝去

料るに君即ち却つて朝に歸り去らば、

不見銀泥衫故時

銀泥衫の故からん時を見ざらん。

東寄三楊柳枝舞衫、偶因三言酒試衫、輒成長句寄謝之を參照せよ。

【題義】常州の柘枝舞を見て常州刺史買使君に贈つた詩である。

【詩意】新衣を惜まずに柘枝を舞ひ、塵や汗の汗すに任せるがよい。君が今にも都に召還されることにならば、銀泥衫の古くなる間がないであらうから。

汴河路有感

汴河の路にて感あり

三十年前路孤舟重往還

三十年前の路、孤舟重ねて往還す。

繞身新眷屬舉目舊鄉關

身を繞れるは新眷屬、目を舉ぐれば舊郷關。

事去唯留水人非但見山

事去りて唯水を留め、人非にして但山を見る。

啼襟與愁鬢此日兩成斑

啼襟と愁鬢と、此日兩ながら斑を成す。

【字解】(一) 人非 人が死んでしまつて居ない。

律詩 重寄別微之 看常州柘枝贈買使君 汴河路有感

【字解】(一) 常州 今の江蘇省武進縣。柘枝は舞の名。(二) 買使君 使君は刺史の稱。買は其姓。

(三) 銀泥衫 舞ふ時に著る上著。後集卷十三の劉蘇州寄三醜酒糯米李斯

【題義】汴河（杭州から洛陽に往く途中の河）の路を過ぎて感ずる所を述べた詩である。
 【詩意】嘗て三十年前に通つた路を今復孤舟を泛べて過ぐるに、身の周りに居る者は皆其後に生れた家族で、目を舉げて見る所は昔ながらの村邑である。往事は名残すら留めず唯此河を存し、當時の人は皆死んで但山を見るのみである。涙にぬれた衣襟も愁鬢も今は共に朽ち果てて斑になつてしまつた。

堽橋舊業

堽橋の舊業

別業堽城北。拋來二十春。

別業堽城北。拋ち來る二十春。

改移新逕路。變換舊村隣。

改め移す新逕路。變換す舊村隣。

有稅田疇薄。無官弟姪貧。

稅有りて田疇薄く、官無くして弟姪貧し。

田園何用問。強半屬他人。

田園何を問てか問はん、強半他人に屬す。

【字解】【一】堽橋。漕河の間に在る地名。舊業はもとの別莊。【二】別業。別莊。【三】田園。田畠。【四】強半。太半。半以上。

【題義】堽橋の舊莊についての詩である。

【詩意】堽橋の北の別莊に別れ去つてから已に二十年になる。今來て見れば大分徑などが改まり、昔の村の様も變つてゐる。稅が高くて田畑も瘠せ、官がないので家族が飢えて、大半は人手に渡つてしまつたから、今更田地を問ふ氣もしない。

まつたから、今更田地を問ふ氣もしない。

茅城驛

茅城驛

汴河無景思。秋日又淒淒。

汴河は景思無く、秋日又淒淒。

地薄桑麻瘦。村貧屋舍低。

地薄くして桑麻瘦せ、村貧くして屋舍低る。

早苗多間草。濁水半和泥。

早苗多く草を間へ、濁水半泥に和す。

最是蕭條處。茅城驛向西。

最是蕭條たる處、茅城驛の向西。

【字解】【一】汴河。河の名。【二】漕。漕運。漕しき驛。【三】蕭條。淋しき驛。

【題義】茅城驛（渡場の名。陝津ともいふ）で作つた詩である。

【詩意】汴河のあたりは至つて殺風景で、且秋の日が小寒を感ずる。地味がわるいので桑麻が瘦せ、村が貧しいので民家もみすぼらしく、苗には多く雜草がまじり濁水が半泥を混じてゐる。茅城驛の西のあたりは就中最も物淋しい。

河陰夜泊憶微之

律詩 堽橋舊業 茅城驛 河陰夜泊憶微之

憶君我正泊行舟。君を憶ひて我正に行舟を泊す、
望我君應上郡樓。我を望みて君應に郡樓に上るべし。
萬里月明同此夜。萬里月明かに此夜を同じうす、
黃河東面海西頭。黃河の東面海の西頭。

【題義】河陰は縣の名。今の河南省孟津縣の東に在る。此詩は河陰に夜船を泊して越州の元稹を憶うたのである。

【詩意】我は黃河の東に在り、君は碧海の西（越州）に在り、萬里を距てて同じく今夜の明月を觀ながら、我は此地に舟を泊して遙に君を憶うてゐるが、君は郡樓に上つて我を望んでゐるであらう。

杭州廻舫

杭州廻舫

自別錢塘山水後。錢塘の山水に別れてより後、
不多飲酒懶吟詩。多く酒を飲まず詩を吟するに懶し。
欲將此意憑廻棹。此意を將て廻棹に憑まんと欲し、
與報西湖風月知。與に西湖の風月に報じて知らしむ。

【字解】一 錢塘 杭州。

二 廻棹 歸る舟。

三 西湖 杭州に在る湖。

【題義】杭州に船を歸す時の詩である。

【詩意】杭州の山水に別れて後は、酒を飲む氣にもなれず詩を吟する氣にもなれない。吾が此眷戀の情を歸る舟に託し、西湖の風月に知らせようと思ふ。

途中題山泉

途中山泉に題す

決決涌岩穴。濺濺出洞門。
向東應入海。從此不歸源。
似葉飄辭樹。如雲斷別根。
吾身亦如此。何日返鄉園。

決決として岩穴より涌き、濺濺として洞門より出づ。
東に向ひて應に海に入るべし、此より源に歸らず。
葉の飄りて樹を辭するに似たり、雲の斷えて根に別るる。
吾が身も亦此の如し、何れの日か郷園に返らん。が如し。

【字解】一 決決 泉の涌く貌。二 濺濺 流れ注ぐ貌。三 根 樹根、即ち石なり。四 郷園 故郷。

【題義】途中で山の泉に題した詩である。

【詩意】混混と岩の間から湧き出し洞門から濺濺と流れ注ぎ、葉の飄りて樹を辭するが如く、雲の斷えて石に別るるが如く、東流して海に入り再び源には歸らない。吾が身も此泉と同じである。いつになつたら故郷に還れるであらう。

欲到東洛得楊使君書。因此報

東洛に到らんと欲して楊使君の書を得。因つて此を以て報ゆ

向公心切向財疎。公に向ひては心切にして財に向ひては

淮上休官洛下居。淮上官を休めて洛下に居る。疎なり、

三郡政能從獨步。三郡の政能獨歩に従す、

十年生計復何如。十年の生計復何如。

使君灘上久分手。使君灘上久しく手を分かち、

別駕渡頭先得書。別駕渡頭先づ書を得たり。

且喜平安又相見。且喜ぶ平安にして又相見んことを、

其餘外事盡空虛。其餘の外事は盡く空虛なり。

【題義】將に東洛に著かうとする時楊使君（使君は刺史の稱）から手紙が届いた。因つて此詩を作つて答へたのである。

【詩意】君は公事には熱切であるが私財には極めて淡泊である。嘗て淮上の官を罷め去つて今は洛陽に閑居してゐる。以前は三州の刺史として無雙の治績を擧げたが、已に閑居十年であるから恐らく生

計も豊ではあるまい。君とは使君灘の邊で久しき前に別れたが、今又別駕渡の邊で君の手紙を受取つた。遠からず君の無事な顔を見られると思へば何よりも嬉しい。其他の事はどうでも構はぬ。

洛下寓居

洛下寓居

秋館清涼日。書因解悶看。秋館清涼の日、書は悶を解くに因りて看る。

夜牕幽獨處。琴不爲人彈。夜牕幽獨の處、琴は人の爲に彈せず。

遊宴慵多廢。趨朝老漸難。遊宴慵くして多く廢し、朝に趨るは老いて漸く難し。

禪僧教斷酒。道士勸休官。禪僧は酒を斷つを教へ、道士は官を休むるを勸む。

渭曲莊猶在。錢塘俸尙殘。渭曲莊猶在り、錢塘俸尙殘れり。

如能便歸去。亦不至飢寒。如し能く便ち歸り去るも、亦飢寒に至らず。

【字解】〔一〕渭曲。渭水のほとり。莊は村莊。〔二〕錢塘。杭州。〔三〕歸去。官を罷め去ること。

【題義】洛陽に寓居することを述べた詩である。

【詩意】秋の涼しい日には心の愁を霽らす爲に書を読み、夜の淋しい時には自ら慰める爲に琴を弾じ、出歩くのが大儀だから遊宴を罷め、朝廷に参趨するさへ困難になつた。禪僧からは酒を禁するやうに教へられ、道士からは官を辭することを勧められる。渭水のほとりには舊宅がまだ存し、杭州刺史の

律詩 欲到東洛得楊使君書因此報 洛下寓居

時に溜めた俸給がまだ残つてゐるから、實は今すぐ官を罷めても飢寒の心配はない。

味道

道を味ふ

叩齒晨興秋院靜、齒を叩き晨に興きて秋院靜なり、

焚香冥坐晚牕深、香を焚き冥坐して晚牕深し。

七篇眞誥論仙事、七篇の眞誥は仙事を論じ、

一卷檀經說佛心、一卷の檀經は佛心を説く。

此日盡知前境妄、此日盡く知る前境の妄なるを、

多生曾被外塵侵、多生曾て外塵に侵さる。

自嫌習性猶殘處、自ら嫌ふ習性の猶殘れる處、

愛詠閒詩好聽琴、閑詩を詠するを愛し琴を聽くを好む。

【題義】道を修することを述べた詩である。

【詩意】秋庭の靜な處で朝早く起きて齒を叩き、奥深い窓の下で夜香を焚いて黙坐し、眞誥や檀經を讀んで老佛の教を悟り、茲に始めて從來の境地の妄なるを知り、すべての生活が外塵に汗されてゐたことを知つた。併し詩を詠じ琴を聽くのを好むことは今尙習癖として残つてゐる。

好聽琴

琴を聽くを好む

本性好絲桐、塵機聞即空、本性絲桐を好み、塵機聞けば即ち空し。

一聲來耳裏、萬事離心中、一聲耳裏に來れば、萬事心中を離る。

清暢堪銷疾、恬和好養蒙、清暢にして疾を銷するに堪へ、恬和にして蒙を養ふに好し。

尤宜聽三樂、安慰白頭翁、尤も宜しく三樂を聽き、白頭翁を安慰すべし。

【字解】(一) 絲桐、琴なり。(二) 塵機、俗念。(三) 三樂、列子天瑞篇に、孔子遊於泰山、見榮啓期處委索、鼓琴而歌、孔子問曰、先生所三以樂何也、曰、天生萬物、惟人為貴、而吾得為為人、是一樂也、男尊女卑、吾既得為男矣、是二樂也、人生有不見三日月、不為三福、吾既已行年九十矣、是三樂也とある。(四) 白頭翁、樂天自ら謂ふ。

【題義】琴を聽くのを好むことを述べた詩である。

【詩意】吾は琴を聽くのを好んで、一たび聞けば俗念が一掃され、萬事が心中から離れ去つてしまふ。琴の音の清澄さは能く疾を除くに足り、その穩和さは愚蒙を養ふに宜しい。だから榮啓期の歌つた三樂でも聽けば忽ち白頭翁を慰めることが出来る。

愛詠詩

詩を詠するを愛す

律詩 味道 好聽琴 愛詠詩

辭章諷詠成千首。辭章諷詠千首を成し、

心行歸依向一乘。心行歸依一乘に向ふ。

坐倚繩牀閑自念。坐して繩牀に倚りて閑に自ら念ふ、

前生應是一詩僧。前生應に是れ一詩僧なるべし。

【題義】詩を詠することを好むことを述べた詩である。

【詩意】諷詠忽ち千首の詞章を成し、心も行も佛道に歸向してゐる。坐して、繩牀に倚つて自ら思ふに、自分は前生には多分詩僧でもあつたのだらう。

【字解】【一】一乘。佛道。

【三】繩牀。繩をわみたる腰掛。

酬皇甫庶子見寄

皇甫庶子の寄せられしに酬ゆ

掌綸不稱君應笑。綸を掌りて稱はず君應に笑ふべし、

典郡無能我自知。郡を典りて能無し我自ら知る。

別詔忽驚新命出。別詔忽ち驚く新命の出づるを、

同寮偶與夙心期。同寮偶々夙心と期す。

春坊瀟灑優閑地。春坊瀟灑たり優閑の地、

【字解】【一】掌綸。詔を草すること。樂天嘗て知制誥たり。

【二】典郡。樂天は忠州杭州等の刺史たり。【三】同寮。同官。樂天は長慶四年、太子左庶子に任ぜらる。【四】春坊。太子の宮。【五】瀟灑。袁老の貌。【六】二疏。漢の疏廣太子の

秋鬢蒼浪老大時。秋鬢蒼浪たり老大の時。

獨占二疏應未可。獨り二疏を占むるは應に未だ可ならざ

龍樓見擬覓分司。龍樓は分司を覓むるに擬せらる。

上嘗召太子、出龍樓門、不致朝。龍道とある。分司は東都に分司すること。

【題義】太子左庶子(官名)皇甫氏(湜か)が詩を寄せられたのに酬いた作である。

【詩意】吾は嘗て制誥を起草する官になつたが君の御存じの通り其任に堪へなかつた。其後諸州の刺史になつたが是れ亦無能であつたことは自ら認めてゐる。然るに此度特別の詔命があつて君と同官に任せられたのは意外ではあるが、私に自ら期してゐた所でもある。太子の官は閑職であるから吾の如き老骨には適當してゐる。おまけに二疏の如く歸隱することを許されず、更に東都分司(官名)までも兼ねしめられるとは誠に辱いことである。

太傅となり、兄の子受少傅となる。年七十に滿ちしを以て官を辭して郷に歸る。【七】龍樓。太子の宮門。漢書成帝紀に、帝爲太子、居桂宮、

臥疾

疾に臥す

閒官臥疾絕經過。閒官疾に臥して經過を絶つ、

居處蕭條近洛河。居處蕭條洛河に近し。

水北水南秋月夜。水北水南秋月の夜、

【字解】【一】閒官。閑職。經過。は人の來訪。

【三】蕭條。淋しき貌。

管絃聲少杵聲多。管絃聲少にして杵聲多し。

【三】杵聲 きねたの聲。

【題義】 秋日疾に臥してゐた時の詩である。

【詩意】 閑職を奉じ且は疾に臥してゐるので來り訪ふ人もなく、洛水の近くの淋しい處に淋しく暮してゐる。洛水の南北にかけて秋月の冴えわたる夜に、管絃の聲ならぬ砧の聲をあちこちに聞くのは誠に悲しい。

遠師

遠師

東宮白庶子、南寺遠禪師。東宮の白庶子、南寺の遠禪師。

何處遙相見、心無一事時。何の處にか遙に相見ん、心に一事無き時。

【字解】 【一】 東宮 太子なり。白庶子は太子左庶子白樂天自ら謂ふ。【二】 南寺 廬山の東林寺を指す。

【題義】 遠師は廬山の東林寺の僧であらう。

【詩意】 太子左庶子の白樂天と廬山東林寺の遠禪師とは、身は遠く相離るとも心の閑なる時は互に心中に相見るのである。

問遠師

遠師に問ふ

葷羶停夜食、吟詠散秋懷。

葷羶夜食を停め、吟詠秋懷を散す。

笑問東林老、詩應不破齋。

笑ひて東林の老に問ふ、詩は應に齋を破らざるべし。

【字解】 【一】 葷羶 くさき野菜となまぐさき肉。【二】 東林 廬山の寺の名。【三】 齋 精進。

【題義】 遠師に問うた詩である。

【詩意】 吾は夜食に葷羶をたべず、ただ詩を吟詠して愁をまぎらしてゐる。笑つて遠師に尋ねるが、詩を吟ずるのは精進の妨にはなりませんまい。

小院酒醒

小院酒醒

酒醒閒獨步、小院夜深涼。

酒醒めて閒に獨歩すれば、小院夜深けて涼し。

一領新秋簟、三間明月廊。

一領新秋の簟、三間明月の廊。

未收殘蓋杓、初換熱衣裳。

未だ残れる蓋杓を收めず、初めて熱き衣裳を換ふ。

好是幽眠處、松陰六尺牀。

好し是れ幽眠の處、松陰六尺の牀。

【字解】 【一】 小院 狭き庭。【二】 一領 一件、一枚といふが如し。【三】 三間 柱と柱との間を一間とす。伊藤東厓の乗燭談に見ゆ。【四】 蓋杓 さかづきと柄杓。

【題義】 酒後小院に閑歩したこと述べた詩である。

律詩 遠師 問遠師 小院酒醒

【詩意】三間の廊をば明月が照し其處に一枚の簾が敷いてある。まだ散らかつてゐる杯盤を片附けもせず、先づ夏著を脱ぎかへた。松の陰の六尺の寢臺の上に幽眠したが、酒が醒め夜が深けるや起きて小庭を閑歩した。

贈侯三郎中

侯三郎中に贈る

【字解】(一) 東都 洛陽。

老愛東都好寄身。老いて東都を愛して身を寄するに好し、
足泉多竹少埃塵。泉足り竹多くして埃塵少し。
年豊最喜唯貧客。年豊にして最も喜ぶ唯貧客、
秋冷先知是瘦人。秋冷にして先づ知る是れ瘦人。
幸有琴書堪作伴。幸に琴書の伴と作すに堪へたる有り、
苦無田宅可爲隣。田宅の隣と爲す可き無きに苦しむ。
洛中縱未長居得。洛中縱ひ未だ長く居り得ざるも、
且與田蘇遊過春。且く田蘇と遊びて春を過さん。

【三】田蘇 賢人の名。左傳襄公七年に、韓無忌請立起曰、與田蘇遊、而曰舒仁とあり。注に田蘇賢人とあり。ここは侯郎中に喩ふ。

【題註】侯三郎中(三は輩行、郎中は官名)に贈つた詩である。

【詩意】年老いては東都洛陽に住むがよい。泉もあり竹もあつて塵埃が少いから。僕のやうな貧乏人は年の豊なのが一番嬉しく、身が瘦せてゐるので人より早く秋冷を感じる。幸に伴侶となすに足る琴書はあるが、惜しいかな鄰となすべき人がない。將來永く洛陽にゐられないかも知れぬが、暫く君のやうな賢者と共に遊んで春を過さう。

求分司東都寄牛相公十韻

東都に分司たらんことを求めて牛相公に寄す十韻

忽忽心如夢。星星鬢似絲。忽忽として心夢の如く、星星として鬢絲に似たり。
縱貧長有酒。雖老未拋詩。縱ひ貧なるも長へに酒有り、老いたりと雖も未だ詩を拋
儉薄身都慣。疎頑性頗宜。儉薄身都て慣れ、疎頑性頗る宜し。
飯粗餐亦飽。被暖起常遲。飯粗なるも餐亦飽き、被暖にして起くる常に遅し。
萬里歸何得。三年伴是誰。萬里にして歸る何ぞ得ん、三年伴ふ是れ誰ぞ。
華亭鶴不去。天竺石相隨。華亭鶴去らず、天竺石相隨ふ。

「たす。」

王尹貫將馬。田家賣與池。

王尹貫ふに馬を將てし、田家賣りて池を與ふ。

律詩 贈侯三郎中 求分司東都寄牛相公十韻

五七七

開門閒坐日、遠水獨行時。
 門を開きて閒に坐する日、水を遠りて獨り行く時。
 懶慢交游許、衰羸相府知。
 懶慢交游許し、衰羸相府知る。
 官寮幸無事、可惜不分司。
 官寮幸に事無し、惜む可し分司たらざるを。

【字解】【一】 忽忽 失意の貌。司馬遷の文に居則忽忽若有所亡とある。【二】 星星 點點の如し。謝靈運の詩に星星白髮垂とある。【三】 華亭 地名。江蘇省松江縣の西の平原村。晉の陸機の故宅あり、機の將に死せんとする時嘆じて曰く、華亭の鶴鴨また聞くべけんやと。【四】 天然 峯の名。浙江省杭州靈隱山飛來峯の南にある。【五】 王尹 河南尹王氏。【六】 田家 田は姓。【七】 交游 交際する友人。【八】 相府 牛相公。

【題義】 東都分司の職に任せられんことを求めて宰相牛僧孺に寄せた十韻二十句の詩である。

【詩意】 心は忽忽として夢の如く鬢の毛は白くなつた。貧しくはあれども酒は常に絶やさず、老いてもまだ詩を廢さない。身は儉薄に慣れ性は益、疎頑になり、粗飯なれども飽きるほどたべ、暖かな夜著にくるまつて朝寝を貪り、三年間萬里を距つる杭州に刺史として、歸ることも出來ず交るべき友もなかつた。幸に太子左庶子に任せられて華亭の鶴と天然峯の石とを攜へて洛陽に歸れば、王尹は馬を買つてくれ、田家では池を賣つてくれた。因つて門を開いて閑坐したり、池のまはりを散歩したりして獨り楽しんでゐる。吾の懶慢は友の許す所で、老衰してゐることは相公も御存じの通りである。幸に吾が官職も無事であるから、東都分司にでもして戴けば結構だと思ふ。

酬楊八

楊八に酬ゆ

君以曠懷宜靜境。君は曠懷を以て靜境に宜し、
 我因蹇步稱閑官。我は蹇歩に因りて閑官に稱ふ。
 閉門足病非高士。門を閉ぢ病足るは高士に非ず、
 勞作雲心鶴眼看。雲心鶴の眼看を作すを勞せんや。

【題義】 楊八から詩を寄せられたのに酬いたのである。

【詩意】 君は曠懷の士であるから靜境に居るに適してゐるのであるが、僕は無能だから閑職に居るのが當然なのである。僕のやうな病がちで門を閉ぢて出ないやうな男は決して高士ではない。雲中の鶴のやうな高潔な人物と誤り認められては恐縮である。

【字解】【一】 曠懷 心のひろきこと。
 【二】 蹇歩 歩になやむこと、才の鈍きに喩ふ。閑官は閑職。
 【三】 雲心鶴 雲中の鶴。

履道新居二十韻

履道新居二十韻

履道坊西角、官河曲北頭。
 履道坊の西角、官河曲の北頭。
 林園四隣好、風景一家秋。
 林園四隣好し、風景一家秋なり。
 門閉深沈樹、池通淺沮溝。
 門は深沈の樹を閉ぢ、池は淺沮の溝を通ず。

拔青松直上。鋪碧水平流。
 籬菊黃金合。臚筠綠玉稠。
 疑連紫陽洞。似到白蘋洲。
 僧至多同宿。賓來輒少留。
 豈無詩引興。兼有酒銷憂。
 移榻臨平岸。攜茶上小舟。
 果穿聞鳥啄。萍破見魚遊。
 地與塵相遠。人將境共幽。
 汎潭菱點鏡。沈浦月生鈎。
 厨曉煙孤起。庭寒雨半收。
 老飢初暖粥。瘦冷早披裘。
 洛下招新隱。秦中忘舊遊。
 辭章留鳳閣。班籍寄龍樓。
 病愜官曹靜。閒慙俸祿優。

青を抜きて松直に上り、碧を鋪きて水平かに流る。
 籬菊黃金合ひ、臚筠綠玉稠し。
 紫陽の洞に連るかと疑ひ、白蘋の洲に到るに似たり。
 僧至りては多く同じく宿し、賓來りては輒ち少く留まる。
 豈詩の興を引く無からんや、兼ねて酒の憂を銷する有り。
 榻を移して平岸に臨み、茶を攜へて小舟に上る。
 果穿たれて鳥の啄むを聞き、萍破れて魚の遊ぶを見る。
 地は塵と相遠く、人は境と共に幽なり。
 潭に汎びて菱鏡に點じ、浦に沈みて月鈎を生ず。
 厨曉にして煙孤り起り、庭寒くして雨半收まる。
 老いては飢えて初めて粥を暖め、瘦せては冷にして早く
 裘を披る。
 洛下新隱を招き、秦中舊遊を忘る。
 辭章鳳閣に留め、班籍龍樓に寄す。
 病みて官曹の靜なるに愜ひ、閒にして俸祿の優なるを慙づ。

琴書中有得。衣食外何求。

琴書中に得る有り、衣食外に何を求めん。

濟世才無取。謀身智不周。

世を濟ふに才取る無く、身を謀るに智周からず。

應須共心語。萬事一時休。

應に須らく心と共に語り、萬事一時に休すべし。

【字解】【一】坊。街。【二】官河曲。水道を通じて公家に属するもの。舊唐書に王播妻從三閨門外古七里港開河、向道屈曲取三
 賢智寺橋東、通官河一とある。【三】淺沮。淺きこと。【四】臚筠。窓外の竹。【五】紫陽洞。仙人の居る處。【六】白蘋洲。吳
 興に在り梁の柳柳の愛せし處。【七】萍。うきぐさ。【八】鈎。つりばり。三日月の形を形容す。【九】洛下。洛陽。【一〇】秦中。
 長安をいふ。【一一】鳳閣。中書省をいふ。【一二】班籍。官吏の名籍。龍樓は太子の宮。【一三】官曹。官列といふが如し。【一四】
 共心語。吾が心に談合する。後の別三春燈を參照せよ。

【題義】履道は洛陽の里の名、ここに新居を構へたことを述べた二十韻四十句から成る詩である。
 【詩意】洛陽の履道里の西の角、官河の曲角の西に新居を構へた。四鄰の林園も美しく秋の好風景を
 盡く一家に集めたやうな好い處である。門は常に閉ぢられて邸内には樹木が茂り合ひ、池は淺き溝の
 流れを通じ、青松は眞直に聳え立ち碧水は平かに流れ、籬邊の菊は黄金の花を開き窓外の竹は綠玉
 の色を束ね、仙人の住居かとも疑はれるほどである。僧が來れば多くは宿するが俗客は永くは留まら
 てゐない。詩の興を引くもあれば、酒の憂を掃ふもある。榻を移して池岸に臨み茶を攜へて小舟に乗
 れば、果物を啄む鳥の聲を聞き萍の間に魚の遊ぶを見る。實に俗氣を脱した幽邃境である。菱は鏡の
 如き水面に泛び、三日月は鈎の如き影を涵し、曉には炊煙の上り雨の收まるを見る。飢うれば粥を暖

めて食ひ寒ければ裘を重ねて著、長安の舊遊などは忘れてしまつて、新しく退老した人人を洛陽に招いて共に楽しんでゐる。昔は制詔を草する官となつて中書省にゐたものであるが今は太子左庶子として洛陽に居る。官の閑なるは病身に適してゐるが俸祿の豊かなのは恐懼する所である。かくて心中に琴書の樂があるから衣食などの心外の樂は敢て求めない。吾は世を濟ふの才もなく一身の計にも拙であるから、吾心と談合して一切萬事を忘却することにしよう。

九日思杭州舊遊寄周判官及諸客

九日杭州の舊遊を思ひ周判官及び諸客に寄す

忽憶郡南山頂上、忽ち憶ふ郡南山頂の上、

昔時同醉是今辰、昔時同じく酔ひしは是れ今辰。

笙歌委曲聲延耳、笙歌委曲聲耳を延き、

金翠動搖光照身、金翠動搖光身を照す。

風景不隨宮相去、風景は宮相に隨ひて去らず、

歡娛應逐使君新、歡娛は應に使君を逐ひて新なるべし。

江山賓客皆如舊、江山賓客皆舊の如し、

【字解】【一】郡南、杭州の南。

【二】今辰、今日の佳節。

【三】委曲、繁細なこと。

【四】金翠、曹植の洛神賦に「金翠之首飾、耀三明珠、以耀之」とある。

【五】宮相、太子左庶子の稱。樂天は

時に太子左庶子の官に在り、故にか

くいふ。

【六】使君、刺史の稱。

唯是當筵換主人、唯是れ當筵主人を換ふ。

【題義】九月九日重陽の節句に、杭州刺史たりし時の舊遊を思ひ、その屬官たりし周判官及び諸客に寄せた詩である。

【詩意】憶へば先年の今月今日は、南の山の頂に登つて共に菊花の酒を傾けた。その時には繁細な笙歌の聲が耳をひきつけ、美妓の粧があたりを照した。其後吾は太子左庶子に任せられて杭州を去つても風景は吾に隨つて去らず、又新任の刺史が來て從來のやうに歡を盡すことが出來たであらう。見る所の景色も眼前の賓客も昔に變らず、ただ換はつたのは當筵の主人公だけであらう。

秋晚

秋晚

煙景澹濛濛、池邊微有風。

煙景澹として濛濛、池邊微しく風有り。

覺寒蜚近壁、知暝鶴歸籠。

寒を覺えて蜚壁に近づき、暝を知りて鶴籠に歸る。

長貌隨年改、衰情與物同。

長貌年に隨ひて改まり、衰情物と同じ。

夜來霜厚薄、梨葉半低紅。

夜來霜厚薄、梨葉半低れて紅なり。

【字解】【一】澹、ぼんやりしてゐる。【二】長貌、老衰する容貌。【三】厚薄、薄は帶説、厚き意。

【題義】秋の夕の情景を敘した詩である。

律詩 九日思杭州舊遊寄周判官及諸客 秋晚

【詩意】夕方になつてあたりも小暗くなり、池の邊にそよかせが吹き出した。寒さを感じて、葦が壁に近づき来り、日の暮るるを知つて鶴も籠に歸つて来た。わが容貌は年と共に老けまさり、眼前の秋物と共に心情もくづをれてしまつた。見れば昨夜は霜が多く降つたと見えて梨の葉が半ば色づいて低れてゐる。

分司

分司

散秩留司殊有味。散秩の留司殊に味有り、

最宜病拙不才身。最も宜し病拙不才の身。

行香拜表爲公事。香を行ひ表を拜して公事と爲し、

碧洛青嵩當主人。碧洛青嵩主人に當つ。

已出閒遊多到夜。已に出でて閒遊し多くは夜に到り、

却歸慵臥又經旬。却き歸りて慵臥し又旬を經。

錢塘五馬留三匹。錢塘の五馬三匹を留む、

還擬騎遊攪擾春。還擬す騎遊して春を攪擾せんと。

【字解】【一】散秩。散官にして

一定の職守なきもの。留司は留守に

同じ、洛陽を守る長官。

【二】行香。寺まわりする。拜表は尊奏をたてまつる。

【三】碧洛。あなき洛水。青嵩は嶺の嵩山。

【四】錢塘。杭州。五馬は刺史の馬。

【題義】東都分司の職に任せられたこと。

【詩意】東都分司といふ散官に任せられたのは病拙不才の吾に取つては誠に誂へ向である。毎日寺まわりをしたり上書を認めたりすることを公の仕事となし、洛水に遊び嵩山に登つて主人氣取である。遊びに出かけると多くは夜になり、歸るとがっかりして十日も寝てゐる。杭州刺史時代の馬がまだ三匹残つてゐるから、之に乗つて自由自在に春色を遊賞しようと思ふ。

河南王尹初到以詩代書先問之

河南の王尹初めて到る。詩を以て書に代へ先づ之を問ふ

別來王閣老。三歲似須臾。別來王閣老、三歲須臾に似たり。

鬢上斑多少。杯前興有無。鬢上斑多少、杯前興有りや無や。

官從分緊慢。情莫問榮枯。官は緊慢を分つに従せ、情は榮枯を問ふ莫し。

許入朱門否。籃輿一病夫。朱門に入るを許すや否や、籃輿の一病夫。

【字解】【一】閣老。中書舍人の年久しき者をいふ。【二】朱門。朱塗の門。王尹の門をいふ。【三】籃輿。竹の駕籠。一病夫は樂天自ら謂ふ。

【題義】王氏が河南尹に任せられて初めて洛陽に來たので、此詩を以て手紙に代へ、先づ往訪を許す

や否やを問うたのである。

【詩意】君に別れてから三年になるがホンの夢の間のやうにしか思はれない。君は白毛がどのくらゐ殖えたか。今でも酒興が湧くかどうか。君は職務勉勵僕は怠慢で、これは性分だから仕方がないとして、榮枯盛衰に因つて友情を異にするやうなことはしないやうに致さう。その中監輿に乗つて君を訪ひたいと思ふが許してくれるであらうか。

池西亭

池西の亭

朱欄映晚樹。金魄落秋池。
還似錢塘夜。西樓月出時。

【字解】(一)朱欄 朱塗の欄干。(二)金魄 月をいふ。(三)錢塘 杭州。

【題義】池西の亭の夜景を述べた詩である。

【詩意】朱塗の欄干が樹木にうつりあひ、月影が池の水にうつてゐる。丁度杭州の西樓に月の出るとき景色によく似てゐる。

臨池閒臥

池に臨んで閒臥す

小竹圍庭匝。平池與砌連。
閒多臨水坐。老愛向陽眠。
營役拋身外。幽奇送枕前。
誰家臥牀脚。解繫釣魚船。

【字解】(一)營役 勞役。(二)誰家 誰なり。

【題義】池に臨んで閒臥する状を述べた詩である。

【詩意】竹は池を圍んで立ち池は砌に連つて平かである。吾は閒暇に任せて水に臨んで坐し、老いては日向ぼっこばかりしてゐる。勞役は一切抛擲し去り横臥して幽奇を賞してゐる。誰だか知らないが吾が臥牀の脚を釣船を繫いだり解いたりする柱にしてゐる。

吾廬

吾が廬

吾廬不獨貯妻兒。吾が廬は獨り妻兒を貯ふるのみならず、
自覺年侵身力衰。自ら覺ゆ年侵して身力の衰へたるを。
眼下營求容足地。眼下足を容るる地を營み求め、
心中準擬挂冠時。心中冠を挂くる時を準擬す。

【字解】(一)挂冠 官を辭して退くこと。

(二)新昌 長安の里の名。樂天は長慶元年二月に新昌里に卜居した。卷十一竹窓を參照せよ。

新昌小院松當戶。新昌の小院松戸に當り、
 履道幽居竹遠池。履道の幽居竹池を遠る。
 莫道兩都空有宅。道ふ莫れ兩都空しく宅有り、
 林泉風月是家資。林泉風月は家資。

- 【一】履道 洛陽の里の名。樂天は長慶四年秋履道里に新居を構へた。
- 【二】兩都 長安と洛陽。
- 【三】家資 家の財産。

【題義】自分の家慮に關して述べた詩である。

【詩意】近來年を取つて段段身力の衰退を感じる。かうなつては唯妻子を置く場所といふばかりでなく、自分の身を容るる場所を營み求める必要に迫られ、辭職して隱退した時の用意をしようと考へた。長安の新昌里の家には戶外に松があつたが、洛陽の履道里の家には池邊に竹がある。洛陽・長安二都に唯住宅があつたと謂ふばかりではない。林泉風月といふ金で買はれぬ財産もあつた。

題新居寄宣州崔相公 即居南鄰、
 即崔家池。

新居に題し宣州の崔相公に寄す 所居の南鄰は即ち崔家の池なり。

門庭有水巷無塵。門庭に水有りて巷に塵無し、
 好稱閑官作主人。好く閑官に主人と作るに稱へり。

冷似雀羅雖少客。冷は雀羅に似て客少しと雖も、
 寬於蝸舍足容身。蝸舍より寬くして身を容るるに足れり。
 疏通竹徑將迎月。竹徑を疏通して將に月を迎へんとす、
 掃掠莎臺欲待春。莎臺を掃掠して春を待たんと欲す。
 濟世料君歸未得。世を濟ひて料るに君歸り未だ得ず、
 南園北曲謾爲隣。南園北曲 謾に隣を爲す。

- 【字解】【一】冷 さびれてゐること。雀羅は人の助ふ者なく門庭に雀が多くて朝を張つて捕へるほどであるとの故事。
- 【二】蝸舍 蝸牛の家。
- 【三】莎臺 芝の生えてゐる高臺。

【題義】洛陽履道里の新居に題し、宣州(今の安徽省の宣城縣)の崔相公(崔羣であらう。崔羣は嘗て宰相であつたから相公といふ)に寄せた詩である。自注に樂天の新居の南鄰が崔家の池になつてゐるとある。

【詩意】吾が門庭には水ありて塵なく、散官の主人の住居には極めて適當してゐる。さびれ果ててゐる門庭に雀羅を張りたくらゐただれども、蝸牛の家よりは廣いから身を容るるには十分である。竹の徑を開いて月を迎へる爲にし、芝の生えた高臺を掃除して春の到るのを待つてゐる。君は官吏として宣州にゐるから當分歸隱することは出来まいが、僕は僕の家の南園と君の留守宅の北曲と相鄰して此度新居を構へた。

憶杭州梅花因敘舊遊寄蕭協律

杭州の梅花を憶ひ因つて舊遊を敘し蕭協律に寄す

三年閒悶在餘杭。三年閒悶餘杭に在り、
 曾爲梅花醉幾場。曾て梅花の爲に酔ふこと幾場ぞ。
 伍相廟邊繁似雪。伍相廟邊繁くして雪に似たり、
 孤山園裏麗如粧。孤山園裏麗にして粧へるが如し。
 蹋隨遊騎心長惜。蹋みて遊騎に隨ひて心長く惜み、
 折贈佳人手亦香。折りて佳人に贈りて手亦香し。
 賞自初開直至落。賞することは初開より直に落つるに至り、
 歡因小飲便成狂。歡ぶことは小飲に因りて便ち狂を成す。
 薛劉相次埋新壘。薛劉相次ぎて新壘に埋まり、
 沈謝雙飛出故鄉。沈謝雙び飛びて故郷を出づ。
 歌伴酒徒零散盡。歌伴酒徒零散し盡く、

【字解】「餘杭」杭州。

【伍相廟】伍子胥の廟。

【孤山】杭州の西湖の畔の山。梅花を以て名あり。

【新壘】新しい墓塚。

唯殘頭白老蕭郎。唯殘る頭白の老蕭郎。

【蕭郎】蕭郎蕭氏。

【題義】杭州の梅花を憶出し、因つて舊遊を述べて蕭協律に寄せた詩である。

【詩意】僕は三年間心に悶悶の情を抱き杭州刺史の職を奉じてゐた。其間に幾度となく梅花を賞しつ酒を飲んだ。伍子胥の廟のあたりは花が雪よりも繁く、孤山のあたりの麗しさは美人の粧のやうであつた。遊騎に隨つて落花を踏むを惜み、折つて美人に贈れば餘香が手を去らず、咲き初めから落花するまで賞し、花に對して飲めば必ず狂態を演じたものであつた。今や薛・劉二氏は相次いで死し、沈・謝二氏は故郷を去り、歌伴酒徒が或は死し或は去つて、ただ君が今尙残つてゐるだけである。

病中辱張常侍題集賢院詩因以繼和

病中張常侍が集賢院に題する詩を辱うす。因つて以て繼ぎ和す

天祿閣門開甘泉侍從回。天祿閣門開け、甘泉に侍從して回る。
 圖書皆帝籍寮友盡仙才。圖書は皆帝籍、寮友は盡く仙才。
 騎省通中掖龍樓隔上臺。騎省は中掖に通じ、龍樓は上臺を隔つ。
 猶憐病宮相詩寄洛陽來。猶病宮相を憐み、詩を洛陽に寄せ來る。

律詩 憶杭州梅花因敘舊遊寄蕭協律 病中辱張常侍題集賢院詩因以繼和

【字解】【一】集賢院 經籍を刊輯し佚書を搜求することを掌る役所。【二】天祿閣 漢の殿閣の名。劉向・揚雄等の校書の所なり。因つて唐の集賢院に喩ふ。【三】甘泉 漢の宮殿の名。【四】騎省 散騎常侍をいふ。中掖は宮中。【五】龍樓 太子の宮をいふ。樂天は當時太子左庶子たり。【六】宮相 太子屬僚の稱。樂天自ら謂ふ。

【題義】樂天の病中、張常侍（張仲方か）が集賢院に題する詩を寄せたので、樂天がそれに繼ぎ和したのである。

【詩意】君は天祿閣上に登り、甘泉宮に侍従する身で、帝室の書籍を掌り同僚は皆一時の仙才である。君は散騎常侍として宮中に奉仕すれども、僕は太子左庶子として太子に仕ふるのみで宮闕に入ることは出来ない。然るに君は尊きを屈して病中に在る我を憐み、洛陽まで詩を寄せられたことは誠に辱く存する。

早春晚歸

早春晚歸

晚歸騎馬過天津。 晚に歸り馬に騎りて天津を過ぐ、
沙白橋紅返照新。 沙白く橋紅にして返照新なり。
草色連延多隙地。 草色連延として隙地多く、
鼓聲閒緩少忙人。 鼓聲閒緩にして忙人少なり。

【字解】【一】天津 洛陽の橋の名。
【二】返照 夕日のでりかへし。
【三】隙地 あきち。

還如南國饒溝水。 還南國の如く溝水饒く、

不似西京足路塵。 似す西京の路塵足るに。

金谷風光依舊在。 金谷の風光舊に依りて在り、

無人管領石家春。 人の石家の春を管領する無し。

【一】西京 長安。
【二】金谷 洛陽の西に在り。晉の石崇の金谷園の在りし處。
【三】石家 石崇の家。

【題義】春の初、夕に洛陽に歸る時の光景を敍した詩である。

【詩意】夕方馬に乗つて天津橋を過ぐれば磧が白く橋が紅い所に夕日がさして美しい。附近には隙地が多くて草原がつづき、初夜を告げる鼓の音もゆるやかで人は皆閑なやうである。丁度南方の地方のやうに溝が多く、長安のやうに塵が多くない。昔石崇の別荘のあつた金谷の風光は昔のままに存し、箇人の之を占領する者がなく、一般公衆に解放されてゐる。

贈楊使君

楊使君に贈る

曾嗟放逐同巴峽。 曾て嗟く放逐せられて巴峽を同くせしを、

且喜歸還會洛陽。 且喜ぶ歸還して洛陽に會するを。

時命到來須作用。 時命到來須らく作用すべし、

【字解】【一】放逐 貶謫なり。
巴峽は湖北省巴東縣の西二十里に在る。
【二】時命 時運。作用は利用といふ。

功名未立莫思量。功名未だ立たざるは思量する莫れ。

銀銜叱撥欺風雪。銀銜の叱撥は風雪を欺き、

金屑琵琶費酒漿。金屑の琵琶は酒漿を費す。

更待城東桃李發。更に城東桃李の發くを待ち、

共君沈醉兩三場。君と共に沈醉せん兩三場。

【題義】楊使君(前に見ゆ。刺君は刺史の稱)に贈つた詩である。

【詩意】曾て貶謫せられて共に巴峽の刺史となつたことを嗟いたが、今は歸つて洛陽で相遇ふことを得て喜んでゐる。時運が向いて來たからには大に其惠を利用してすべきである。功名の立たないことは考慮する必要はない。銀の銜をはめた駿馬の風雪をも凌ぎ、紫檀の琵琶の酒漿を促すものがある。因つては城東に桃李の花の咲く時節になつたら、君と共に兩三回沈醉したいと思ふ。

が如し。
【三】銀銜 銀のくつわ。叱撥は馬の名。
【四】金屑琵琶 孟浩然の涼州詞に、潭成紫檀金屑文、作得琵琶一聲入、響とある。

贈皇甫庶子

皇甫庶子に贈る

何因散地共徘徊。何に因りてか散地に共に徘徊する、

人道君才我不才。人は道ふ君は才我は不才と。

【字解】【一】散地 閑散な地位。

騎少馬蹄生易蹶。騎ること少にして馬蹄生にして蹶き易く、

用稀印鑠澀難開。用ふること稀にして印鑠澀りて開き難し。

妻知年老添衣絮。妻は年の老いたるを知りて衣絮を添へ、

婢報天寒撥酒醅。婢は天の寒きを報じて酒醅を撥す。

更愧小胥諮拜表。更に愧づ小胥の拜表を諮り、

單衫衝雪夜深來。單衫雪を衝きて夜深けて來るに。

【題義】皇甫庶子に贈つた詩である。皇甫庶子は皇甫鏞ではあるまいか。鏞は鏞の弟で太子右庶子となつた。

【詩意】なせ君と僕とは今日のやうな閑職に居らねばならないのであらう。僕は不才だから仕方がないが君の如き才子が今日の如き有様であるのは惜むべきの至である。乗ることが稀なので熟練を缺く爲に馬が蹶き、用ひることが稀なので印箱の錠前が錆びついて開かない。妻は年の老いたることを知つて絮を重ね、婢は天の寒きを報じて濁酒の瓶を開いた。拜表の相談の爲に、たつた一人雪を衝いて深夜に小吏をお遣しになつて誠に恐縮に堪へない。

【一】生 熟練を缺くこと。
【二】印鑠 印を入れる箱の錠前。
【三】衣絮 絮は綿なり。
【四】酒醅 濁酒。
【五】小胥 小吏。拜表は章奏をたてまつること。
【六】單衫 衫は官吏の上衣。

池上竹下作

池上竹下の作

律詩 贈皇甫庶子 池上竹下作

穿籬遠舍碧透迤。籬を穿ち舍を遠りて碧透迤、

十畝閒居半是池。十畝の閒居半是れ池。

食飽窓間新睡後。食は飽く窓間新に睡る後、

脚輕林下獨行時。脚は輕し林下獨り行く時。

水能性淡爲吾友。水は能く性淡くして吾が友たり、

竹解心虛卽我師。竹は解く心虚にして卽ち我が師。

何必悠悠人世上。何ぞ必ずしも悠悠たる人世の上、

勞心費目覓親知。心を勞し目を費して親知を覓めん。

【題義】池上竹下の閒生活を敍した詩である。

【詩意】籬を穿ち家を遠りて竹が縁に連り、十畝の宅地は半は池である。食後には竹窓の間に午睡を貪り、覺めれば脚も輕々と林下を逍遙する。池の水は淡くして吾が友たるに適し、竹は心が空虚で吾が師となすに足る。だから悠悠たる世上に心目を費して親知を求めめる必要はない。

【字解】「透迤」 透り續く貌。

【二】 悠悠 檢東なき意。

【三】 親知 親友知己。

閒出覓春戲贈諸郎官

閒出して春戲を覓め諸郎官に贈る

年來數出覓風光。年來數出でて風光を覓む、

亦不全閒亦不忙。亦全く閒ならず亦忙ならず。

放鞚體安騎穩馬。鞚を放ち體安くして穩馬に騎り、

隔袍身暖照晴陽。袍を隔て身暖にして晴陽に照さる。

迎春日日添詩思。春を迎へて日日詩思を添へ、

送老時時放酒狂。老を送りて時時酒狂を放にす。

除却髭鬚白一色。髭鬚の白一色なるを除却すれば、

其餘未伏少年郎。其餘は未だ少年の郎に伏せず。

【題義】閒暇に任せて外出し、遊戯を覓めて郎官(下級官吏)等に贈つた詩である。

【詩意】春になつてから、まるで暇といふでもなく亦忙しいといふほどでもないので、屢々出遊して風光を探り、手綱を放ちて安穩に馬上に跨り、袍を隔て暖に春日に照される。春を迎へて日毎に詩思が増し、老を送つて時時狂態を演ずる。鬚の白い點を除けば、其他には諸君のやうな若者にもまけはしない。

【字解】「出」 たづな。

【二】 除却 のぞく。

別春爐

春爐に別る

暖閣春初入。温爐興稍闌。

暖閣春初めて入り、温爐興稍く闌なり。

晚風猶冷在。夜火且留看。

晚風猶冷に在り、夜火且く留めて看る。

獨宿相依久。多情欲別難。

獨り宿して相依ること久し、情多くして別れんと欲する。難し。

誰能共天語。長遣四時寒。

誰か能く天と共に語り、長く四時をして寒からしめん。

【字解】(一) 暖閣 爐を設け暖を取る小閣。(二) 共天語 天と談合する。前の履道新居二十韻を参照せよ。

【題義】 春の爐に別れる詩である。

【詩意】 暖閣にも春がおとづれて来たので爐も稍興が醒めて来た。併し夕方にはまだ風が寒いので、夜には爐に火を入れる。これまで狎れ親んで来たので別れるとなると名残が惜まれる。一つ天と談合して四季を通じて寒いやうにしたいものだ。

夢行簡

行簡を夢る

天氣妍和水色鮮。

天氣妍和水色鮮なり。

閒吟獨歩小橋邊。

閒吟獨歩す小橋の邊。

【字解】(一) 池塘云云 南史謝惠連傳に、年十歲、能屬文。族兄靈運加賞之云、對惠連二觀有佳語、

の小事。

池塘草綠無佳句。

池塘草綠なるも佳句無し。

虛臥春窓夢阿憐。

虚しく春窓に臥して阿憐を夢る。

嘗於永嘉西堂思詩、竟日不就、忽夢見惠連、即得池塘生春草、大以爲工とある。(二) 阿憐 自行簡の小事。

【題義】 弟自行簡を夢に見たといふ詩である。

【詩意】 天氣が暖で水の色も鮮であるので、池の小橋のあたりを吟行した。池塘の春草が綠になつたが少しも佳い詩が出来ず、虚しく春窓に臥して弟を夢に見たばかりだ。

【餘論】 「習用の語、點化に妙なり」と唐宋詩醇に評してある。

題新居呈王尹兼簡府中三掾

新居に題し王尹に呈し兼ねて府中の三掾に簡す

弊宅須重葺。貧家乏羨財。

弊宅須らく重ねて葺くべし、貧家羨財に乏し。

橋憑川守造。樹倩府僚栽。

橋は川守に憑りて造り、樹は府僚を倩ひて栽るしむ。

朱板新猶濕。紅英暖漸開。

朱板新にして猶濕ひ、紅英暖にして漸く開く。

仍期更搗酒。倚檻看花來。

仍期す更に酒を搗へ、檻に倚り花を看來らんことを。

【字解】(一) 王尹 前に見ゆる河南尹王氏。(二) 三掾 三人の屬官。(三) 羨財 餘財。(四) 朱板 朱塗の板。(五) 紅英

律詩 別春爐 夢行簡 題新居呈王尹兼簡府中三掾

紅花。【二】櫻。欄干。

【題義】新しい住居に題して河南尹王氏に呈し、兼ねて河南府の三人の屬官に寄せた詩である。
【詩意】弊れた家を修理せねばならぬが貧乏で餘財がなくて出来ないで、川の係の役人に頼んで橋を架けてもらひ、小使を煩して樹を栽してもらつた。朱塗の板はまだ乾かないが、紅の花は段段開いて来た。その中酒を携へ欄干に倚つて花觀をしようと思つて居る。

雲和

雲和

非琴非瑟亦非箏、琴に非ず瑟に非ず亦箏に非ず、

撥柱推絃調未成。柱を撥し絃を推して調未だ成らず。

欲散白頭千萬恨。白頭千萬の恨を散せんと欲せば、

只消紅袖兩三聲。只消ふ紅袖の兩三聲。

【題義】雲和は樂器の名である。周禮に大司樂奏三雲和之琴瑟とあり、鄭玄の注に雲和地名、地産三良材、用爲瑟、其聲清亮とあるが、樂天の詩句に由れば琴瑟とは別なものたることがわかる。
【詩意】雲和は琴ともちがひ瑟ともちがひ箏ともちがふ。柱をはらひ絃を推しまだ曲調を成さない。美妓が只二聲三聲かき鳴らせば、吾が千萬の幽恨を盡らすに足る。

【字解】【二】柱。こち。絃は樂器の絲。

【三】消。須の意。モチフと調す。

紅袖は美妓なり。

春老

春老ゆ

欲隨年少強遊春。年少に隨ひて強ひて春に遊ばんと欲すれば、

自覺風光不屬身。自ら覺ゆ風光の身に屬せざるを。

歌舞屏風花障上。屏風花障の上に歌舞するも、

幾時曾畫白頭人。幾時か曾て白頭の人を畫ける。

【題義】春に遇うて老人の苦衷を述べた詩である。

【詩意】若い者の仲間入りをして強ひて春遊をして見るが、一向に春色が身につかない。それも其等、屏風や衝立の歌舞の繪を見ても、曾て白髪の人などは描いてない。

【字解】【二】花障。ついたて。

春雪過皇甫家

春雪に皇甫の家を過る

晚來籃輿雪中回。晚來籃輿雪中に回る、

喜遇君家門正開。君が家門の正に開くに遇ふを喜ぶ。

唯要主人青眼待。唯要す主人の青眼もて待ち、

琴詩談笑自將來。琴詩談笑自ら將ち來らんことを。

【字解】【二】青眼。よろこばしき目つき。晉の阮瞻禮教に拘らず、能く青白眼をなす。禮俗の士を見れば白眼を以て之に對す。晉康酒を賣し琴を挾んで至れば、鑿大に悦び乃ち青眼を見る。

【題義】春雪のふる日に皇甫氏の宅を訪うた詩である。

【詩意】夕方駕籠に乗り雪を衝いて君の家を訪へば、門が正に開いて人待ち顔なのが嬉しい、此上には主人公が青眼を以て僕を待ち、自ら琴酒談笑を提供して僕を歡待してくれればよい。

崔侍御以孩子三日示其所生詩見示因以二絶和之

崔侍御が孩子の三日に其所生に示す詩を以て示さる。因つて二絶を以て之に和す

洞房門上挂桑弧。洞房の門上桑弧を掛け、

香水盆中浴鳳雛。香水の盆中鳳雛を浴す。

還似初生三日魄。還初生三日の魄に似たり、

嫦娥滿月即成珠。嫦娥滿月即ち珠と成る。

【字解】(一) 所生 父母をいふ。

(二) 洞房 新婚の室をいふ。桑弧は桑で作つた弓。

禮記に國君世子生、……射人以三桑弧。

蓬矢六射、射天地四方とある。(三) 嫦娥 生れた子をほめていふ。(四) 魄 魄、生れた子をほめていふ。(四)

【題義】崔侍御は崔韶であらう。此詩は崔韶が子の生れた三日目に其生母に示した詩を樂天に示したので、樂天が其れに和した二絶句である。

【詩意】洞房の門には桑弧を掛けて男子出生の祝意を表し、香水を浴へた盥の中で産湯を使はせる。丁度嫦娥が月満ちて三日月を生んだやうである。

(一)

(二)

愛惜肯將同寶玉。愛惜すること肯て將に寶玉に同じからんとす、

喜歡應勝得王侯。喜歡すること應に王侯を得たるに勝る

弄璋詩句多才思。弄璋の詩句才思多し、

愁殺無兒老鄧攸。愁殺す無兒の老鄧攸。

【字解】(一) 弄璋 男子を生むこと。詩經小雅斯干篇に乃生男子、

戲弄之璋とある。(二) 愁殺 殺は助辭。愁へしめること。鄧攸は字

は伯道、晉の襄陵の人、石勒の兵起

るや家を擧へて走る。其弟早く亡せるを以て特に其經を全うせんとし、子を樹に懸けて去る。死するまで竟に嗣子なし。時人之を哀んで曰く、天道無知、使鄧伯道無兒と。ここは樂天自ら喩ふ。

【詩意】愛することは寶玉の如く、喜ぶことは王侯になつたやうである。おまけに男子を得た喜を示す結構な詩まで作つて兒のない僕を愁へしめる。

與皇甫庶子同遊城東

閑遊何必多徒侶。閑遊何ぞ必ずしも徒侶多からん、

相勸時時舉一杯。相勸めて時時一杯を舉ぐ。

博望苑中無職役。博望苑中職役無く、

【字解】(一) 徒侶 なかま。みちづれ。

(二) 博望苑 長安の北に在り。漢の武帝衛太子の爲に此苑を立て賓客

律詩 崔侍御以孩子三日示其所生詩見示因以二絶和之 與皇甫庶子同遊城東

建春門外足池臺。建春門外池臺足。

【一】建春門 門の名。

綠油剪葉蒲新長。綠油葉を剪りて蒲新に長じ、

【二】朱衣 緋衣。宮相は太子屬僚の稱。皇甫は太子右庶子、白樂天は太子左庶子である。

紅蠟粘枝杏欲開。紅蠟枝に粘して杏開かんと欲す。

白馬朱衣兩宮相。白馬朱衣兩宮相。

可憐天氣出城來。可憐の天氣に城を出で來る。

【三】可憐 愛すべき意。

【題義】皇甫庶子（前に見ゆ）と俱に洛陽城頭に遊んだことを述べた詩である。

【詩意】閒遊には多くの道連はいらない。故に我等二人時時相誘うて酒を酌むのである。太子の宮中に仕へてゐても是れといふ職事はなく、建春門外には池臺が多くあるので春色を探るに宜しい。況んや今は蒲には綠油のやうな新しい葉を生じ、杏の枝には紅の蠟のやうな蕾が破れんとしてゐる。因つて我等は白馬に跨り緋衣を纏うて好天氣に乗じて城外に遊んだのである。

洛城東花下作

洛城の東の花下の作

記得舊詩章。花多數洛陽。舊詩章を記得するに、花は多く洛陽を數ふ。

舊詩云、洛陽城東面、今來花似雪。又云、更得城東桃李發。又云、花滿洛陽城。又云、

及逢枝似雪。已是鬢成霜。枝の雪に似たるに逢ふに及び、已に是れ鬢霜と成る。

向後光陰促。從前事意忙。向後光陰促ならん、從前事意忙はし。

無因重年少。何計駐時芳。重ねて年少なるに因無し、何の計か時芳を駐めん。

欲送愁離面。須傾酒入腸。愁を送りて面を離れしめんと欲せば、須らく酒を傾けて

白頭無藉在。醉倒亦何妨。白頭藉在無し、醉倒するも亦何ぞ妨げん。腸に入るべし。

【字解】【一】記得 記憶する。【二】向後 今後。【三】時芳 盛りの花。【四】無三藉在 一任放恣なき意。

【題義】洛陽城東の花の下で作つた詩である。

【詩意】記憶に存する舊作の詩を見ても花といへば先づ洛陽が第一である。今や雪のやうに滿開にはなつたが、我が鬢も霜のやうになつてしまつた。今日までは、事も繁く氣忙しくもあつたが、今後は急、歳月の短きを覺ゆるであらう。さりとて再びもとの若さに返すことは出來ず、盛りの花を駐めて置く方便もない。ただ愁顔を一掃するには酒を飲むに限るのである。老いては萬事だらしがないから酔ひつふれても構ひはしない。

晚春寄微之并崔湖州

晚春微之并崔湖州に寄す

律詩 洛城東花下作 晚春寄微之并崔湖州

洛陽陌上少交親。洛陽陌上交親少なり。

履道城邊欲暮春。履道城邊暮れんと欲する春。

崔在吳興元在越。崔は吳興に在り元は越に在り。

出門騎馬覓何人。門を出で馬に騎りて何人をか覓めん。

【題義】春の末に浙東觀察使元稹（字は微之）と湖州刺史崔玄亮とに寄せた詩である。

【詩意】洛陽の城下には友達が少いので、履道里の新居に唯ひとり晩春を淋しく暮してゐる。崔君は湖州に居り元君は越州に居るので、馬に乗つて門を出ても訪問すべき人がない。

城東開行因題尉遲司業水閣

城東開行因題尉遲司業水閣

城東に開行し因つて尉遲司業が水閣に題す

閑遠洛陽城。無人知姓名。閑に洛陽城を遠るも、人の姓名を知る無し。

病乘籃輿出。老著茜衫行。病みて籃輿に乗りて出で、老いて茜衫を着て行く。

處處花相引。時時酒一傾。處處花相引き、時時酒一たび傾く。

借君溪閣上。醉詠兩三聲。君が溪閣の上を借り、酔ひて詠す兩三聲。

【字解】【一】茜衫。緋衣。官服。

【題義】洛陽城東に開行し、國子司業（官名）尉遲氏の水亭に題した詩である。

【詩意】洛陽城を遠りて閑遊するも、我が名を知る人もないので、老病の身に緋衣を纏ひ駕籠に乗つて城東にでかけた。處處の花に誘引されては、時時酒を傾けた。君の水閣を借りて、酔に任せて此詩を題する。

寄皇甫七

皇甫七に寄す

孟夏愛吾廬。陶潛語不虛。孟夏吾廬を愛す、陶潛語虚しからず。

花樽飄落酒。風案展開書。花樽酒を飄落し、風案書を展開す。

隣女偷新果。家僮漉小魚。隣女新果を偷み、家僮小魚を漉す。

不知皇甫七。池上興何如。知らず皇甫七、池上興何如。

【字解】【一】孟夏。初夏。【二】陶潛。晉の陶淵明。淵明の讀三山海經詩に、孟夏草木長、漉屋樹扶疏、乘鳥欣有託、吾亦愛吾廬、云云とある。【三】花樽。花瓶の口の大きなもの。【四】風案。風の吹く机。【五】漉。すくひ取る。

【題義】皇甫七（七は輩行）に寄せた詩である。

【詩意】陶淵明は孟夏吾が廬を愛すと謂つてゐるが實に其通りである。君も花瓶に酒をこぼしたり、

律詩 城東開行因題尉遲司業水閣 寄皇甫七

風の通る机に書を開いて讀んだりしてゐるのであらう。その間に近所の女子が果物を偷んだり家僮が池の小魚をすくつたりする。池上の興は果して如何であるか。

訪皇甫七

皇甫七を訪ふ

上馬行數里。逢花傾一杯。

馬上上りて數里を行き、花に逢ひて一杯を傾く。

更無停泊處。還是覓君來。

更に停泊する處無し、還是れ君を覓め來る。

【題義】皇甫湜を訪うたことを述べた詩である。

【詩意】馬に乗つて數里を行き、花に逢へば一杯の酒を傾け、どこにも足を停むる處なく、只一圖に君を訪ふ爲にやつて來た。

白樂天詩後集 卷七

律詩 凡一百一首

除蘇州刺史別洛城東花

蘇州刺史に除せられ洛城の東の花に別る

亂雪千花落。新絲兩鬢生。

亂雪千花落ち、新絲兩鬢に生ず。

老除吳郡守。春別洛陽城。

老いて吳郡の守に除せられ、春洛陽城に別る。

江上今重去。城東更一行。

江上今重ねて去り、城東更に一たび行く。

別花何用伴。勸酒有殘鶯。

花に別るるに何を伴うてか、酒を勸むるに殘鶯有り。

【字解】(一) 吳郡守 蘇州刺史。(二) 江上 蘇州は長江のほとりに在り。

【題義】樂天は寶曆元年三月四日蘇州刺史に任せられ、二十九日洛陽を出發した。此詩は出發に先立ち洛陽城東の花に別を告げたのである。

【詩意】花が散つて雪の亂れ飛ぶが如く、我が兩鬢の毛は益々白くなつた。我は老いて蘇州刺史に任せられ、春洛陽を立つて、またもや江上に行くので、一たび城東の花に別れを告げようと思ふ。花に別を告げるのに何を携へて行くかとならば、殘鶯がゐるに頻に酒を勸めるから、酒は必ず携へて行かねば

奉和汴州令狐令公二十二韻 同用淹字

汴州の令狐令公に和し奉る二十二韻 同用淹字

客有東征者。夷門一落帆。客に東に征く者有り、夷門一たび帆を落す。

二年方得到。五日未爲淹。二年にして方に到るを得、五日未だ淹しと爲さず。

相府領。淹。隔。年。居。易。方。到。既。到。陪。三。未。遊。宴。凡。經。五。日。

在浚旌重葺。遊梁館更添。浚に在りては旌重ねて葺し、梁に遊びては館更に添ふ。

心因好善樂。貌爲禮賢謙。心は善を好むに因つて樂み、貌は賢を禮するが爲に謙なり。

俗阜知敦勸。民安見察廉。俗阜にして敦く勸むるを知り、民安くして察廉なるを見る。

仁風扇道路。陰雨膏閭閻。仁風道路に扇し、陰雨閭閻を膏す。

文律操將柄。兵機釣得鈴。文律柄を操り將ち、兵機鈴を釣り得たり。

碧幢油葉葉。紅旆火櫓櫓。碧幢は油葉葉、紅旆は火櫓櫓。

景象春加麗。威容曉助嚴。景象は春麗を加へ、威容は曉嚴を助く。

槍森赤豹尾。轟吒黑龍髯。槍は赤豹の尾を森し、轟は黒龍の髯を吒す。

門靜塵初斂。城昏日半銜。門靜にして塵初めて斂り、城昏くして日半銜む。

選幽開後院。占勝坐前檐。幽を選びて後院を開き、勝を占めて前檐に坐す。

平展絲頭毯。高褰錦額簾。平かに絲頭の毯を展べ、高く錦額の簾を褰ぐ。

雷槌柘枝鼓。雪擺胡騰衫。雷のごとく柘枝の鼓を槌ち、雪のごとく胡騰の衫を擺す。

髮滑歌釵墜。粧光舞汗霑。髮滑にして歌釵墜ち、粧光りて舞汗霑ふ。

回燈花簇簇。過酒玉纖纖。燈を回して花簇簇、酒を過して玉纖纖。

饌盛盤心殫。醕濃盞底粘。饌盛にして盤心殫れ、醕濃かにして盞底に粘す。

陸珍熊掌爛。海味蟹螯鹹。陸珍熊掌爛たり、海味蟹螯鹹し。

福履千夫祝。形儀四座瞻。福履千夫祝し、形儀四座瞻ぐ。

羊公長在峴。傳說莫歸巖。羊公長く峴に在れ、傳說巖に歸る莫れ。

蓋視者之詞意也。

眷愛人人遍。風情事事兼。眷愛人人に遍く、風情は事事兼ぬ。

猶嫌客不醉。同賦夜厭厭。猶嫌客の醉はざるを、同じく賦す夜厭厭たりと。

【字解】(一) 夷門 山の名。河南省開封府の東北隅に在る。(二) 浚 古城の名。開封府の西北に在る。(三) 梁 古の魏の大

律詩 奉和汴州令狐令公二十二韻

樂。【四】開闢 郡邑。【五】文律 文章の法度。【六】鈴 兵機の節奏。【七】碧油 碧油、即ち軍幕。【八】櫓 櫓、動搖する貌。【九】吒 怒らす。【十】柘枝 舞の名。【十一】胡塵 後漢の武人。【十二】醴 濁酒。盡底は杯の底。【十三】陸參 陸上の珍味。熊掌は熊の掌の肉。頗る美味なり。【十四】蟹 蟹のほさみ。【十五】福履 福履なり。詩經に福履之とある。【十六】形 容儀。四座は一座の人人。【十七】羊公 晉の羊祜。襄陽を鎮せし時常に岘山に登る。【十八】傳説 殷の高宗の相、もと傳説の土工なり。【十九】厭厭 安きこと。詩經に厭厭夜飲とある。

【題義】汴州は後の河南省開封府である。令狐楚は敬宗の時宣武節度使となり汴州を鎮した。此詩は其作に和したのである。令公とは中書令の尊稱。

【詩意】客（樂天自ら謂ふ）あり東に征き夷門に至つて船の帆を卸した。令狐公が汴州を鎮するやうになつてから二年目に始めて訪うたのであるから、五日間逗留したのも無理はない。公は客を伴つて或は浚に遊び或は梁に遊んだ。公は善を好むに因つて心常に樂み、賢者を禮する爲に狀貌謙退である。民俗の阜なるを見ても公の勸奨の敦きことが知られ、民の安きに因つて疾苦を察するの廉なることがわかる。仁風道路に吹き滿ち慈雨郷邑を潤してゐる。公は夙に文詞の權を握り又武藝の奥儀を極め、赤豹の尾で飾つた槍や黒龍の髯で飾つた大旗を建て、日の西に傾き塵の靜まるに及び、奥深い書院や景色のよい座敷を選んで、毛氈を敷いたり簾を捲いたりして、盛宴を開き、雷の如く鼓を鳴らし雪の如く舞衣を翻し、美妓が花の如く玉の如くならんで髪から銀が墜ち、化粧した顔に汗がにじみ、酒も肴も溢るるほどあり水陸の珍味を盡してゐる。一座の人人は皆公の爲に祝福を祈り皆其風采を仰望し、永く此地を去らずに鎮せられんことを願うた。公は遍く衆を容愛し事に厚情を垂れ、客の醉はざるを憂へて頻に酒を勸めるので、座客は皆厭厭として夜飲ひと詩を賦して樂んだ。

船夜援琴

船にて夜琴を援く

鳥棲魚不動。月照夜江深。

鳥棲みて魚動かす。月照して夜江深し。

身外都無事。舟中只有琴。

身外都て事無く。舟中只琴有り。

七絃爲益友。兩耳是知音。

七絃益友たり。兩耳是れ知音。

心靜即聲淡。其間無古今。

心靜なれば即ち聲淡し。其間古今無し。

【題義】夜船上で琴を弾いたことを述べた詩である。

【詩意】日が暮れて鳥も魚も休息し、月が輝いて深江を照してゐる。これといふ仕事もないので琴でも弾かうといふ氣になつた。七絃琴は吾が益友で兩耳は即ち聽手である。心が穩だから琴の音も淡泊である。これは昔も今も同じである。

答劉和州禹錫

劉和州禹錫に答ふ

換印雖頻命未通。

印を換ふること頻なりと雖も命未だ通

【字解】【一】換印 官職をかへ

歷陽湖上又秋風。

歷陽湖上又秋風。

【二】歷陽湖 和州に在る湖の名。

律詩 船夜援琴 答劉和州禹錫

不教才展休明代。才をして休明の代に展べしめざるは、

【三】休明 美明なり。

爲罰詩爭造化功。詩の造化の功を争ふを罰するが爲なり。

我亦思歸田舍下。我も亦田舎の下に歸らんことを思ふ、

君應厭臥郡齋中。君は應に郡齋の中に臥すことを厭ふべし。

【四】郡齋 郡の役所。

好相收拾爲閒伴。好し相收拾して閒伴と爲らん、

【五】閒伴 閒遊の仲間。

年齒官班約略同。年齒官班約略同じ。

【六】年齒 年齡。官班は官位。約略は大略、大凡。

【題義】和州刺史劉禹錫に答へた詩である。

【詩意】君も幾度か官職は換はるが、いつも運が開けないで出世が出来ず、今年も和州刺史として歴陽湖上に秋風を噴せねばならない。今のやうな昭代に才力を發揮することが出来ないのは、あまりに詩が巧で造化と其功を争ふ天罰であらう。我も早く引退して田園に歸りたいと思ふが、君も刺史として埋もれてゐるのはいやであらう。退官の後には互に扶け合つて閒遊の仲間とならうではないか。君と僕とは年頃も官位も似たり寄つたりだから。

渡淮

淮を渡る

淮水東南闊。無風渡亦難。

淮水東南闊く、風無きも渡ること亦難し。

孤煙生乍直。遠樹望多圓。

孤煙生じて乍ち直く、遠樹望むに多く圓なり。

春浪棹聲急。夕陽帆影殘。

春浪棹聲急に、夕陽帆影殘る。

清流宜映月。今夜重吟看。

清流宜しく月を映すべし、今夜重ねて吟じ看ん。

【題義】淮水を渡る時の詩である。

【詩意】淮水は東南に向つて曠闊であつて、風がなくてすら渡るのは容易でない。船の上から遙に望めば孤煙が真直に立ちのぼり、遠方の樹木がこんもりとしてゐる。日も西に傾いたので船路を急いで棹の聲も烈しい。清流にうつる月影はさぞ美しいであらうから、今夜重ねて詩を吟じながら看ようと思ふ。

赴蘇州至常州答賈舍人

蘇州に赴かんとして常州に至り賈舍人に答ふ

杭城隔歲轉蘇臺。

杭城歳を隔てて蘇臺に轉ず、

還擁前時五馬回。

還前時の五馬を擁して回る。

厭見簿書先眼合。

簿書を見ることを厭ひて先づ眼合し、

喜逢杯酒暫眉開。

杯酒に逢ふを喜びて暫く眉開く。

【字解】【一】杭城 杭州。樂天は嘗て杭州刺史たり。蘇臺は姑蘇。即ち蘇州。

【二】五馬 刺史の馬。

未酬恩寵年空去。未だ恩寵に酬いず年空しく去り、
 欲立功名命不來。功名を立てんと欲して命來らず。
 一別承明三領郡。一たび承明に別れて三たび郡を領す、
 甘從人道是粗才。甘んじて従ふ人の是れ粗才なりと道ふに。

【一】命・好運。
 【二】承明・漢の時、侍從の臣の居りし處。領郡は刺史となること。

【題義】蘇州に赴任する途中常州に至り、時に常州刺史たりし賈舍人（嘗て中書舍人たり）に答へた詩である。

【詩意】去年杭州刺史から太子左庶子に任せられて杭州を去り、今又蘇州刺史に轉じ、もとの五馬を牽き蘇州を指して往くのである。刺史として簿書を檢閲するのがいやで往かぬ先から眼が合さり、君に逢うて杯酒歡笑するを喜んで暫く眉が開いた。未だ恩寵に酬いざるに年月は空しく去り、功名を立てようと思へどもまだ運が向いて來ない。一たび承明廬（樂天は嘗て左拾遺に任せられてここに奉事した）に別れてから三たび地方官となつて、宮闕には歸れない。世人の我を評して鈍才だと謂ふに任せて甘んじてゐる。

去歲罷杭州今春領吳郡。暫無善政聊寫鄙懷。
 兼寄三相公

去歲杭州を罷め、今春吳郡を領す。善政なきを慙ち、聊か鄙懷を寫し、兼ねて三相公に寄す。

爲問三丞相。如何秉國鈞。
 那將最劇郡。付與苦慵人。
 豈有吟詩客。堪爲持節臣。
 不才空飽暖。無惠及飢貧。
 昨臥南城月。今行北境春。
 鉛刀磨欲盡。銀印換何頻。
 杭老遮車轍。吳童掃路塵。
 虛迎復虛送。慙見兩州民。

【字解】【一】吳郡・蘇州。【二】國鈞・國家の樞機。【三】持節臣・刺史をいふ。【四】南城・杭州を指して言ふ。【五】北境・蘇州を指して言ふ。【六】鉛刀・鈍才に喩ふ。【七】遮車轍・寇準後漢の光武帝に從つて潁川の塵を平ぐ。百姓道を遮りて曰く、願はくは復寇君を借すこと一年なれと、乃ち留りて之を無難せしむ。

【題義】去年杭州刺史を罷め今春は蘇州刺史に任せられたが、いづれも善政なきを慙ち、感懷を述べて三相相に寄せたといふ意。

律詩 去歲罷杭州今春領吳郡暫無善政聊寫鄙懷寄三相公

【詩意】三相公にお尋ね申す。一體諸公の執政よりは誤つてゐるでは御座らぬか。最も事務の繁劇な蘇州に私のやうな慵人を振當てるとは何事か。詩人が刺史として不適當なことは明かな事實では御座らぬか。私は不才無能の身で徒に祿を食んで飽食暖衣し、惠澤の窮民に及ぶなく、去年は杭州の刺史となり今年も蘇州の刺史となり、鈍才も鳩き果てんとしてゐるのに、なせ屢々刺史などになさるのであらう。杭州の長老は吾が車を遮り、蘇州の童兒は路塵を掃つて送迎しても、何等治民の功がなく、二州の民に顔をあはせるのが慙かしい。

宣武令狐相公以詩寄贈傳播吳中聊奉短章

用伸酬謝

宣武の令狐相公詩を以て寄贈せられ、吳中に傳播す。聊か短章を奉り用て酬謝を伸ぶ

新詩傳詠忽紛紛 新詩傳へ詠じて忽ち紛紛

楚老吳娃耳徧聞 楚老吳娃耳徧く聞く

盡解呼爲好才子 盡く呼びて好才子と爲すを解し

不知官是上將軍 官は是れ上將軍なるを知らず

【字解】(一)吳娃 吳中の美女

(二)上將軍 節度使をいふ

辭人命薄多無位 辭人は命薄くして多く位無く

戰將功高少有文 戰將は功高くして文有ること少なり

謝朓篇章韓信鉞 謝朓が篇章韓信が鉞

一生雙得不如君 一生雙び得ること君に如かず

【三】辭人 詩人

【四】謝朓 南北朝の南齊の詩人

韓信は漢の高祖に仕へて大功ありし武將

【題義】宣武軍節度使令狐楚(嘗て宰相であつたから相公といふ)が樂天に詩を寄せたが、やがて其詩が蘇州一帶に傳誦せられた。因つて此詩を寄せて謝意を表したのである。

【詩意】君の新詩が廣く世上に傳誦せられ、楚の長老、吳の美女、一人として其詩を聞かぬ者はない。そして皆君が好才子なることを知つて上將軍なることを知らない。詩人は古來薄命で無官の人が多く、武將は功が高いが文才あることは稀である。されば謝朓の詞章も韓信の武勇も、君が一身に兼ね備へてゐるには及ばない。

自詠

自詠

形容瘦薄詩情苦 形容瘦薄詩情苦なり

豈是人間有相人 豈是れ人間有相の人ならんや

只合一生眠白屋 只合に一生白屋に眠るべし

【字解】(一)人間 世間。有相人は福相ある人

(二)白屋 茅を以て葺きし家。賤人の居る所

律詩 宣武令狐相公以詩寄贈傳播吳中聊奉短章用伸酬謝 自詠

何因三度擁朱輪。何に因りてか三度朱輪を擁せる。
 金章未佩雖非貴。金章は未だ佩びず貴に非ずと雖も、
 銀槿常攜亦不貧。銀槿は常に攜へて亦貧しからず。
 唯是無兒頭早白。唯是れ兒無くして頭早く白し、
 被天磨折恰平均。天に磨折せらるること恰も平均なり。

- 【三】朱輪 朱塗の馬車。刺史の車。
- 【四】金章 金印。
- 【五】銀槿 銀杯。

【題義】 自己の境遇を詠じた詩である。

【詩意】 吾は容貌が瘦せ枯れて詩情ばかり深い。どう値踏みをしても福相のある人とは謂はれない。只一生茅屋の中に埋もれてゐるべき筈なのが、どうして三度も刺史などになつたのであらう。まだ金印を佩びる程の身分にはならないが、常に銀杯を攜へる位の富は持つてゐる。ただ兒がなくて早くも白髮の老翁になつたのは天の挫折を被つて平均を得たわけであらう。

吟前篇因寄微之

前篇を吟じ因つて微之に寄す

君顔貴茂不清羸。君が顔は貴茂にして清羸ならず、
 君句雄華不苦悲。君が句は雄華にして苦悲ならず。

何事遣君還似我。何事ぞ君をして還我に似しむる、

髭鬚早白亦無兒。髭鬚早く白くして亦兒無し。

【題義】 前の自詠と題する詩を吟じて元稹に寄せたのである。

【詩意】 君の容貌は貴盛であつて瘦せ枯れてゐず、又君の詩句は雄渾華麗であつて悲觀的でない。然るになせか我と同じく鬚が白くなつても兒といふ者がない。

紫薇花

紫薇花

紫薇花對紫薇翁。紫薇花は對す紫薇翁、
 名目雖同貌不同。名目は同じと雖も貌は同じからず。
 獨占芳菲當夏景。獨り芳菲を占めて夏景に當り、
 不將顏色託春風。顏色を將て春風に託せず。
 潯陽官舍雙高樹。潯陽の官舍高樹を雙べ、
 興善僧庭一大叢。興善の僧庭一大叢。
 何似蘇州安置處。何ぞ似かん蘇州安置の處、

- 【字解】 【一】紫薇花 百日紅。
 紫薇翁は樂天自ら謂ふ。中書省を紫微省といふ。樂天、嘗て中書省人たりし故なり。 【二】芳菲 花草香美の貌。 【三】潯陽 江州。樂天嘗て江州司馬たり。 【四】興善 寺の名。 【五】蘇州安置 貶謫せらるるを安置といふ。樂天は蘇州刺史に貶せられた。

花堂欄下月明中。花堂の欄下月明の中。

【詩意】紫薇花が紫薇翁と相對してゐる。名はどちらも紫薇だけれども其貌は大變なちがひだ。此花は夏に當つて花を開くので春咲くのではない。江州の官舎には此花の大木が二本あり、興善寺の庭には一の大叢をなしてゐたが、蘇州官舎の花堂の欄下、月明の中の花には到底及ばない。

自到郡齋僅經旬日。方專公務未及宴遊。偷閒走筆題二十四韻。兼寄常州賈舍人湖州崔郎中。仍呈吳中諸客。

郡齋に到りてより僅に旬日を経、方に公務に專にして未だ宴遊するに及ばず。閒を偷み筆を走らせ二十四韻を題し、兼ねて常州の賈舍人・湖州の崔郎中に寄せ、仍つて吳中の諸客に呈す。

渭北離鄉客。江南守土臣。渭北郷を離るる客、江南土を守る臣。涉途初改月。入境已經旬。途を涉りて初めて月を改め、境に入りて已に旬を経たり。甲郡標天下。環封極海濱。甲郡天下に標れ、環封海濱を極む。

版圖十萬戶。兵籍五千人。版圖十萬戶、兵籍五千人。

自顧才能少。何堪寵命頻。自ら顧るに才能少し、何ぞ寵命の頻なるに堪へん。冒榮慙印綬。虛獎負絲綸。榮を冒して印綬に慙ち、獎を虚しくして絲綸に負く。

除蘇州制云。蘇子已爲道義。施於物。爲政能。在公形。骨鯁之志。闔境有三袴襦之樂。

塞かんことを要す。

候病須通脈。防流要塞津。病を候するには須らく脈を通すべく、流を防ぐには津を救煩無若靜。補拙莫如勤。煩を救ふは靜に若くは無く、拙を補ふは勤に如くは莫し。削使科條簡。攤令賦役均。削りては科條をして簡ならしめ、攤ひては賦役をして均以茲爲報效。安敢不躬親。茲を以て報效と爲す、安んぞ敢て躬親らせざらん。襦袴提於手。韋弦佩在紳。襦袴は手に提げ、韋弦は佩びて紳に在り。敢辭稱俗吏。且願活疲民。敢て俗吏と稱せらるるを辭せんや、且願くは疲民を活か常未徵黃霸。湖猶借寇恂。常は未だ黃霸を徵さず、湖は猶寇恂を借す。愧無鎡脚政。徒添犬牙隣。愧づらくは鎡脚の政無く、徒に犬牙の隣を添くす。

河北有三郡。相隣。皆有二番。政。時爲。鑄脚刺史。見三虞書。

制誥誇黃絹。美賈常。州也。

制誥は黃絹に誇り、

律詩 自到郡齋僅經旬日方專公務未及宴遊

詩篇占白蘋興也

詩篇は白蘋を占む。

銅符抛不得自謂也瓊樹見無因

銅符抛ち得ず、瓊樹見るに因無し。

警寐鐘傳夜催衙鼓報晨

寐を警めて鐘は夜を傳へ、衙を催して鼓は晨を報す。

唯知對胥吏未暇接親賓

唯胥吏に對するを知り、未だ親賓に接するに暇あらず。

色變雲迎夏聲殘鳥過春

色變りて雲夏を迎へ、聲残りて鳥春を過ぐ。

麥風非逐扇梅雨異隨輪

麥風は扇を逐ふに非ず、梅雨は輪に隨ふに異なり。

武寺山如故寺武丘

武寺山故の如く、

王樓月自新郡内東南樓名也

王樓月自ら新なり。

池塘閒長草絲竹廢生塵

池塘閒にして草を長じ、絲竹廢して塵を生ず。

暑遣燒神耐晴教曬舞茵

暑は神耐を燒かして、晴れては舞茵を曬さしむ。

待還公事了亦擬樂吾身

公事を還し了るを待ち、亦吾が身を樂ましめんと擬す。

【字解】【一】郡署 刺史の官舎。【二】吳中 蘇州なり。【三】涓北 涓水の北。【四】甲郡 大郡。蘇州を指していふ。【五】

【六】版圖 戶籍及び地圖。【七】絲竹 琴瑟の類。【八】科條 法令。【九】報效 君恩に報いる。【一〇】補封 晉書謝尚傳に、尚始到官、郡府以三布四十四爲尙造三烏布帳、尙懷之以爲三軍士補封とあり、南史梁安成王秀傳に、每三冬月常作三

補封以賜三凍者とある。【一一】章鼓 章はなめしがは。鼓は弓鼓。韓非子に、西門豹性急、故佩章以自說、董安于性緩、故佩

以自念とある。【一二】黃霸 漢の陽夏の人。宣帝の時潁川太守揚州刺史に累官し、治行天下第一と稱せらる。後徵されて丞相となる。【一三】寇恂 後漢の昌平の人。光武の河内を定むるや河内太守に拜せらる。後潁川汝南守となる。教化大に行はる。後潁川

に監起る。恂帝に従つて出征す。賊平ぐ。百姓道を遮りて曰く、願はくは復寇君を借すこと一年なれと。乃ち留りて之を無難せしむ。【一四】

【一五】 鍾脚鼓 鐘は大釜。其脚三あり。三州鼎足して治績を擧ぐる。【一六】 犬牙 犬牙の相錯るが如く境を接する。【一七】 修制 節制也。黃霸は黃霸幼婦の略。絶妙好辭の意。世説に、魏武嘗過曹娥碑下、楊修從三碑背上見題三黃霸幼婦外孫白八字、修

曰、黃霸色絲也、於字爲絕、幼婦少女也、於字爲妙、外孫女子也、於字爲好、白受辛也、於字爲辭とある。【一八】 白蘋 楚辭九歌に、登白蘋兮將采芣、與佳期兮夕張とある。【一九】 銅符 史記に、初與三郡國守相爲三銅虎符とある。【二〇】 瓊樹 美し

き容姿。【二一】 催衙 衙とは朝晩羣吏が長官の前に集まつて事務を報告すること。【二二】 胥吏 小吏。【二三】 隨輪 後漢書鄭

弘傳注に、弘治息縣賦、政不煩苛、行善大早、隨車教雨とある。

【題義】蘇州刺史の官舎に到着してから僅に十日を経たばかりであるが、公務に忙殺せられて宴遊する暇がない。閒を偷んで此二十四韻四十八句の詩を題し、常州刺史賈舍人、湖州刺史崔玄亮に寄せ、併せて蘇州の諸客に呈したといふのである。

【詩意】吾は涓水の北の郷里を去つて江南蘇州の刺史になつた。月を越えて任地に到り已に十日を経た。蘇州は天下の大郡で民戸は十萬あり、兵籍に在る者も五千人ある。自分は不才の身で到底この寵

任を全うすることは出来まいと恐懼してゐる。病を知るには脈を按るべく、流を防ぐには津を塞ぐべく、煩を救ふには静に若くはなく、拙を補ふには勤に如くはない。よく此四者を守り法令を簡にし賦

役を均らし、以て報效を期し、恩恵を民に施すことを心懸け、己の性癖を矯めんことを務めて行かうと

律詩 白到郡寄僮奴日方專公務未及宴遊

六二五

六二五

思ふ。ただ疲民を活かすことが出来れば俗吏と稱せらるるも固よりも甘んずる所である。賈舍人は治績の觀るべきものあるも未だ天子の徵命に接せず、崔郎中も今尚湖州に留つてゐる。吾が蘇州は常湖二州と境を接してはゐるが其治績に於ては鼎立することは出来ない。且賈舍人は詔勅文に巧で崔郎中は詩に妙である。吾は此二友と會見したいと思ふが、職務を抛つて行くことも出来ず、鐘鼓の聲に催されて起臥し、ただ小吏を相手に日を送り、未だ君等と遊宴することが出来ない。やがて春が過ぎて夏が来て麥風梅雨の時節となつても、吾が功の致す所ではない。武丘寺や王樓は風月の勝に富んでゐるが、遊賞する暇なく、暑氣を掃ふ爲に燒酎を飲み晴天に舞茵を慶すのみである。併し公務の片附くのを待つて樂を盡したいと思つてゐる。

題籠鶴

籠鶴に題す

經旬不飲酒。踰月未聞歌。

旬を経て酒を飲まず、月を踰えて未だ歌を聞かず。

豈是風情少。其如塵事多。

豈是れ風情の少きならんや、塵事の多きを其如せん。

虎丘慙客問。娃館妬人過。

虎丘には客の問ふを慙ぢ、娃館には人の過ぐるを妬む。

莫笑籠中鶴。相看去幾何。

籠中の鶴を笑ふ莫れ、相見て去ること幾何ぞ。

【字解】(一) 虎丘 山の名。江蘇省吳縣の西北に在る。蘇州の勝地。(二) 娃館 館娃宮。吳王夫差宮を硯石山上に作り以て西

施を館す。吳人美女を謂うて娃となす。故に館娃といふ。其遺址今の江蘇省吳縣の西南靈巖山上に在り。

【題義】籠中の鶴に題した詩である。

【詩意】蘇州に来てから十日を経るも酒を飲まず、月を踰えても歌も聞かない。決して無風流なわけではなく、俗事に追はれて暇がないからである。人の虎丘を問ふを慙ぢ、人の館娃宮に往つたと聞いては妬ましく思ふ。籠中の鶴を笑ふことは出来ない。自分の身も丁度鶴と同じだから。

答客問杭州

客の杭州を問ふに答ふ

爲我踟躕停酒盞。

我が爲に踟躕して酒盞を停めよ、

與君約略說杭州。

君の與に約略杭州を説かん。

山名天竺堆青黛。

山を天竺と名けて青黛堆く、

湖號錢塘瀉綠油。

湖を錢塘と號して綠油を瀉ぐ。

大屋檐多裝鴈齒。

大屋の檐は多く鴈齒を裝ひ、

小航船亦畫龍頭。

小航の船は亦龍頭を畫く。

所嗟水路無三百。

嗟く所は水路三百無きも、

官繫何因得再遊。

官に繫がれ何に因りてか再び遊ぶを得ん。

【字解】(一) 踟躕 ためらふ。

酒盞は酒杯。

(二) 約略 大略。

(三) 鴈齒 排列する儀。

(四) 三百 三百里。

【題義】 杭州のことを問ふ者あるに答へし詩なり。

【詩意】 まア杯を停めて暫く聴かれよ。君の爲に大略杭州の話を致さう。杭州には天竺と名づくる山があつて黛を疊んだやうに青く、錢塘といふ湖水があつて油を湛へたやうに緑である。大厦が軒を連ねて雁齒の如く比び、龍頭を畫いた小船が湖上を往來してゐる。實に風景絶佳の地で、蘇州を距ること僅に三百里に過ぎないが、官職に縛られてゐるから再遊することは出来ない。誠に残念の至である。

登閩門開望

閩門に登りて開望す

閩門四望鬱蒼蒼

閩門の四望鬱として蒼蒼、

始覺州雄土俗強

始めて覺る州の雄にして土俗の強きを。

十萬夫家供課稅

十萬の夫家は課稅を供し、

五千子弟守封疆

五千の子弟は封疆を守る。

閩閩城碧鋪秋草

閩閩城碧にして秋草を鋪き、

烏鵲橋紅帶夕陽

烏鵲橋紅にして夕陽を帶ぶ。

處處樓前颿管吹

處處の樓前管吹を颿し、

【字解】 (一) 夫家 民家。前の

自到三郡書二僅輕三旬日云云、と題する詩に、版圖十萬戶、兵籍五千人とある。

(二) 封疆 國境。

(三) 閩閩城 蘇州城なり。閩閩は吳王の名。

(四) 烏鵲橋 橋の名。

家家門外泊舟航

家家の門外舟航を泊す。

雲埋虎寺山藏色

雲は虎寺を埋めて山色を藏し、

月耀娃宮水放光

月は娃宮に耀きて水光を放つ。

曾賞錢塘兼茂苑

曾て錢塘を賞して茂苑を兼ね、

今來未敢苦誇張

今來りて未だ敢て苦に誇張せず。

【題義】 閩門(門の名)に登つて四方を開望したことを述べた詩である。

【詩意】 閩門の樓上から四方を望めば鬱蒼蒼としてゐる。之を觀て始めて始めて蘇州の雄大で土俗の強勇なことがわかる。蘇州には十萬の民戸があつて租稅を納め、五千の子弟が領内を守つてゐる。閩閩城の邊は秋草綠を敷き、朱塗の烏鵲橋は夕日を帯びて紅である。處處の樓上からは笛の音が響き渡り、家家の門外には舟が碇泊してゐる。雲は虎丘寺を埋めて山さへ見え、月は館娃宮を照して水が光を放つてゐる。曾て自分は杭州の錢塘や茂苑の景色を賞めたものであつたが、今一たび此景色を見てはもう杭州をほめ立てることは息めにする。

代諸妓贈送周判官

諸妓に代りて周判官に贈送す

妓筵今夜別姑蘇

妓筵今夜姑蘇に別れ、

【字解】 (一) 姑蘇 蘇州。

客棹明朝向鏡湖。

客棹明朝鏡湖に向ふ。

莫汎扁舟尋范蠡。

扁舟を汎べて范蠡を尋ぬる莫れ、

且隨五馬覓羅敷。

且五馬に隨ひて羅敷を覓めよ。

蘭亭月破能廻否。

蘭亭月破れて能く廻るや否や、

娃館秋涼却到無。

娃館秋涼しくして却つて到るや無や。

好與使君爲老伴。

好し使君と老伴たるに、

歸來休染白髭鬚。

歸來白髭鬚を染むるを休めん。

娃宮、蘇州に在り。前の題「龍鶴」を見よ。【一】使君、刺史の稱。

【題義】送別の席に侍した諸妓に代つて此詩を周判官（越州刺史元稹の屬官周元範）に贈り、且送別の意を述べたのである。

【詩意】君は今夜妓筵で蘇州に別れ、明朝は船で越州に向ふのである。たとひ越州に往つても扁舟を泛べて范蠡を尋ねるやうな事はせず、刺史に隨つて羅敷でも捜す工夫をするがよい。蘭亭に月が破れ館娃宮に秋の涼しき頃また蘇州に還つてはどうか。丁度蘇州刺史白樂天とは、よい遊仲間であるから。蘇州に歸つたら白鬚を染めて官職を奉することをやめ、自由の身になつて俱に遊ばうではないか。

鏡湖、越州に在る湖の名。【三】扁舟、小舟。范蠡は越王に仕へ功成りて世を逃れし人。【四】五馬、刺史の馬。ここは刺史の意に用ふ。羅敷は趙王の家令王仁の妻なり。桑名陌上に探る。趙王薨に登り見て之を悦び奪はんと欲す。羅敷華を弾じて陌上桑を作り、以て自ら夫あるを明にす。趙王乃ち止む。【五】蘭亭、越の會稽に在る地名。【六】娃館、館

秋寄微之十二韻

秋微之に寄す十二韻

娃館松江北、稽城浙水東。

娃館松江の北、稽城浙水の東。

屈君爲長吏、伴我作衰翁。

君を屈して長吏と爲し、我に伴ひて衰翁と作る。

旌旆知非遠、煙雲望不通。

旌旆遠きに非ざるを知らずとも、煙雲望通せず。

忙多對酒榼、興少閱詩筒。

忙多くして酒榼に對し、興少くして詩筒を閱す。

此在杭州、兩浙唱和詩贈答、於三箇中一遞來往。

淡白秋來日、疎涼雨後風。

淡白なり秋來の日、疎涼なり雨後の風。

餘霞數片綺、新月一張弓。

餘霞數片の綺、新月一張の弓。

影滿衰桐樹、香凋晚蕙叢。

影は衰桐の樹に滿ち、香は晚蕙の叢に凋む。

飢啼春穀鳥、寒怨絡絲蟲。

飢えて啼く春穀の鳥、寒くして怨む絡絲の蟲。

覽鏡頭雖白、聽歌耳未聾。

鏡を覽るに頭は白しと雖も、歌を聴くに耳未だ聾せず。

老愁從此遣、醉笑與誰同。

老愁此れより遣らん、醉笑誰と同じうせん。

清且方堆案、黃昏始退公。

清且方に案に堆し、黃昏始めて公より退く。

可憐朝暮景、銷在兩衙中。

可憐なる朝暮の景、銷して兩衙の中に在り。

【字解】(一) 娃館 館娃宮。蘇州に在り。前の題「龍船」を見よ。松江は今の吳淞江。(二) 精城 越の會稽。浙水は川の名。
 【酒榼 酒樽】(三) 詩筒 詩を入れて郵送する竹筒。(四) 晚蕙 蕙は香草の名。(五) 綺絲 蟲の名。はたおりの。
 【七】 退公 役所からひける。(六) 可憐 愛すべしの意。(九) 兩衙 朝衙と暮衙。衙とは朝晩羣吏が長官の前に集りて政務を報告すること。

【題義】 秋、越州刺史元稹(字は微之)に寄せた十二韻二十四句の詩である。

【詩意】 我は蘇州に在り君は越州に在り、我は君を屈して長吏となし、(元稹は觀察使で刺史の上だからかくいふ。)君は我に伴つて衰翁となつてゐる。君の居る處が遠いわけではないが煙雲が深く罩めてゐて望んでも見えない。多忙の爲に酒を飲んで憂を霽し、興が少いので詩筒を検して自ら慰めてゐる。今や風雨凄涼の秋となり、霞は綺の如く月は弓の如く、梧桐葉墜ち蕙蕙香凋み、鳥は飢ゑて啼き絡絲蟲は寒を怨んでゐる。鏡を覽れば吾が頭髮は白くなつたが、歌を聴くにまだ耳が遠くならない。老愁を霽らさうと思へども醉笑を俱にすべき相手が無い。朝には簿書が案上に堆く、一日中その檢閲をして夕方になつて始めて役所がひける。愛すべき景色はあつても賞する暇もなく、空しく事務に忙殺されて日を送つてゐる。

池上早秋

池上早秋

荷芰綠參差、新秋水滿池。

荷芰綠參差、新秋水池に滿つ。

早涼生北檻、殘照下東籬。

早涼北檻に生じ、殘照東籬に下る。

露飽蟬聲懶、風乾柳意衰。

露に飽きて蟬聲懶く、風に乾きて柳意衰ふ。

過潘二十歲、何必更愁悲。

潘に過ぐるこゝ二十歲、何ぞ必ずしも更に愁悲せん。

【字解】(一) 荷芰 荷は蓮の葉、芰は菱。參差は不齊の貌。(二) 北檻 北方の欄干。(三) 潘 晉の潘岳。年三十二の時白髮を盛んで秋興賦を作る。

【題義】 池邊早秋の景を敘した詩である。

【詩意】 秋水が池に滿ちて蓮の葉や菱が浮きつ沈みつ漂つてゐる。北の欄干には早涼がおとづれ夕日が東の籬を照してゐる。露繁くして蟬の聲も力なく風に乾いて柳の絲も衰へた。潘岳は三十二で老を嘆じて秋興賦を作つたが、自分は潘岳に過ぐるこゝ二十歲であるから、今更愁悲などする段ではない。

郡西亭偶詠

郡の西亭偶詠

常愛西亭面北林。

常に愛す西亭の北林に面し、

公私塵事不能侵。

公私の塵事侵す能はざるを。

共閒作伴無如鶴。

閒を共にして伴と作るは鶴に如くは無く、

與老相宜只有琴。

老と相宜しきは只琴有り。

莫遣是非分作界。是非をして分ちて界を作さしむる莫れ、
須教吏隱合爲心。須らく吏隱をして合せて心となさしむ
可憐此道人皆見。憐む可し此道人皆見る、
但要修行功用深。但要す修行功用の深きを。

「べし。」

【字解】「一」吏隱。官吏と隱遁

【題義】蘇州の役所の西亭で偶々感ずる所を詠じた詩である。

【詩意】吾は西亭が北林に面し、公私の俗事が侵入せぬのを愛好してゐる。ただ鶴が閑中の伴となり、
琴が老懷を慰めるのみで、その他には何物もない。宜しく是非の分別を超脱して吏も隱も其心を穩
にすべきである。此事は人皆の知つてゐる所ではあるが、ただ知つたばかりで修行功用に現さなけれ
ば何の役にも立たない。

故衫

故衫

閑淡緋衫稱老身。閑淡たる緋衫老身に稱ふ、
半披半曳出朱門。半は披半は曳きて朱門を出づ。
袖中吳郡新詩本。袖中には吳郡の新詩本、

【字解】「一」閑淡。薄黒き貌。
緋衫は赤色の上衣。刺史の著るもの。
「二」朱門。朱塗の門。
「三」吳郡。蘇州。時に樂天は蘇州

襟上杭州舊酒痕。襟上には杭州の舊酒痕。

「とす、

殘色過梅看向盡。殘色梅を過ぎて看すみす盡くるに向ん

「とす、

故香因洗嗅猶存。故香洗ふに因りて嗅げば猶存す。

「とす、

曾經爛熳三年著。曾經爛熳として三年著るを經たり、

「とす、

欲棄空箱似少恩。空箱に棄てんと欲するも恩少きに似たり。

「とす、

【題義】著古した衫（刺史の著る上衣）を詠じた詩である。

【詩意】色の薄黒くなつた緋の上衣が老いたる我身に能く似合ふ。半著半曳きすりながら門を出て行
く。袖の中には蘇州で出來た新詩巻が入れてあり、襟には杭州で飲んだ酒のしみがある。襪めた色は
入梅を過ぎて殆ど失はれんとし、古き香は洗濯した後でも嗅げばまだ残つてゐる。三年間著古したの
で、空箱の中に棄てようと思ふけれども、何となく薄情のやうに思はれて棄てかねてゐる。

刺史たり。
「一」杭州。樂天は嘗て杭州刺史た
り。
「二」梅。入梅。
「三」爛熳。光彩分布の貌。

郡中夜聽李山人彈三樂

郡中夜李山人の三樂を彈するを聽く

風琴秋拂匣。月戸夜開關。
榮啓先生樂。姑蘇太守閒。

風琴秋匣を拂ふ、月戸夜關を開く。
榮啓先生が樂、姑蘇太守の閒。

律詩 故衫 郡中夜聽李山人彈三樂

傳聲千古後。得意一時間。聲を傳ふ千古の後、意を得たり一時の間。
却怪鍾期耳。唯聽水與山。却つて怪む鍾期が耳、唯水と山とを聽くを。

【字解】(一) 郡中 蘇州の役所を指していふ。(二) 三樂 列子天瑞篇に、孔子遊泰山、見樂器期而委素、鼓琴而歌、問曰、先生何樂也、曰、天生萬物、人爲之貴、吾得爲人、一樂也、男女之別、男尊女卑、吾得爲男、二樂也、人生有不見日月、不免三福者、吾行年九十矣、三樂也とある。(三) 姑蘇太守 蘇州刺史白樂天。(四) 鍾期 春秋時代の楚人鍾子期なり。伯牙琴を鼓し、志、高山流水に在り、子期聽いて之を知る。子期の死するや伯牙琴を絶ちて復鼓せず。謂ふ世に吾を賞する者なしと。

【題義】蘇州の役所で夜李山人の三樂を彈くのを聽いて作つた詩である。

【詩意】秋月の下に匣を開いて琴を奏する。蘇州刺史白樂天は閒に乗じて三樂の曲に聽き入つた。千載の後まで傳はる此聲を聞いて大に感ずる所があつた。鍾子期がただ高山流水の趣を聽いたのは、まだまだ本當に琴中の趣を解する者ではないと怪んだ。

東城桂三首并序

樂府解題作桂華曲

東城の桂三首

并に序

樂府解題には桂華曲となす

蘇之東城古吳都城也。今爲樵牧之場。有桂一株。生乎城下。惜其不得地。因賦三絕句以唁之。

【調讀】蘇の東城は古の吳の都城なり。今は樵牧の場となり、桂一株有り城下に生ず。其の地を得ざるを惜み、因りて三絶句を賦し以て之を唁ふ。

子墮本從天竺寺。

子墮つるは本天竺寺從りす、

根盤今在闔閭城。

根盤りて今闔閭城に在り。

當時應逐南風落。

當時應に南風を逐ひて落ち、

落向人間取次生。

落ちて人間に向つて取次に生ぜしなるべし。

舊說杭州天竺寺。每歲秋中有三月桂子墮。

【題義】蘇州の東城の桂を詠じた詩である。

【詩意】初め桂の實が杭州の天竺寺から落ち、それが根を張つて今は蘇州城下に立つてゐる。恐らく昔南風を逐つて落ち、それが段段と生え出して此桂になつたのであらう。

〔一〕

〔二〕

霜雪壓多雖不死。

霜雪壓する多きも死れずと雖も、

荆榛長疾欲相埋。

荆榛長く疾みて相埋めんと欲す。

常憂落在樵人手。

常に憂ふ落ちて樵人の手に在り、

律詩 東城桂三首并序

【字解】(一) 天竺寺 杭州の寺の名。(二) 闔閭城 蘇州城をいふ。

闔閭は吳王の名。(三) 人間 世間。取次は段段に。

賣作蘇州一束柴。賣られて蘇州一束の柴と作るを。

【詩意】霜や雪が壓迫を加へても枯れないが、荆榛が疾んで埋めようとしてゐる。おまけに樵人の手に落ちて一束の薪として賣りとばされることを常に憂へてゐる。

〔三〕

遙知天上桂花孤。遙に知る天上桂花の孤なるを、

試問嫦娥更要無。試みに嫦娥に問ふ更に要するや無やと。

月宮幸有閒田地。月宮幸に閒田地有らば、

何不中央種兩株。何ぞ中央に兩株を種るざる。

〔三〕

【字解】〔一〕嫦娥 搜神記に羿精不死之藥於西王母、嫦娥竊之、以奔月とある。
〔二〕閒田地 あきち。

【詩意】天上には桂の花が少いやうだ。もつといるかどうか嫦娥に聞いて見よう。月宮に幸に閒地があれば其中央に二株ばかり植ゑたらよからう。

聞行簡恩賜章服喜成長句寄之

行簡章服を恩賜せらると聞き喜んで長句を成し之に寄す

吾年五十加朝散。吾年五十にして朝散を加へらる、

爾亦今年賜服章。爾亦今年服章を賜はる。

齒髮恰同知命歲。齒髮は恰も知命の歳を同じうし、

官銜俱是客曹郎。官銜は俱に是れ客曹郎。

子與三行簡俱年五十。始著緋。皆是主客郎中。

榮傳錦帳花聯萼。榮は錦帳を傳へ花は萼を聯ね、

彩動綾袍鴈趁行。彩は綾袍を動かし鴈は行を趁ふ。

緋多以雁銜。瑞紗爲之也。

大抵著緋宜老大。大抵緋を著るは老大に宜し、

莫嫌秋鬢數莖霜。秋鬢數莖の霜を嫌ふ莫れ。

【題義】行簡(樂天の弟)が章服(官階の制服)を賜はつたことを聞き、喜んで此詩を作つて行簡に寄せたのである。

【詩意】自分は年五十の時朝散大夫となつたが、汝も今年五十で章服を賜はつた。年齢は俱に五十で官職は皆主客郎中である。兄弟相並んで光榮に浴したことはありがたき極みである。大抵緋衣(即

律詩 聞行簡恩賜章服喜成長句寄之

【字解】〔一〕朝散 朝散大夫なり。文武官吏の總行聲望ある者に加ふる位階。

〔二〕齒髮 年齢。知命は五十歳をいふ。

〔三〕官銜 官職。客曹郎は主客郎中をいふ。

〔四〕花聯萼 兄弟共に榮ゆること。

〔五〕鴈趁行 兄弟相並ぶこと。

〔六〕老大 老年。

ち章服（しやうふく）を着るのは老年（らうねん）であるから、鬢（びん）が白くなつても仕方（しかた）があるまい。

喚笙歌

笙歌を喚ぶ

露墜萎花（つゆあひな）。風吹敗葉（かぜふか）。露墜（つゆあひ）ちて花を萎（しな）ます。風吹（かぜふ）きて葉を敗（やぶ）る。荷（か）。

老心（らうしん）歡樂少（くわんらくすく）。秋眼（しゅうがん）感傷多（かんしやうた）。老心（らうしん）歡樂少（くわんらくすく）。秋眼（しゅうがん）感傷多（かんしやうた）。

芳歲（ほうさい）今如此（いまごと）。衰翁（すいおう）可奈何（いかん）。芳歲（ほうさい）今如此（いまごと）の如し、衰翁（すいおう）奈何（いかん）す可（べ）き。

猶應（なほま）不如醉（なほま）。試遣喚笙歌（しせん）。猶應（なほま）に醉（ま）ふに如（ごと）かざるべし、試（こころ）みに笙歌（しやうか）を喚（よ）ばしむ。

【字解】【一】榎（えん）。木の名。むくげ。【二】荷（か）。蓮（れん）。【三】芳歲（ほうさい）。陽春の時節。

【題義】感傷（かんしやう）を慰（なぐさ）むる爲（ため）に笙歌（しやうか）を喚（よ）んだことを述べた詩である。

【詩意】秋もふけた。露が繁（しげ）く落ちて榎（えん）の花も萎（しな）み、風が吹いて蓮（れん）の葉も敗（やぶ）れた。老いては樂（たの）が少（すく）く、何（なに）を見ても感傷（かんしやう）の種（たね）ならぬはない。花咲く春も今此（いまごと）の如（ごと）き有（あ）りなつた。人も老いては昔（むかし）の若（わか）さに返（か）さん術（じゆつ）はない。まア酒（さけ）でも飲んで見（み）ようと思（おも）つて笙歌（しやうか）を喚（よ）ばしめた。

對酒吟

對酒吟

一拋（ひと）學士筆（がくし）。三佩（さん）使君符（しきん）。一たび學士（がくし）の筆（ふで）を拋（な）ち、三たび使君（しきん）の符（かぎ）を佩（か）ぶ。

未換（いま）銀青綬（ぎんせい）。唯添（ただ）雪白鬚（せき）。未だ銀青（ぎんせい）の綬（じゆ）を換（か）へず、唯（ただ）雪白（せき）の鬚（ひげ）を添（ひ）ふ。

公門（こうもん）衙退掩（が）。妓席（きせき）客來鋪（きやく）。公門（こうもん）は衙（が）より退（しりぞ）きて掩（おほ）ひ、妓席（きせき）は客（きやく）來（き）りて鋪（し）く。

履（り）鳥（り）從（り）相近（り）。謳吟（おうぎん）任（り）所須（り）。履（り）鳥（り）相近（り）づくに從（り）ひ、謳吟（おうぎん）須（り）ふる所に任（り）ず。

金銜（きんげん）嘶（い）五馬（ごま）。鈿帶（でんたい）舞（ま）雙妹（さうまい）。金銜（きんげん）して五馬（ごま）を嘶（い）かせ、鈿帶（でんたい）して雙妹（さうまい）を舞（ま）はしむ。

不得（た）當年有（た）。猶勝（なほ）到老無（なほ）。當年（たうねん）に有（あ）るを得（え）ざるも、猶（なほ）老（らう）に到（いた）るまで無（な）きに勝（か）れり。

合聲歌（あはせうた）漢月（かんげつ）。齊手（せいしゅ）拍吳歎（ぱくごたう）。聲（こゑ）を合（あ）せて漢月（かんげつ）を歌（うた）ひ、手（て）を齊（せい）しうして吳歎（ごたう）を拍（う）つ。

今夜（こんや）還先醉（またま）。應煩（おほ）紅袖扶（こうしゆ）。今夜（こんや）還先（またま）づ醉（ま）ふ、應（おほ）に紅袖（こうしゆ）の扶（たす）くるを煩（わづら）はすべし。

【字解】【一】學士（がくし）。官名。翰林學士。【二】使君（しきん）。刺史の稱。【三】銀青（ぎんせい）。銀印青綬をいふ。金紫に對していふ。【四】衙退（が）。役所からひけて來る。【五】履鳥（り）。くつ。【六】金銜（きんげん）。くつわ。五馬は刺史の馬。【七】鈿帶（でんたい）。螺鈿の帶。雙妹は二人の美女。【八】當年（たうねん）。青年時代をいふ。【九】漢月（かんげつ）。梁の簡文帝の明君詞に、秋蟾照漢月、愁恨入胡風とある。【一〇】吳歎（ごたう）。楚辭に吳歎祭酒、奏大呂些とある。【一一】紅袖（こうしゆ）。美妓をいふ。

【題義】酒（さけ）に對（たい）して醉（ま）吟（ぎん）したことを述べた詩である。

【詩意】自分（じぶん）は一たび翰林學士（かんりんがくし）の職（しやく）を罷（お）めてから三たび各州（かくしゅう）の刺史（しし）となり、今尙（いま）刺史（しし）の職（しやく）を奉（ほう）じて昇（しやう）進（しん）が出来（でき）ず、徒（いた）に鬚（ひげ）が白（しろ）くなるばかりである。役所（やくしよ）から退出（たいしゅつ）して後は官舍（くわんしや）の門（かど）を閉（し）めて妓席（きせき）を設（ま）け、

あまたの客を請じて聽吟し、美妓をして舞はしめる。かかる愉快な歌舞醉吟の樂をば青年時代に恣にするこの出来なかつたのは遺憾であるが、老年に到るまで一度も經驗することの出来ないよりはましである。因つて聲を合せて漢月を歌ひ、一同手拍子を打つて吳歌を歌つた。今夜は第一番に先づ酔ひつぶれ、美妓の介抱を煩はすであらう。

偶飲

偶飲

三盞醺醺四體融。三盞醺醺として四體に融る、

妓亭簷下夕陽中。妓亭の簷下夕陽の中。

千聲方響敲相續。千聲の方響敲きて相續ぎ、

一曲雲和憂未終。一曲の雲和憂して未だ終らず。

今日心情如往日。今日の心情往日の如く、

秋風氣味似春風。秋風の氣味春風に似たり。

唯憎小吏樽前報。唯憎む小吏の樽前に報するを、

道去衙時水五筒。衙を去れと道ふ時水五筒。

【字解】【一】三盞 三杯 醺醺は酔ふ貌。

【二】方響 樂器の名。銅製の長方形十六枚を以て共に一架に懸け、小銅鑼を以て之を擊つ。

【三】雲和 樂器の名。

【四】去衙 晩衙を廢すること。衙とは朝晩幕吏が長官の前に集まつて政務を報告すること。

【題義】偶然酒を飲んで樂を求めたことを述べた詩である。

【詩意】ふと夕方妓亭に立寄り三杯ほど傾けた所が、醉が體中にまはつて來た。興に任せて方響を敲いたり雲和を弾じたりすると、何となく昔の若い時代のやうな氣持になり、秋ながら春のやうな氣味を感じる。ただ小癩にさはることは小吏が來て彼此と事務の相談を持ちかけることだ。因つて腹立ちまぎれに、今日は晩衙をやめろ」と嗚鳴りつけて、酔醒の水を五杯飲んだ。

早發赴洞庭舟中作

早に發して洞庭に赴く舟中の作

閩門曙色欲蒼蒼。閩門の曙色蒼蒼たらんと欲す、

星月高低宿水光。星月高低水光に宿る。

棹舉影搖燈燭動。棹舉り影搖きて燈燭動き、

舟移聲拽管絃長。舟移り聲拽きて管絃長し。

漸看海樹紅生日。漸く看る海樹の紅にして日を生ずるを、

遙見包山白帶霜。遙に見る包山の白くして霜を帯ぶるを。

出郭已行十五里。郭を出でて已に行ること十五里、

唯消一曲慢霓裳。唯消ふ一曲霓裳を慢うすることを。

【字解】【一】閩門 蘇州城の門の名。蒼蒼は薄暗き色。

【二】包山 山の名。即ち洞庭の西山。今の江蘇省吳縣の西、太湖の中に在り。

【三】霓裳 舞曲の名。慢はゆるやかに舞ふこと。

【題義】 早晚出發して洞庭（湖の名。太湖ともいふ。湖南省のとは別である）に赴く舟中で作つた詩である。

【詩意】 閨門のあたりは夜がほのぼのと明け始め、星が或は高く或は低く水にうつつてゐる。舟の動揺につれて燭火がうごき、舟の進むにつれて管絃の聲が響き渡る。海邊の樹木が紅色を呈すると程なく旭日が現れ、遙に霜を帯びた包山が白く見える。蘇州城を距ること已に十五里である。これからは霓裳の舞でも見て舟路の退屈をまぎらす外はない。

宿湖中

湖中に宿す

水天向晚碧沈沈。水天晚に向ひて碧沈沈。
樹影霞光重疊深。樹影霞光重疊して深し。
浸月冷波千頃練。月を浸す冷波千頃の練。
苞霜新橘萬株金。霜を苞む新橘萬株の金。
幸無案牘何妨醉。幸に案牘無し何ぞ酔ふを妨げん、
縱有笙歌不廢吟。縱ひ笙歌有るも吟を廢せず。
十隻畫船何處宿。十隻の畫船何の處にか宿する、

【字解】 (一) 沈沈 盛なる貌。
淮南子に茫茫沈沈とある。
(二) 千頃 百畝を一頃といふ。練はれりきぬ。
(三) 案牘 簿書といふが如し。
(四) 洞庭 江蘇省にある湖の名。即ち太湖。

洞庭山脚太湖心

洞庭の山脚太湖の心

【題義】 洞庭湖中に宿したことを述べた詩である。
【詩意】 夕方になつて水天一碧茫茫として闊く、陸上を見れば霞の奥に樹木が重疊してゐる。月影を宿した冷な波は千頃の練を敷いたやうで、霜に飽いた木木の柑橘は黄金を聯ねたやうである。幸に役向の事務がないから、いくら酔つても差支はない。笙歌はあつても矢張詩を吟することをやめない。かくて十隻の畫船をば洞庭の山の麓の湖水の真中に碇泊させた。

揀貢橘書情

貢橘を揀び情を書す

洞庭貢橘揀宜精。洞庭橘を貢す揀ぶこと宜しく精なるべし、
太守勤王請自行。太守王に勤め請ひて自ら行く。
珠顆形容隨日長。珠顆の形容日に隨ひて長じ、
瓊漿氣味得霜成。瓊漿の氣味霜を得て成る。
登山敢惜驚駘力。山に登りては敢て驚駘の力を惜まんや、
望闕難伸螻蟻情。闕を望みては螻蟻の情を伸べ難し。

【字解】 (一) 太守 刺史。樂天自ら謂ふ。
(二) 珠顆 珠の如き橘の實。
(三) 瓊漿 橘の中に含まれてゐる甘い汁。
(四) 驚駘 鈍馬。
(五) 螻蟻 けら、あり。

疎賤無由親跪獻。疎賤親ら跪きて獻するに由無し、
願憑朱實表丹誠。願くは朱實に憑りて丹誠を表せん。

【六】朱實 赤い實。橋をいふ。

【題義】書經の禹貢に、揚州、厥包橘柚錫貢」とある。錫命を待つて天子に橘柚を貢するといふ意である。洞庭（湖南省のとは別なり）は揚州に屬してゐる。この橘を貢として獻納することは、太古からの習慣であつたことがわかる。此詩は貢として獻納すべき橘を揀ぶに就いて感ずる所を述べたのである。

【詩意】洞庭から橘を貢として納めるに就いては、十分に選んで差上げねばならないので、刺史が自ら請うて直接に其事に當るのである。橘の實は日増しに大きくなり、甘い汁は霜を経て益々多くなる。山に登りては敢て足の弱きを厭はず、宮闕を望んで微衷の效し難きを嘆ずる。微賤の身で親ら闕下に跪いて獻上することは出来ないが、責めて此橘を借りて赤誠を表さうと思ふ。

夜泛陽陽入明月灣即事寄崔湖州

夜陽陽に泛び明月灣に入り、事に即いて崔湖州に寄す

湖山處處好淹留。湖山處處淹留するに好し、
最愛東灣北鵞頭。最も愛す東灣北鵞頭の頭。

【字解】【一】淹留 久しく留ること。

【三】掩映 うつりあふ。

【三】鵞脚 鵞の脚の如く竿の黒き意。

【四】茶山 湖州に在る山の名。崔太守は湖州刺史崔玄亮。

掩映橘林千點火。掩映せる橘林千點の火、
泓澄潭水一盆油。泓澄たる潭水一盆の油。
龍頭畫舸銜明月。龍頭の畫舸は明月を銜み、
鵞脚紅旗蘸碧流。鵞脚の紅旗は碧流に蘸す。
爲報茶山崔太守。爲に報す茶山の崔太守、
與君各是一家遊。君と各一家の遊。

晉吳興每春茶山之遊、油入太湖、美意溢矣。故云。

【題義】夜陽陽（陽の名）に舟を泛べて明月灣（吳縣洞庭の西山に在り、吳王嘗て月を此に遊ぶ）に入り、觀る所の景を敘して湖州刺史崔玄亮に寄せた詩である。

【詩意】湖山には流連するに宜しき場處がいくらかもあるが、中でも明月灣の陽陽のあたりが最もよい。そこは橘の林が、千點の火のうつりあふが如くに實が結つて居り、潭が澄みわたつて油を湛へたやうである。龍頭を畫いた船が明月の光を帯び、黒塗の竿の紅旗が碧流にうつつてゐる。かかる好い景色を見たので君に報告するが、これでこそ君と僕と各得意の遊をしたといへる。

泛太湖書事寄微之

太湖に泛び事を書して微之に寄す

煙渚雲帆處處通

煙渚雲帆處處に通ず

飄然舟似入虛空

飄然として舟は虛空に入るに似たり

玉杯淺酌巡初匝

玉杯淺酌巡初めて匝り

金管徐吹曲未終

金管徐ろに吹きて曲未だ終らず

黃夾纈林寒有葉

黃夾纈の林は寒くして葉有り

碧琉璃水淨無風

碧琉璃の水は淨くして風無し

避旗飛鷺翻翻白

旗を避くる飛鷺は翻翻として白く

驚鼓跳魚潑刺紅

鼓に驚く跳魚は潑刺として紅なり

澗雪壓多松偃蹇

澗雪壓すること多くして松偃蹇

巖泉滴久石玲瓏

巖泉滴ること久しうして石玲瓏

書爲故事留湖上

書して故事と爲して湖上に留め

所見勝景多記
在湖中石上

吟作新詩寄浙東

吟じて新詩と作して浙東に寄す

【字解】(一)巡 次次に杯をすすこと。

(二)金管 笛。

(三)黃夾纈 黄色のしほり葉。

(四)潑刺 魚のはれる貌。

(五)偃蹇 驕傲の貌。

(六)玲瓏 すきとほる。

(七)浙東 越州。元稹の居る處。

軍府威容從道盛

軍府の威容は盛なりと道ふに従す

江山氣色定知同

江山の氣色は定めて同じきを知る

報君一事君應羨

君に一事を報す君應に羨むべし

五宿澄波皓月中

五たび宿す澄波皓月の中

【題義】太湖(江蘇・浙江二省に跨る湖水)に舟を泛べて遊んだ事を敘して元稹(字は微之)に寄せた詩である。

【詩意】雲霞の罩めた渚を乗りまはせば、舟は飄然として空中を飛翔するやうである。舟の中ではさしつおさへつ酒酌みかはし、玉簫金管を吹き鳴らして樂み、木の葉が色づいて黄色のしほり葉のやうな林や、碧琉璃のやうな水を見ながら進めば、旗を避けてひらひらと白鷺が飛び起ち、鼓の音に驚いて魚がびちびちと跳り、幾年か雪に壓迫されて來た澗の松が偃蹇として、泉の湧き出る所の巖石が玉の如く玲瓏としてゐる。余は此等の勝景に接する毎に文を作り石に刻して後日の記念となし、又詩を作つて君に寄せるのである。君の役所の威風は僕に比して固より盛ではあらうが、江山の景色は恐らく優劣はあるまい。今この遊を賦して君に報じたならば君は定めて羨むであらう。何がさて澄波皓月の中に五晩も宿つたのだから。

題新館

新館に題す

曾爲白社羈遊子。曾て白社羈遊の子たり、
 今作朱門醉飽身。今は朱門醉飽の身と作る。
 十萬戶州尤覺貴。十萬戶の州は尤も貴きを覺え、
 二千石祿敢言貧。二千石の祿は敢て貧しと言はんや。
 重裘每念單衣士。裘を重ねては毎に單衣の士を念ひ、
 兼味常思旅食人。味を兼ねては常に旅食の人を思ふ。
 新館寒來多少客。新館寒くして來る多少の客、
 欲回歌酒暖風塵。歌酒を回らして風塵を暖めんと欲す。

【字解】(一) 白社 地名。今の河南省洛陽縣の東に在る。羈遊は行旅。(二) 朱門 朱塗の門。(三) 十萬戶州 蘇州をいふ。前の自到三郡齊、僅經三日云々の時に、版圖十萬戶、兵衛五千人とある。(四) 二千石 刺史の俸祿。(五) 單衣士 貧窮にて衣の單薄なる人。(六) 兼味 珍味を幾種類もたべること。(七) 旅食 たびすまひ。(八) 多少 多くの旅客。(九) 風塵 行旅の塵をいふ。

【題義】 新館に題した詩である。

【詩意】 自分も以前は白社に羈遊する身であつたが、今は蘇州刺史として朱門に醉飽する身分になつた。十萬戶を統治するのは自分ながら貴きを覺え、二千石の祿を戴いてゐるからには敢て貧乏だとは謂はない。裘を重ねて著る毎に貧士の身の上を念ひ、珍味佳肴をならべ立てて食ふ毎に旅住の人を

哀れに思ふ。今この新館が出来たから、寒い時節に多くの旅人がたよつて來たら、歌酒を催して旅の憂さを慰めてやらう。

西樓喜雪命宴

西樓にて雪を喜び宴を命す

宿雲黃慘澹。曉雪白飄颻。
 散麪遮槐市。堆花壓柳橋。
 四郊鋪縞素。萬室甃瓊瑤。
 銀槎攜桑落。金爐上麗譙。
 光迎舞妓動。寒近醉人銷。
 歌樂雖盈耳。慙無五袴謠。

【字解】(一) 宿雲 宵から張りつめた雲。慘澹は陰鬱な貌。(二) 飄颻 風にひるがへる。(三) 散麪 うどん粉をちらす。槐市は槐の並木の下で開く市場。(四) 縞素 白絹。(五) 瓊瑤 たま。六 麗譙 酒樓。桑落は酒の名。(七) 麗譙 高樓の美麗なるもの。(八) 五袴謠 後漢の廉范、字は叔度、蜀郡太守となる。民之を歌つて曰く、廉叔度、來何暮、不樂火、民安作、昔無襦、今五袴と。

【題義】 蘇州の西樓で雪の降るのを喜び酒宴を命じたことを述べた詩である。

律詩 題新館 西樓喜雪命宴

【詩意】宵から黄色な雲が陰鬱に屯してゐたが、曉になつてひらひらと白雪が降つて来て、餛飩粉をふりまくやうで市場も見えず、柳の橋の上にも花のやうに積つた。四方の郊外まで白絹を敷き詰めたやうになり、萬家の薨は玉のやうに美しい。因つて銀の樽に酒を入れ、火爐を樓上に据ゑさせて飲んだ。やがて舞妓を迎へて一層光を添へ、流石の寒さも醉人をば避けて侵さない。ただ恥かしいことは、歌樂は耳に盈つれども、善政がないから、五袴の謠を聞かれないことだ。

新栽梅

新に梅を栽う

池邊新種七株梅

池邊新に種う七株の梅

欲到花時點檢來

花時に到らんと欲して點檢し來る

莫怕長洲桃李妬

長洲桃李の妬を怕る莫く

今年好爲使君開

今年好し使君の爲に開く

【字解】(一) 點檢 しらべる。

【三】長洲 苑の名。江蘇省吳縣の西南に在る。

【三】使君 刺史の稱。樂天自ら謂ふ。

【題義】新に梅を栽ふたことを述べた詩である。

【詩意】池の邊に先頃七本梅を栽ふた。花の時節が近づいたので行つて様子を見た所が、長州の桃李の妬をも怕れず、今年に使君の爲に見事に咲いた。

酬劉和州戲贈

劉和州の戲に贈りしに酬ゆ

錢塘山水接蘇臺

錢塘の山水蘇臺に接す

兩地褰帷愧不才

兩地帷を褰げて不才を愧づ

政事素無爭學得

政事は素より無ければ争でか學び得ん

風情舊有且將來

風情は舊より有れば且將來来る

雙蛾解珮啼相送

雙蛾珮を解きて啼きて相送る

五馬鳴珂笑却回

五馬珂を鳴らして笑つて却回す

不似劉郎無景行

劉郎が景行無く

長拋春恨在天台

長く春恨を抛つて天台に在るに似す

【字解】(一) 錢塘 杭州の西湖をいふ。蘇臺は蘇州。

【三】兩地 杭州と蘇州。

【三】雙蛾 美妓をいふ。珮は腰に佩ぶる飾の玉。

【三】五馬 刺史の馬。珂はくつわ。却回 退くこと。

【三】劉郎 漢の劉晨。景行は高祖の德行。

【三】天台 山の名。今の浙江省天台縣の北に在り。

劉晨天台山に入りて妻を探り、二女子に遇ふ。留ること半年にして歸らんことを求む。家に抵れば已に七世なり。

【題義】和州(今の安徽省和縣)刺史劉禹錫の戲に贈つた詩に酬いたのである。

【詩意】余は杭州と蘇州とに刺史となつたが、常に身の不才を愧ぢてゐる。政事上の手腕は先天的にないのだから今更學ばんやうもないが、人情だけは舊から持つてゐて今も失はない。されば常に美妓に慕はれて、珮を解いて泣いて送られたり、馬に乗り珂を鳴らして笑つて歸つたりする。かの劉晨(暗

に劉禹錫に喩ふが確な徳行もない癖に、春恨を抛つて天台山に入り、美人に迷つたのとは大分趣がちがつてゐる。

戲和賈常州醉中二絕句

戲れに賈常州の醉中の二絶句に和す

聞道毗陵詩酒興 聞道らく毗陵詩酒の興

【字解】(一) 毗陵 常州なり。今の江蘇省武進縣治。(二) 姑蘇

近來積漸學姑蘇 近來漸を積みて姑蘇を學ぶと。

蘇州。時に樂天は蘇州刺史たり。

鬢頭新令從偷去 鬢頭の令偷み去るに従す、

【三】 鬢頭 頭をおほひて蓋む。新令は酒令。酒令とは、負けたる者に

刮骨清吟得似無 骨を刮く清吟似たるを得るや無や。

鬢杯を飲ましめなどする酒席の座興。

【題義】 戲れに常州刺史賈氏の醉中の二絶句に和した詩である。

【詩意】 聞けば君の詩酒の興は、段段我に倣つてゐるさうであるから、吾が新酒令も君の偷み去るに任せて、いくら真似ても構はないが、骨を刮くやうな我が清吟を真似る事は恐らく出来まいと思ふ。

(一)

(二)

越調管吹留客曲 越調の管は客を留むる曲を吹き、

【字解】(一) 越調 高調の樂律

吳吟詩送煖寒杯 吳吟の詩は寒を煖むる杯を送る。

の名。管は笛。

娃宮無限風流事 娃宮無限風流の事、

【二】 娃宮 前題三絶句一を見よ。

好遣孫心暫學來 好し孫心をして暫く學び來らしむ。

【三】 孫心 賈常州の字か。

【詩意】 越調の笛は客を引留むる曲を吹き、吳吟の詩は寒さを煖める酒を勸める。我はかかる風流韻事を肆にしてゐる。君は隨意に我が爲す所を真似るがよい。

歲暮寄微之三首

歲暮微之に寄す 三首

微之別久能無歎 微之別ること久し能く歎く無からんや、

知退書稀豈免愁 知退書稀なり豈愁を免れんや。

甲子百年過半後 甲子百年半を過ぐる後、

光陰一歲欲終頭 光陰一歲終らんと欲する頭。

池氷曉合膠船底 池氷曉に合して船底に膠し、

樓雪晴銷露瓦溝 樓雪晴に銷して瓦溝を露す。

自覺歡情隨日減 自ら覺ゆ歡情の日に隨ひて減するを、

【字解】(一) 知退 樂天の弟行簡の字。

(二) 甲子 干支。歲月といふが如し。

(三) 瓦溝 瓦の合せ目。

蘇州心不及杭州。蘇州の心は杭州に及ばず。

【題義】 歳の暮に元稹（字は微之）に寄せた詩である。

【詩意】 微之は別れて久しくなるから定めて嘆いてゐるであらう。吾が弟も一向消息がないが此も愁へてゐるに違ひない。人生百年といふが自分は既に其半を過ぎ、今年も早盡きさうになつた。見れば池の水がはりつめて船底にこびりつき、樓上の雪は旭日に銷えて瓦の合せ目が露れてゐる。自分ながら日毎に歡情が減退するやうに思はれ、蘇州に居る今日の心持は杭州にゐた頃の心持とは雲泥の相違だ。

〔一〕

〔二〕

榮進雖頻退亦頻。榮進頻なりと雖も退くも亦頻なり、
與君才命不調勻。君と才命調勻ならず。
若不九重中掌事。若し九重の中に事を掌らずんば、
即須千里外拋身。即ち須らく千里の外に身を抛つべし。
紫垣南北廳曾對。紫垣の南北廳曾て對し、

【字解】 〔一〕 調勻 ひとしきりと。
〔二〕 九重 宮禁。
〔三〕 紫垣 宮禁をいふ。唐にては御書省を南舎といひ、翰林院を北舎といふ。

滄海東西郡又隣。滄海の東西郡又隣す。

雖欠結廬嵩洛下。廬を嵩洛の下に結ぶを欠くと雖も、

一時歸去作閒人。一時に歸り去つて閒人と作らん。

〔一〕 前海 青海原。
〔二〕 嵩洛 嵩山、洛水。曾洛陽の近所に在る。
〔三〕 閒人 閒人。

【詩意】 隱進するのの度度であつたが落ちるのの度度であつた。まして僕は君に比して才能運命共に劣るのであるから。併し宮中に奉仕して事を掌ることが出来ないうらゐならば、いつそ遠方に身を置く方が結句よろしい。昔長安にゐた頃には宮禁の南と北と詰所が對してゐたが、今は州を郷して刺史となつてゐる。（元稹は越州。白樂天は蘇州。）たとひ嵩山や洛水の下に廬を結ぶことは出来なくとも、同時に官を辭し去つて閒人となりたいものだ。

〔三〕

〔四〕

白頭歲暮苦相思。白頭歲暮苦に相思ふ、
除却悲吟無可爲。悲吟を除却しては爲す可き無し。
枕上從妨一夜睡。枕上一夜の睡を妨ぐるに従せ、
燈前讀盡十年詩。燈前讀み盡す十年の詩。

【字解】 〔一〕 除却 のぞく。
〔二〕 龍鍾 潦倒失意なり。校正は官名。校書郎なり。貞元年、元稹と白樂天とは同じく科第に登り、俱に秘書省校書郎を授けられ、茲に始め